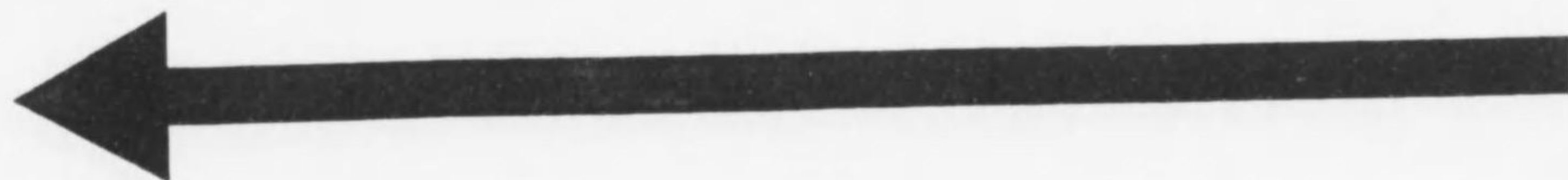


R490.32-F57
1200500767142
490.32
F57

藤井尚久編
醫學文化年表
日新書院刊



始



H-21

R 49032

F 57

参考課

醫學博士 藤井尚久 編

醫學文化年表

日新書院刊



U 2187

自序

過去と云ひ現在と云ひ未來と云ふも悠久なる時に就ての便宜上の區分では等三者は全く一聯不離のものである。醫に就て考ふる時亦其療方乃至醫學の流れ行く精神と云ふものも時代により大なり小なりの變化をなして遷り行くもので、過去、現在、未來と一貫して動いて居るものである。我國と又我國と交渉ある國外の斯う云つた醫學精神の動き、流れと云ふものを展望するには時間的配列による所謂年表の座右に在ることが便利であると同時に最も必要である。よつてこの目的に向つて數年來之が作製に努力、精進を續け來つたのであるが、其備忘録も相當多量、煩雜となつたので今後の勞作の上へ一段落の整理が必要となつて來た。時あたかも皇紀二千六百年の記念すべき佳き歳にも當り、且又大東亞新秩序建設の新しき發展使命を達成すべき躍進日本の一大轉換期を劃する世紀革新の時でもあれば、茲に愆愆さるるまま試稿を纏めて一と先づ世に出し大方諸彦の叱正、示教を仰ぎ、やがては「より良き醫學年表」の出現を促がす機縁ともなれば幸甚と存じたのである、又之によりて、假令夫は一部の學徒にしても日本醫學の性格を幾分たりとも感得せしめ、以てつ日本醫學乃至科學文化の發展に何程かの寄與でも出來たれば編著者の本懐之に過ぎたるものがないと考へて居るものである。

皇紀二千六百年
昭和十六年十二月

編著者 識す

追記

我國醫學文化の絢爛たりし大正年間に醫學を習らひ、同末年近くより不肖ながら學生に醫學（內科學）を講ずるやうになつた編著者は、夫は當然とは云へ、現在醫學の形貌を眺めて深く考へさせられるものがあつた。我々の醫學は「どうして斯くなつたか」、而して「將來どうなるべきか」、又「どうあるべきか」と云ふやうなことを眞剣に考へさせられた。

斯う云つた動機で日本の醫學、而して世界の醫學への所謂文化史的考察を私かに始めた。そこで讀書の際心當りの諸事項を備忘録に記載することにした。偶々恩師の雲莊・入澤達吉先生の年譜作製を委囑されるに及んで、慶應、明治、大正、昭和の年代に於ける資料を一と先づ整理したのを縁として、年來の宿望であつた日本及び世界醫學の文化史的展望に便なる年表と云つたものを、断片的でも良いから少し具體的に取り纏めて見たいと云ふ氣になり、一氣呵成に拙速と云つた行き方ではあるが、相當拮据強行を敢へてし、改めて古い昔にも遡り現在への連續を辿つたのである。

つらつら我國醫學の發達の跡を辿り見るに、開闢の神・人時代より療方の備はりしことは既に古記・紀にも誌されて居るが、此大和民族固有の醫方は又上古より朝鮮、支那の大陸醫方を輸入同化し克く之を合はせて、我醫方を滋養、補強した。近世に入るやポルトガル、イスパニア（スペイン）等の所謂南蠻國、續いて和蘭より西洋醫方（所

謂蘭方）も渡來し、江戸幕府末期には又開國通商と共に歐米諸國の醫學も我國に浸潤し來つた。更に明治初年に至りては我國先覺醫家は當時世界に潮を唱へて居た獨逸醫學に範を採つて、我國醫制を改新せんとして彼地の醫學を輸入培養した。其間我國醫人は克く之を消化吸収すると共に他の歐米諸國の醫學をも同化して自家藥籠中のものとなした。斯くして古へより今に至る間、よく洋の東西に於ける療方、醫學を吟味、觀照したる我國醫學は、茲に圓滿、総合的な特異の發展をなし、今日世界に於ける醫學一等國の一として東亞に君臨するに至つたのである。

由來我國人は獨り醫方に限つたことでなく、克く外國の優秀文化を取り入れて之を同化し、自家滋養劑として自體を強壯にし、其精神をも雄渾ならしめ、以て特異の發展をなす性能をもつて居る。印度文化の精華とも云はるべき佛教——勿論之は主として支那を経て我國に輸入されたが——又支那文化の粹としての儒教（身を修め國を治むる、道徳と政治を兼ね教ふる學）の如きも共に其發祥地に於ては發展せず、今に其形骸をのみ留むるに過ぎざるに反し、之を攝取、同化したる我國に於ては驚くべき短日月の間に有終の美果を收めて居る。我國精華たる大和魂、武士道の如きも我國肇國以來の「神ながらの道」に是等儒教、佛教によりて思想的にも道徳的にも確乎たる根義形式が付けられて、日本精神の眞髓を確乎たらしめ、之が體制を具備せしめたるものとも考へられるのである。是は又單なる模倣、追従によりて成就されたものではない。我國民族素質に優れたるものあるを斷言せしむるものである。古來低級文化民族にして高級文化を模倣し、之に追従して其國を亡ぼしたる例は人類史上に歴然と誌されて居る處である。其他我國假名の發明、版畫の發達、日本刀の鍛錬等の成果を考ふる時、實に思ひ半ばに過ぎるものがあるのである。

我國の美術、文藝、思想、宗教等の精神文明は特異の融合、同化性能を有する我國國民の文化の精華として世界に

其優秀、冠絶を誇り得るものであるが、所謂「科學」と云ふ物質文明の分野に於ては東洋文化の通弊であるが、我國は歐米諸國より遙かに遅れて出發して居り、近世末代に至りて驚嘆に値する迅速さを持つて進歩、發達はしたが、遺憾ながら未だ以て完璧を期し難いのである。茲に於てか、大東亞建設の新しき使命を帯びたる躍進日本に科學研究、科學する心は國運伸長、民族發展の大本の上に改めて最も高調さるべきものとなつて來たのである。斯う云つた理由で此國家重要時に當り「日本科學史」の編纂が、帝國學士院により公に計畫されるに至つたのも至極尤もなことと思はれる。綜合應用科學たる醫學も茲に乾坤一擲、過去より現在に至りし經過を充分檢討し、而して現在より將來にと賢明なる洞察を敢行して、世界的觀念の上に立つ日本醫學に對する新しき認識と自信とを以て勇猛心を喚起して、元氣發潮と躍進すべき絶好の機會到來とも考へられるのである。發見、發明の如き獨創と云はれるものや、新機軸と稱されるものも、之は又決して偶然に發生するものでない。過去のものの改良され、又一段と進歩したる現在のものである。斯くして過去より現在へと永劫未來に向つて推し進み行くのが人類文化發展の本義で、「今日」より「明日」に希望の光明を期待するのが人生の歡喜でもある。

本書中に収録する記事に就ての誤謬のことであるが、編者としては出来るだけ忠實に成書、成文中より涉獵、抜粹して後世を誤らしめないやう充分努力した積りではあるが、我國及び東洋諸國に於ては年號に類似する字の多い爲意外の誤入をなし居るものも無いとは保し難く、一方歐米西歷年の數字の誤りで意外の錯記も無いとは云ひ難い。然し斯う云つた誤りは又比較的確實と思はれて居る成書にも尙存して居ることがある。此意味に於ても精確なる年表の存在する必要が痛感されるのである。次に重要事にして脱漏のあることである、之には編者の淺學、寡聞にして未だ及ばずして行へる罪も多々あるが、一部には年代の不精確、或は一致せざるもののある爲であるものがある。

是等は後日史實が穿鑿されて正確なる記載がなされるべきものであると信ずる。然し是等は錯誤のことを懼れて居ては到底「年表」のやうなものが出来ないので、編者は決然、誤謬の罪を一身に引受けて之が「皮切り」を敢行し、而して後日諸先達の訂正、増補を願ひ一日も早く我國醫學の面目にかけてもの「より良き醫學年表」が作製されんことを切望して已まない次第である。この意味に於て諸大家に序文等を強要して拙著を飾り、以つて迷惑を他に及ぼすと云つた危険を避けたのである。

第一部、醫學年表の上段に於ては年を逐うて具體的に事件を叙して、我國醫學の變遷、推移の跡を辿らしめるを目的とし、下段には外國に於ける重要な醫事項を掲げ、彼地の醫學發達の過程を知らしむると共に、彼我の文化交流の關係を偲ばせ、世界觀の上からの日本醫學の性格を知らしめる一方便とした。斯くして又世界的觀念に於ける日本醫學精神の昂揚に示唆をも與ふれば望外の喜びである。

第二部には我國歴代に於ける同時に生存、活躍せる著名なる醫人を録して各時代に於ける醫學思想の動き等を知らしめた。

第三部には我國著名醫の各流派に依る系譜を記載し、支那、西洋に於ける學派の夫を附録とした。之は各流派の人々と其推移を表示することは、又時代と共に醫學思想の移り行く様子を知るに便なりと考へたからである、時代は人を作り、人は又時代を成すと云ふ糾へる繩の如き轉變の狀を窺ふの方便ともなれば、編者の勞苦の徒爾ならざりしを喜ばしめるものである。

本書に收むる記事を採録せし原本の記載は煩雜を避ける爲め之を省略した。唯是等成書、文献の大部分は其發行年に隨つて本年表中に登載して敬意を表した。然し箇々の雜誌等は其數夥き爲め之が列舉は省いた。

次に本書が愈々出版されるに到る迄には多數の方々の援助によつたことを銘記せざるを得ないのである。

日新醫學社長、山谷太郎氏は嚮に我國醫學史の建設者とも云ふべき碩學、醫學博士、文學博士富士川游先生の快著「日本醫學史」の決定版を發行されたが、夫に續いて本書を物資節約の要請さるる此非常時局下にも拘らず幾多の困難を排して出刊せしめられた。著者は氏の俠氣と厚意に對して萬腔の敬意を拂ふものである。又本書出版に關し種々配慮、督勵以て仕事を促進せしめられたる日新書院同人中城龍雄氏、又之に兼ねて校正の勞を取られたる富澤龍雄氏、佐藤敏武氏に深く感謝する次第である。

本稿の清書、整理に當りては學弟、福田行雄君の手を煩したることを感銘し忘るることが出来ない。

昭和十四年三月本書の試稿が「斷面年表」として「醫事公論」紙上に連續登載されるや、日本醫學會理事長藤浪剛一博士をはじめ、多數の諸賢より懇篤なる激勵の辭や親切なる教示を下され編著者を感じせしめられたることを茲に厚く謝するものである。

又、三共株式會社が昭和五年、六年に亘りて高峰讓吉博士謝恩紀念基金による研究補助費を著者に授與されたことに深厚の謝意を表し、當時の同社專務取締役古田宗二郎氏及び同社員矢野重弘氏に感謝の辭を捧げる喜びを陳べさせられたい、と云ふのは其當時著者は未だ自から主宰する研究室を持たなかつたので、光榮の研究補助金を私的行爲に使用することも如何と考へ、其大部を余の勤務する東京醫學專門學校に教育振興の一端にと學校研究費として之を提供した。然しその授與された著者個人の學的責任感、常に之に對する感謝への具體的表現を忘れしめなかつたのである。茲に粗笨ながら出來上つた本書、比較的自分本位で作られたものでないこの勞作の出來に於て應酬の意を受けて頂きたいのである。斯くして本書原稿は、資料の蒐集も、記事の採擇も主として自分の勞作によつ

たことは、一面又顧みて微かなる喜悅の情に驅られるものがあるのである。上述の理由で本書の内容は自家藏の資料に據つたが爲め、又公務の餘暇を竊んでの拮据によつたが爲め、取材範圍も偏狹の譏を免れないと思つて居る。然る上は著者は今後益々精進して大成を期するは勿論であるが、大方の諸賢の叱正、示教を仰ぎ、以つて一日も早く確實なる完備せる「醫學年表」が大成して、世の後進を益する日の近からんことを祈つてやまない次第である。

大東亞戰爭始まりて一ヶ月の 昭和十七年一月

編 著 者 誌 す

凡例

- 一、本書は第一部醫學年表、第二部我國歴代醫人録、第三部醫家諸系譜の三部から成つて居る。
- 一、第一部醫學年表に於ては上段には我國文化に關する重要事項と廣義の醫學に關する諸件を擧げ、下段には同年に於ける歐米、友邦等諸外國の醫學乃至醫事の重要事項を拾記して地球上の同時出來事を知らしめた。而して劃期的と思はるる重大事項は活字を大にし比較的重要なものには△印を附して閱覽に便ならしめた。
- 一、年次を逐うての諸事列記は、之を索り求むれば一定事實の因りて起りし過去の縁を廻り知らしめ、又依りて招來されたる後代への影響、結果を知らしめるものではあるが、隨所に又之が解説を挿入して説明を加へて見た。
- 一、政治、經濟、思想、宗教等、殊に醫學以外の諸科學に關する重要事項は力めて之を網羅した、而して歴史的指標となる重大事項には※印を附して容易に其時代を想起せしむるやうにした。之は醫學は夫自體としてのみ變遷、發達するものでなく、上述諸關係の要素によりて互に影響される文化の一翼として動くものであるからである。

一、外國名には簡を尙ぶ意にて多く略字を用ひたが、之も在來一般に用ひられて居る例に従つた。即ち、獨(ドイツ)、澳(オーストリア)、伊(イタリア)、蘭(オランダ)、葡(ポルトガル)、西(スペイン或はイスパニア)、米(アメリカ)、佛(フランス)、英(イギリス)、丁(デンマーク)、波(ポーランド)、瑞(スイス)、瑞典(スウェーデン)、

白(ベルギー)、露(ロシア)、那(ノルウェー)等の如くした、支那は隋、唐、明、清、中華民國と其時代による統治國名に隨つて記載した。

一、我國醫人名の訓みは主として各個人の傳記、人名辭典等より之を採りて振假名を付けたが、之は第二部我國歴代醫人録及び第三部醫家諸系譜に精くして第一部醫學年表には紙面の都合上之を簡疎にした。

一、歐米人名の訓み方は字音訓みとなしたるものもあるが、其生國或は其人の活動せし國の語訓に隨つたものもある。

一、第二部、我國歴代醫人録には我國歴代に於ける正、野の史籍に上りし主要なる醫人を列記して我國醫人の時代的關聯への想起に若干の便益、示唆を與へた。又我國に歸化したる或は在留せし外國醫人も附記した。「」を以て括みたる記事は後代に於ける記事を便宜上繰上げ記載せるものである。

一、第三部、醫家系譜は我國に於ける諸流派系譜を主とし、學系を宗としたが、家系を加へたものもある。又支那に於ける各時代の名醫並に其著述、歐米に於ける著名醫人の學系を附録した。

一、本書に收録する事項の索引は丁寧に之を作製すれば夫自體で既に龐大なる紙幅を要し、又簡疎なる索引は實用に適せずと云つたわけであり、又一方本書も未定稿の域にあるので目次を比較的詳細にして索引を設けることを本版に於ては省略した、讀者幸に諒せられよ。

醫學文化年表 目次

我國の醫藥神 大己貴神 少彥名神……………一
支那の醫藥祖 炎帝神農氏 黃帝軒轅氏……………二
西洋の醫聖 ヒポクラテス……………三

日本醫學年表

大和朝廷時代……………四
 神武天皇—大化の新政
我國と朝鮮との交通……………一一
我國と支那との交通……………一六
律令制定時代……………一九
 天智天皇十年—和銅二年
奈良朝時代……………二〇
 和銅三年—延暦二年

平安朝時代	二四
<small>延暦三年—建久二年</small>	
遣唐使	二七
陰陽道の流行	二九
鎌倉時代	三三
<small>建久三年—元弘三年</small>	
鎌倉時代の醫僧	三七
吉野朝時代	四〇
<small>建武元年—元中九年</small>	
室町時代	四二
<small>明德四年—元龜三年</small>	
遣明使	四三
西洋醫學の輸入(第一期)	五二
<small>南蠻流外科の胚胎</small>	
安土、桃山時代	五三
<small>天正元年—慶長四年</small>	
金、元醫方の宣傳、流布	五三
朱印船と海外發展	五七

江戸時代	五七
<small>慶長五年—慶應三年</small>	
鎖國令、和蘭との交通	六四
西洋醫學の輸入(第二期)	
古醫方の樹立と名古屋玄醫	七六
「解體新書」の出版	九二
漢蘭折衷派	九二
西洋醫學の輸入(第三期)	一三八
歐米諸國との交通	
明治時代	一五〇
<small>明治元年—同四十五年</small>	
西洋醫學の輸入(第四期)	一五五
獨逸醫學の輸入	
日本醫學の獨立	一九九
大正時代	二三九
<small>大正元年—同十五年</small>	
日本醫學の整備擴充	二四三

昭和時代(試稿).....二七三
昭和二年—同十三年迄

世界醫學年表

西曆紀元前六六〇—西曆六七〇.....四
(大和朝時代)
支那、印度、希臘、羅馬、アレキサンドリア、埃及、アラビア等
西曆六七一—七〇九.....一九
(律令制定時代)
サラセン時代、唐時代
西曆七一〇—七八三.....二〇
(奈良朝時代)
サラセン時代、唐時代
西曆七八四—一一九一.....二四
(平安朝時代)
伊太利(サレルノ醫學校)、アラビア、羅馬法王時代、宋時代
西曆一一九二—一三三三.....三三
(鎌倉時代)

十字軍時代、歐羅巴各地に大學立つ、金、元の醫學興る
西曆一三三四—一三九二.....四〇
(吉野朝時代)
元、明の時代、文藝復興期、僧侶醫學と煩瑣哲學
西曆一三九三—一五七二.....四二
(室町時代)
文藝復興期、宗教改革期、航海探検期、明時代
西曆一五七三—一五九九.....五三
(安土・桃山時代)
航海探検時代、和蘭、英吉利の新興、明時代
西曆一六〇〇—一八六七.....五七
(江戸時代)
西力東漸、資本主義發生、近代國家形成の時代、明、清時代
西曆一八六八—一九一一.....一五〇
(明治時代)
近代諸國家其文化を競ふ
西曆一九一二—一九二六.....二三九
(大正時代)

二十世紀文明
第一次世界大戰（一九一四—一九一九）

西曆一九二七—一九三八……………二七三
（昭和二年—同十三年）

我國歷代醫人錄

大和朝時代……………	三〇三
律令制定時代……………	三〇五
奈良朝時代……………	三〇五
平安朝時代……………	三〇七
鎌倉時代……………	三一三
吉野朝時代……………	三一五
安土・桃山時代……………	三一八
江戸時代……………	三一九
明治時代……………	三四四

醫家諸系譜

日本醫學諸流派系譜

(一) 皇漢醫方家系譜

一、和氣氏系譜……………	三四六
二、丹波氏系譜……………	三四九
三、室町時代の醫家系……………	三五一
坂九傳、祐乘坊義存、竹田昌隆	
四、李、朱醫方派（後世家）……………	三五三
田代三喜、曲直瀬道三及其門下	
五、劉、張醫方派（後世派の別派）……………	三五五
饗庭東庵、味岡三伯及其門下、林市之進、香月牛山	
六、古醫方派……………	三五六
永田健本、名古屋玄醫、後藤良山、奥村良竹、松原慶輔、北山友松、惠美三白、畑黄山、麗取秀次、吉益東洞	
七、漢醫方折衷派（考證派、雜方家）……………	三六一
香月牛山、望月鹿門、山田圓南、福井楓亭、和田東郭、多紀氏派（躰壽館、醫學館）	
八、漢蘭折衷派……………	三六三
山脇東洋、賀川玄悅、水原三折、片倉鶴陵、カスバル流外科、（伊良子、大和、華岡氏、華岡青洲、其他の漢蘭折衷家（本間棗軒、石阪桑龜、橋南谿、山田大圓、柚木太淳、衣關順庵、本庄普一、上田公鼎、河津省庵）	

九、其他の醫家系譜……………三六七

半井家、乘附家、田村家、安藝家、西家、南條家、板坂家、奈須家、久志本家、馬杉家、河野家、曾谷攝科、岡家(兒科)、武田家、笠原家(穂積流眼科)、池田家、小野家、服部家、石丸家、伊東家、吉田家、淺井家、有馬家、蛭田流産科、山科家、建部家。

(二) 痘科系譜

一、戴曼公……………三七一

二、池田家……………三七一

(三) 鍼(灸)醫系譜

一、杉山流……………三七二

二、吉田流……………三七二

三、駿河流……………三七二

四、夢分流……………三七三

五、其他……………三七三

(四) 本草學者系譜

一、貝原益軒……………三七四

二、稻生若水……………三七四

三、松岡恕庵……………三七五

四、小野蘭山……………三七五

五、阿部將翁、田村藍水……………三七六

六、洋方本草家學系……………三七六

(澤野忠庵、野呂元丈、青木昆陽)(宇田川椿實、同椿菴、飯沼愨齋、岩崎灌園、伊藤圭介)

(五) 洋(蘭)方家系譜

一、南蠻、和蘭流外科……………三七八

二、栗崎流外科……………三七八

三、楢林流外科……………三七八

四、嵐山、桂川家系……………三七八

五、吉雄氏學系……………三七八

六、鳩野宗巴系……………三七九

七、麻田、高橋氏系……………三七九

八、青地氏系……………三七九

九、前野良澤學系……………三八〇

一〇、杉田、大槻氏學系……………三八一

二、杉田氏家系……………三八一

三、大槻氏家系……………三八一

三、桂川甫周學系……………三八一

一、宇田川氏學系	三八一
二、江馬氏系	三八二
三、小石氏學系	三八二
四、稻村三伯學系	三八三
五、藤林普山學系	三八三
六、新宮涼庭學系	三八三
七、吉田長淑學系	三八三
八、足立長鶴學系	三八四
九、坪井信道學系	三八四
十、箕作阮甫學系	三八五
十一、佐藤泰然學系	三八五
十二、伊東玄朴學系	三八六
十三、緒方洪菴學系	三八七
十四、長崎和蘭商館醫師と其就學者の主なるもの	三八八
ケンプエル、トウシベルグ、シーボルト	
十五、長崎養生所招聘醫官及び其就學者の主なるもの	三九一
ボンベ・ファン・メールデルフオールト	

元、長崎精得館招聘醫官	三九三
ボードイン、マンズフェルド	
三〇、英人醫、ウイリス學系	三九三
支那歷代著名醫竝に其著書一覽	
太古、殷、周	三九五
西漢、東漢、三國	三九六
西晉、東晉、南北朝	三九七
隋	三九八
唐	三九九
五代、宋	四〇〇
遼、金、元	四〇三
明	四〇五
清	四〇八
西洋に於ける近世醫學者系譜	
一、Sylvius (Dubois), Andreas Vesalius & J. Harvey	四一三
二、Ambruaise Paré	四一三

三	Galilei と其門下	四一三
四	Sylvius (Franz de la Baë) と其門下	四一四
五	Malpighi と其門下 (病理解剖の産筋)	四一四
六	Göttingen 學派と Wien 學派の起源 Albrecht von Haller と Herman Boerhaave	四一四
七	Cullen と Brown	四一五
八	John Hunter と其流派 Edward Jenner	四一五
九	Beil と其門下	四一六
一〇	Bordeu 門下の佛蘭西學派	四一六
一一	Desault と其學派	四一六
一二	Corvisart と其門下	四一七
一三	Lacenne と其門下	四一七
一四	Berlin (柏林) 學派	四一七
一五	Johannes Mueher と其門下	四一八
一六	Weber 兄弟	四一九
一七	Neue Wiener Schule (新維納學派)	四一九
一八	Langenbeck と其門下	四二〇
一九	Magenie と其流派	四二〇

二〇	Diffenbach と Langenbeck	四二〇
二一	Stromeyer と其門下	四二〇
二二	Schönlein と其門下	四二一
二三	Bischoff と其門下	四二一
二四	Hebra と其門下	四二一
二五	Traube と其門下	四二一
二六	Ferriehs と其門下	四二一
二七	Virchow と其門下	四二二
二八	Pasteur と其門下	四二二
二九	Charcot と其門下	四二二
三〇	Guyon と其門下	四二二
三一	Hoppe-Seyler と其門下	四二三
三二	Billroth と其門下	四二三
三三	Westphal と其門下	四二三
三四	Foster と其門下	四二三
三五	Schmiedelberg の學派	四二四
三六	Koch と其門下	四二四

醫學文化年表

三、 Naunyn 及其門下.....	四二四
三、 Fischer 及 Abderhalden.....	四二四
三、 von Noorden 及其門下.....	四二四

醫學及外學



我國の醫藥神

御別名

大穴牟遲神

大穴牟遲神、大穴母智、於保御武智、大穴、大穴道、於保奈牟知等別字を以て又オホナム「ヂ」と訓ませたるものあり

大國主神

大國魂神

葦原醜男神

葦原色許男神

八千矛神

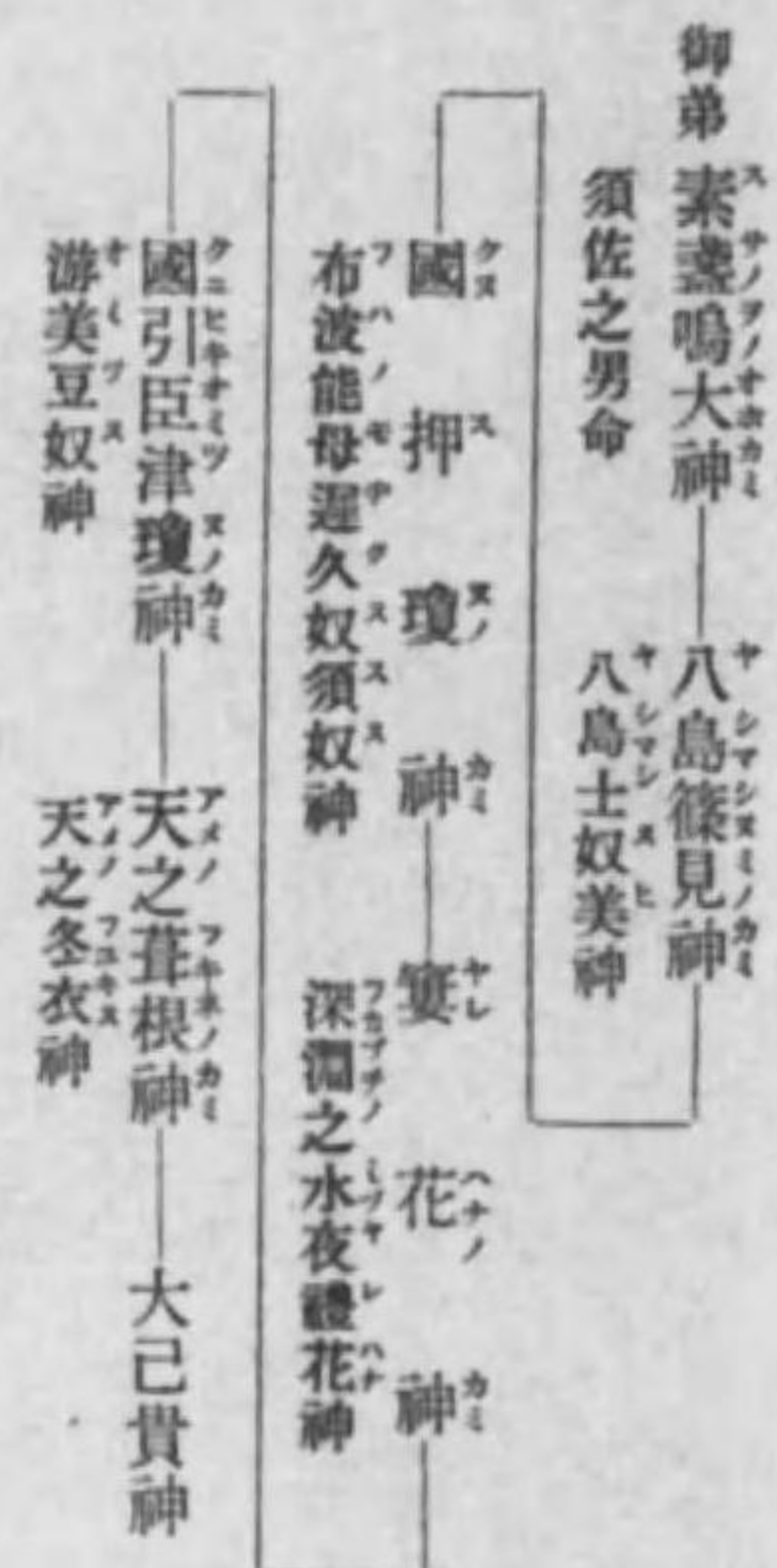
顯國玉神

大物主神

國作大己貴命

倭大物主櫛磨玉命

系譜 素戔鳴命第六代の御孫、一説に御子となす
天照皇大神



少彦名神

御別名

少名毘古那神

宿奈毘古那神

久斯神（久斯は酒又伎の意）

エミマス神（神皇產靈神の咲みます神）

惠美壽神

系譜 高皇產靈神の御子

伊弉諾命

伊弉册命

高皇產靈神（男神）

神皇產靈神（女神）



大己貴神、少彦名神、兩神の我國醫藥神としての御事績は既に古事記、日本書紀、風土記等の記載に創始し兩神を共に並べて頌へたるの句は又萬葉集、神樂等に散見さる。

「日本書紀」より（漢文を調して掲ぐ）

夫の大己貴命、少彦名命と力を戮せ心を一つにして天下を經營る。復た顯見蒼生及び畜産の爲めに、則ち其病を療むる方を定む。又鳥、獸、昆蟲の災異を攘はん爲めには則ち其禁厭之法を定む、是を以て百姓今に至るまで感恩頼を蒙ふれり。

（日本書紀は元正天皇、養老四年、奏上されたるものなり）

「萬葉集」より

大穴牟遲少名毘古那の座しけむ志都の石室は幾代經ぬらむ

（卷三 生石村主眞人）

大穴牟遲御神の造營らしし妹兄の山は見らく好しも

（卷七 柿本朝臣人麿）

大己貴少彦名の、神代より言ひ繼ぎけらく、父母を見れば尊く、妻子見れば憐愛しく愛し

（卷十八 大伴宿禰家持作歌の始句）

（萬葉集の成れる年代は確かならねど奈良朝時代に出来したる我國最古の歌集なり）

支那の醫藥祖

炎帝神農氏 Shennong (西曆紀元前二八三八—同二六九八) 或は

〔前二七三七—前二七〇五〕等一定せず

母神龍に感じて神農氏を生む。人身牛首、姜水に長ずるが故に姜姓、火徳を以て王たり、故に炎帝と云ふ。初めて木を以て農具を造り民に耕作を教ふ、故に神農氏と云ふ。初めて百草を嘗めて醫藥を作り、また五絃の瑟を作り、民に日中市をなすを教へ、八卦を重ねて六十四爻を作る。

百二十年にして死し長沙に葬らる、其子孫相傳ふること

八代、五百三十年にして黄帝の治政となる。

黄帝軒轅氏 Hwangti (西曆紀元前二六九八)

姓は公孫、有熊を國とし住めり、故に有熊氏と號す。姫水に長ぜり、故に姫を姓とす。土徳を以て王なり、故に黄帝と云ふ。

醫方書「素問」、「靈樞」各九卷合して「黄帝内經」(十八卷)は黄帝より發すと云ひ傳へらる。然れども是等の書は概ね後代漢時代に出来上りしものと思惟さる。(別稿支那歴代著名醫并其著書一覽参照)

西洋の醫聖

ヒポクラテス Hippocrates II, Hippokrates (西曆紀元前

四六〇—同三七七) (生存年間に關しては異説多し)

希臘コス(Cos)島に生まる、醫學に關する著書の世に傳はるもの數十種あり、然れども是等は後世に作られたるものの假托と信ぜらるるもの多し、又希臘にヒポクラテスと稱する者数名ありと云はる。

今日云ふ體液病理學 Humoral-pathologie を唱道す、即ち血液、粘液、膿液、黒膽液の四液ありて其配合の如何によりて健、病を將來すと云ふ。

大和朝廷時代 (一三〇五年間)

神武天皇より大化の新政まで
〔 〕内の数は西暦紀元を示す

神武天皇^{第一代}

紀元一年辛酉、西暦紀元前六六〇年正月朔日 (陽曆二月十一日)
大倭橿原宮に即位し給ふ。

日本紀元第一年とす。

同三十一年 辛卯 (前六三〇)
帝、地形を察し國を秋津洲 (アキツシマ) と名けらる。

我國上古の文化は其記録の傳はるものなき爲め詳細を知り得ざるは遺憾なり、然れども民族草創より傳承せる我國特異の「日本語」の由来を考へ、又發掘品等によりて我國上古の文化を窺ふ時其處に他と區別すべき特異性を認め、我國民族は獨自の發展を成し來りたることは又容易に首肯さるる所なり。

綏靖天皇^{第二代}

十七年 丙申 九六 (前五六五)

アッシリア・埃及・バビロニア・ペルシャ・希臘・羅馬・アレキサンドリア・新羅馬・東羅馬・サラセン時代
春秋・戰國・秦・漢・後漢・三國・晉・東晉・宋・南北朝・齊・梁・隨・唐

印度アラーマン (婆羅門) Brahmana 時代 (前八〇〇—後一〇〇〇)

東周惠王の時代

アッシリア王、アッスルバニバルの代

歐洲、希臘文化續く。

前六四四

周の襄王八年、扁鵲 (Hippokrates) 「難經」を撰す。

前六四〇—五四六或は前六二四—五五四等

希臘にタールレス (Thales) 科學的貢獻を示す。

前五七五或は前五八〇—四九七

希臘、ピタゴラス Pythagoras 生まる。(數學「マテマティコス」と云ふ語の創始者と云はる)。

前五七〇

印度とペロニアとの交通始まる。

前五六五或は五五七とも記さる。

印度、釋迦 Gautama Siddhartha 生まる。

前六世紀アトレーヤ Atreya 「生命の典籍」 Ayur-veda を撰す。

前五六四

同三十一年 庚戌 一一〇 (前五五一)

孝昭天皇^{第五代}

七年 壬申 一九二 (前四六九)

同十六年 辛巳 二〇一 (前四六〇)

希臘、寓話家イソップ Aesop 歿す。
印度、ススルタ Susruta 外科に精しく書を成す。
前五五五
支那に老子あり。
前五五一
魯の襄公二十二年孔子生まる。
前五四四
希臘人、波斯人小亞細亞の領地を争ふ。
前五〇四或は前四五〇或は四九二—四三三
希臘、エムペドクレス Empedocles, Empedokles (火水風土の四元素説者) 生まる。
前五〇〇
希臘、アナサゴラス Anaxagoras 生まる。
前四八五
釋迦牟尼入滅す (八〇)。
前四七〇
希臘、ソクラテス Sokrates 生まる。
周、越王勾踐尙存命す。
前四七五—四五九
希臘、西醫祖コス (Cos) 島のヒポクラテス Hippokrates 生まる (前四六〇—三七七)。
前四五九—三七七
希臘、哲學者デモクリトス Demokritos 生まる。原子 Atom なる語を始めて用ふ (希臘に同姓の數學者居たり)。

同二十五年 庚寅 二一〇〔前四五〕

第六代 孝安天皇

二十二年 庚戌 二九〇〔前三七〕

第七代 孝靈天皇

二十六年 丙申 三九六〔前二六五〕

孝靈天皇の御宇、秦の徐福仙藥を我國に求めんとして來

り、紀州新宮に着し、後歸化す。

同四十五年 乙卯 四一五〔前二四六〕

第八代 孝元天皇

九年 乙未 四五五〔前二〇六〕

同十七年 癸卯 四六三〔前一九八〕

第九代 開化天皇

前四五

羅馬に十人の立法官選ばる。

前四四

新ユダヤ Judaea にモーゼの法典成る。

前三八

希臘、アリストテレス Aristoteles 生まる(前三八四—三二二)。

前三七

希臘、テオフラトス Theophrastus 生まる(前三七一—二八八)。

前三七

孟子生まる(或は二八九)。

テュー、Thebae 希臘に覇を唱ふ。

前三七

希臘、プラトーン Platon 歿す(前四二七—)。

(一説前四二九—三四八)

前三三

※アレキサンダー大王の東征、印度と西洋の接觸成る。

前三〇—二七五

數學者ユークリッド Euclid

前三〇〇

△アレキサンドリア Alexandria にクロンメス Herophilus、

Herophilos あり。醫にして又「植物學書」を遺す。

前二八七—二二二

アレキサンドリアのアルキメデス Archimedes

前二六五

羅馬、伊太利半島を統一す。

前三五九

印度、アソカ(阿育)王、佛教に歸依し、病院を建て人

民を施療す。

前三五〇

アレキサンドリアのエラシトラタス Erasistratus, Eras-

istratos 人體解剖をなし生理學を研究す。

前二四六

秦王政(後の始皇帝)第一年

天下を統一し皇帝と云ふ號を初めて用ふ、威名遠く振ひ秦 Ts'in

を訛りて支那 China と呼ぶに至ると云はる。專制にして醫藥、

卜筮、農業以外の書を燒き多數の書生を坑にして異論を抑へた

り。

同二十五年(前二二三)蒙恬毛筆を發明す。

前二三四—一四九

羅馬に哲學者カトウ Partius Cato ありて又醫道に通ず。

前二〇六

※漢の項羽立つ(後の高祖)。

前二〇五

※西班牙、羅馬の所領となる。

前一五九

羅馬に水時計發明さる。

前約一五〇

支那の秦、漢時代に黃帝の作と假托されたる「素問」「靈

樞」の醫書作られたるもの如し。

十八年 辛丑〔前140〕

同三十四年 丁巳 五三七〔前124〕

第十代 崇神天皇

五年 戊子 五六八〔前93〕
國內疫病大流行す。

同四十一年 甲子 六〇四〔前五七〕

同五十一年 甲戌 六一四〔前四七〕

同五十四年 丁丑 六一四〔前四四〕

前140

※支那と歐羅巴との交通始まる。
漢の武帝、張騫を月氏に派遣す(前138—前126)。匈奴、西域、ベルシヤ諸國を巡遊して歸る。

前124

アスクレピアデス Asklepiades (或は128—156) 希臘ブルサに生まれ、ヒポクラテスの液體病理學に對し原
子病理學を唱ふ。希臘の醫學を羅馬に移したる羅馬の醫
祖と呼ばれる。

前108

※漢、古朝鮮を平ぐ。

前90

支那、漢の司馬遷の「史記」成る。

前五七

赫居世、新羅を打つ。

前四七

クレオパトラ Cleopatra 埃及を支配す。ケーザル Julius Caesar
曆の整理をなし、一年三六五日の他に四年目毎の二月を一日だけ
延ばす。

前四六

ケーザル Caesar、外國醫の羅馬自由開業を許す。隨つ
て希臘人の來集する者多し。

前四四

ケーザル Caesar 刺殺せる。

前三三

※羅馬、埃及を討つ。

前三〇

エジプトの女王クレオパトラ Cleopatra 遂に毒蛇に身を噛ませ
て自殺す。

前一八

印度と羅馬貿易盛となる(東洋と西洋との交渉)。
朝鮮は百濟、高麗、新羅となる。

西曆(一年)創まる

二九

基督 Jesus Christ 十字架上で磔刑に處せらる(或は30或は
32と云ひ一定せず)。

三〇—五〇

ツェルヌス Cornelius Celsus「ハータ」の醫師にして外
科に長ず。

同六十五年 戊子 六二八〔前三三〕

任那、蘇那易叱知を遣し初めて朝貢し我國に保護を求む(五年後
歸國す)。依りて彼地に日本府設けらる。

同六十八年 辛卯 六三一〔前三〇〕

崇神天皇崩御

第十一代 垂仁天皇

十二年 癸卯 六四三〔前18〕

垂仁天皇三十年辛酉皇紀六六一年、漢の平帝元始元年が西曆一
年に當る。

以後の「」内の數字は西曆年數を記す。

同三十二年 癸亥 六六三〔三〕

皇后日葉酢媛命崩御、尋で奉葬の日詔して埴輪(土偶)を以て殉
死に代へ永制とす(野見宿禰の發議)。

同五十八年 己丑 六八九〔二九〕

同八十六年 丁巳 七二七〔五七〕
始めて漢と交通す。
同九十年 辛酉 七二一〔六一〕
多遲麻毛里(田道間守)、常世國に遣され非時の香果(橘)を採りて十年後に歸朝す。
同九十三年 甲子 七二四〔六四〕

同九十九年 庚午 七三〇〔七〇〕

垂仁天皇の御代、劉伯陽歸化す、其裔永全は醫を良くし、天智天皇の時藤原の姓を賜ふ。
田道間守、父は新羅の人清彦にして景行天皇元年に歸朝す。

第十二代 景行天皇

十二年 壬午 七四二〔八二〕
熊襲叛く。

第十三代 成務天皇

三十四年 甲辰 八三四〔一六四〕

第十四代 仲哀天皇

九年(閏) 庚辰 八六〇〔二〇〇〕
※三韓征伐、神功皇后親征さる。
和魂(ニギミタマ)、荒魂(アラミタマ)の警衛あり。

我國と朝鮮との交通

既に神代より創まるものと想像さるるも、史實上に於ては崇神天皇時代に始まり、神功皇后の三韓征伐より彼の文物の傳來、影響著しくなりたり。之より皇國醫方に韓醫方合流す。

第十五代 應神天皇(神功皇后攝政)

四十八年 戊辰 九〇八〔二四八〕

六四

ネロ Nero 羅馬を焚き、基督教徒を虐殺す。

羅馬のプリニー Pliny, Cajas Pinus Secundus (1111-179)「博物學」Naturae historiarum を著す。内に醫療的植物を記載す。

ローマ軍イェルサレムを占領シユダヤ國滅亡す。

「漢書」成る。

一〇五

支那の蔡倫、紙を發明す。

一一一

支那、宦官を用ふ。

一五〇

※支那、初めて歐人に知らる。

約一六一

トラーミー Claudius Ptolemy アレキサンドリアの天文學者歿す。

印度、カラカ Charaka ススルタ Susruta の書を發行す。

一六四

羅馬のガレヌス Claudius Galenus, Galenos, Galen (130-200)、小亞細亞希臘人(醫學を講じ羅馬隨一)と云はれ、其學説は數百年の永き間行はる。

一六六

羅馬と支那との交通開かる。

一九六-二〇〇頃

漢醫、張仲景「傷寒論」、「金匱要略」等を著す。

二〇〇頃

支那、魏に醫華佗あり、手術に麻沸湯を服さしむ、然し其處方詳かならず。

二〇八

赤壁の戰。

二三四

魏、大學を立つ。

二四八 羅馬、建國一千年祭を行ふ。

同八十三年 癸卯 九四三〔二八三〕
百濟、縫工を貢し、支那秦の始皇帝の末と云はる弓月君來朝す、
後波多公の氏を賜はる。
同八十四年 甲辰 九四四〔二八四〕
百濟より阿直岐來る。
同八十五年 乙巳 九四五〔二八五〕
百濟より王仁來朝し「論語」、「千字文」を獻す。
筆墨の製起る。
同八十九年 己酉 九四九〔二八九〕
支那の人、阿知使主一族十七縣の民を率ひて歸化す。

二八〇 支那、晉、主叔和「脈經」を著はす。
二八一—三六一 支那、晉の葛洪「肘後方」を著はす。

三三五頃 ビザンチンのオリバジウス Oribasius 醫科百科全書を編集す。

三七二 佛教、朝鮮に入る。

三九五

※ローマ帝國、東西に分裂す。

四〇〇

※支那、僧法顯、印度に渡る。

四〇三

希臘、オレイバシオス Oribasius (三二六—アレキサンドリア、アテネ。侍醫、ユリアス帝の令によりギリシヤ醫學の綜合書「Synagoge iotripe」を編す)歿す。

第十九代 允恭天皇

三年 甲寅 一〇七四〔四一四〕
天皇御病あり、良醫を新羅に求む。新羅の金波鎮漢紀武(一人)來りて天皇の病を治す。
翌年、豐神探湯を行ひ姓氏を正す。

第二十代 雄略天皇

三年 己亥 一一一九〔四五九〕
百濟の醫、德來、徵に應じて來朝、子孫世々、難波に居住し醫を業とす。難波の藥師と云ふ。德來の來朝は一説に雄略天皇七年とも記さる。
百濟の陶工、鞍工、畫工等亦來に應じて來る。
夏四月、栲幡皇女、湯入盧城連武彦と姦し妊めりと讒する者あり、皇女五十鈴川上に經死す、天皇人を遣して其屍を求めしめ割きて視給ふに腹中物あり、水の如く中に石あり、斯に由て其冤を雪ぐことを得たり、之解視の史書に見えたる始とす。

四二〇

東晉亡び宋となる。武帝元年。

(五世紀中埃及のゾシムス Zosimus 「化學百科全書」二十八卷を著はす)。

四七六

※西羅馬帝國亡ぶ。(東羅馬帝國、ビザンチン Byzantin 時代—三九六—一四五三)

四七九

宋亡び齊となる。

第二十九代
欽明天皇

十三年 壬申 一一二二 (五五二)
百濟、聖明王、佛像經論等を献す。麻疹流行す。世之を
稻目瘡と云ふ。
梁、文帝鍼經を贈る、其書を紀河邊多鬼唐に賜はる。
同十四年 癸酉 一一二三 (五五三)
△百濟より、醫、易、曆等の博士を遣香來住せしむ。
同十五年 甲戌 一一二四 (五五四)
百濟より五經、醫、曆博士、採藥師、藥人等を貢す(醫
博士王有陵陀、採藥師潘量豐、丁有陀等)。
同二十三年 壬午 一一三三 (五六二)
吳人知聰、藥書「明堂圖」等百六十卷を齎して來朝す。

五〇〇 齊、永元二年、晉の葛洪(稚川)撰「肘後備急方」より
陶弘景「肘後百一方」を撰す。
五〇二 梁朝、陶弘景「本草經」を校訂し、「名醫別錄」を撰す。
東洋に於ける政府藥局方の濫觴とす(所載藥物七百三十
種)。
五二〇 印度の僧達磨、支那廣州に來る。
五三〇 印度(ヒンヅール)のアルヤブハタ Aryabhata 天文學及び球面三
角法に關する著述をなす。

我國に佛教の傳來すると共に生老病死に佛教的思想影響し、茲
に又間接に印度醫方の輸入を見たり。

第三十代
敏達天皇

十四年 乙巳 一一四五 (五八五)
痘瘡朝鮮より傳はり疫病流行す、物部守屋等奏して崇佛
の崇りとし佛殿を燒き佛像を難波の堀江に投ず。

五七〇 ビザンチン時代、僧正 Marius 天然痘を Variola と命
名す。
五七一 アラビアのメッカ Mecca にマホメット Mohammed 生る。
△此頃アラビアに痘瘡流行の記載あり。

五八九 ※隋、支那を統一す。

五九〇 羅馬、グレゴリー一世 Gregor I 初めて法王となる。

第三十三代
推古天皇

二年 甲寅 一一五四 (五九四)
四天王寺を建て施藥院、療病院、悲田院等を設けらる。
同六年戊午 一一五八 (五九八)
厩戸皇子、藥草採取の藥獵を恒例とす。五月節句の菖蒲
の濫觴とす。
同十年壬戌 一一六二 (六〇二)
百濟の僧觀勒(觀一に勸に作る)來朝し邦人方術を受く。

マホメット以來、數百年間アラビアの文化榮え、數學(代數、
幾何)、鍊金術(化學)等一大進歩をなし、バクダット、西班牙
のコルドヴァの都市榮ゆ。
醫學教師にユダヤ人を交ゆ。

同十二年 甲子 一二六四〔六〇四〕
聖德太子、畫法十七條を定む。
宋曆初めて用ひらる(觀勒の齋らせる元嘉曆)。

同十五年 丁卯 一二六七〔六〇七〕
小野妹子を隋に遣はす。
法隆寺建立。

斑鳩寺金堂薬師を造る。
同十六年〔六〇八〕
惠日、福因等を支那唐に遣はし醫方を學ばしめらる。

我國と支那大陸との交通

周代より交渉ありしものと想像さるも、史實上公式に交通を始めしは推古天皇時代の小野妹子等の遣隋使以來なり。斯くして又漢醫方輸入されたり。

同十八年〔六一〇〕
高麗の使僧、曇徴紙を齎す。曇徴繪畫、工藝に通ずと云ふ。
同十九年〔六一一〕
鬼田野に藥獵す(五月五日)。

同三十一年〔六二三〕
僧醫、惠日、福因、入唐學問僧等と歸朝す。
同三十六年〔六二八〕
凶作續く。

第三十四代
舒明天皇

二年 庚寅 一二九〇〔六三〇〕
高麗、百濟等入貢す。
大上御田銀(又三田船に作る)、薬師惠日(惠日)を唐に遣はす。

第三十五代
皇極天皇

元年 壬寅 一三〇二〔六四二〕
紀幾男麻呂、新羅に留學鍼術を學ぶ、我國鍼術の祖となす。
同三年 甲辰 一三〇四〔六四四〕
唐制にならひ大極殿造營さる。後一年にして始めて元を立て大化と云ふ、大化二年に改新の詔下る。

六〇五

△ローマの醫師 Alexander von Tralles (五二五—) 歿す。

六〇五—六一六

隋、煬帝大業年間に楊上善「黄帝内經太素」三十卷を作る。

六一〇

隋、巢元方「諸病源候論」五十卷を撰す。

六一八

※唐の高祖武徳元年

隋、(五八一—六一八)三十餘年間。

六三三

サラセン Saracens (アラビア) のイスマハト Mahomet (Mohamet) サラセン帝國の基を成して歿す。

後サラセン文化興る。
アラビア數字。

六四一

サラセン、ペルシヤを滅す。

六四三—六四五

唐の玄奘印度を訪ふ(六二九入印とも記さる)。

六四四

ケンブリッジ大學の創立。

第三十六代 孝徳天皇

大化元年 乙巳 一三〇五〔六四五〕
歸化吳人智聰の子善那^{サナ}使主始めて牛酪を製して之を上進す。我國製薬の始と云はる。天皇之を嘉みせられ姓を和^{ヤマト}薬使主、名を福富と賜ふ。
* 外國に送る圖書には「日本」と書するを例とす。「日本」の國號此に始まる。

第三十七代 齊明天皇

三年 丁巳 一三一七〔六五七〕

同六年 庚申 一三二〇〔六六〇〕
皇太子、中大兄皇子始めて漏刻水時計を造り民に時刻を知らす。
(六月十日、時の記念日の起原)

第三十八代 天智天皇

五年 丙寅 一三二六〔六六六〕
唐僧、智由、磁石を應用したる指南車を作る。

百濟の歸化人二千餘を東國に置く。

律令制定時代(約六〇年間)

天智天皇十年—和銅二年

第三十八代 天智天皇

十年 辛未 一三三一〔六七一〕
太政大臣、左大臣、右大臣を定む。
漏刻を置き鐘鼓を撃ちて時を知らしむ。

第四十代 天武天皇

一三三三—一三四六〔六七二—六八六〕
韓との交渉頻繁にして歸化するもの多し。
僧、法藏、百濟の人、天皇不豫、法藏、益田金鐘と與に勅を奉じて白朮煎を進む。
皇后不豫により誓願の爲め薬師寺を興す。牛、馬、鶏、犬、猿を食ふことを禁ぜらる(佛法の影響)。

第四十一代 持統天皇

六年 壬辰 一三五二〔六九二〕
僧、製成、初めて給粉を製す。

第四十二代 文武天皇

三年 己亥 一三五九〔六九九〕
役行者(小角、神咒を誦す)伊豆に流さる。

六四七

唐の太宗貞觀二十一年、糖西域より傳來す。

六五〇—六五五

唐、永徽年間、大食(アラビヤ)と唐の交渉始まる。

六五二

唐、高宗、永徽三年、孫思邈「千金方」、「脈經」等を撰す。

六五七

唐の顯慶二年、蘇敬、勅により齊の陶弘景の「本草」に刪訂増補を施し「新修本草」(所謂唐本草)を成す。

六六〇

唐、百濟を伐つ。

サラセン時代
唐時代

〔六七一—七〇九〕

六八二

支那、永淳元年「千金方」、「千金翼方」の撰述者、唐の孫思邈歿す。

同四年 庚子 一三六〇〔七〇〇〕

元興寺の僧道昭寂し火葬にす。我國火葬の始とす（或は同三年と記さる）。

大寶元年 辛丑 一三六一〔七〇一〕

文武天皇の「大寶律令」成れり、其「醫疾令」は唐の制度に依據す（散佚不傳）。

此頃創工天國あり。

大寶三年 癸卯 一三六三〔七〇三〕

僧、法蓮百濟の人醫術に精通し賞を賜ふ。

慶雲元年 甲辰 一三六四〔七〇四〕

跪伏禮を廢し大化以前の立禮に復せしめらる。

第十四代
元明天皇

和銅元年 戊申 一三六八〔七〇八〕

武藏國和銅を獻す、依りて和銅と改元され、和銅開寶を鑄る。

〔飛鳥時代〕 推古天皇より文武天皇に至る十代百十四年間。

奈良朝時代（約七五―七五五年間）

和銅三年―延暦二年

元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁の御

七代の天皇の治世

和銅三年 庚戌 一三七〇〔七一〇〕

平城遷都

七〇〇

支那にて羅針盤發明さる。指南車の記事は既に支那太古に見ゆ。

サラセン時代

唐時代

〔七一〇―七八三〕

七一

サラセン人西班牙を統治し、バグダット繁榮するに至る。

七二

唐の玄宗即位す。

第十四代
元正天皇

和銅五年 壬子 一三七二〔七一二〕

※太安萬侶「古事記」を撰上す（神田阿禮の暗誦による）。

聖六年、諸國に令して「風土記」を上せしむ。

第十四代

元正天皇

聖武二年 丙辰 一三七六〔七一六〕

吉備眞備、阿部仲麻呂等唐に留學す、仲麻呂在唐二十年、榮達して彼地に歿す（七〇）。

片假名は吉備眞備、漢字より進化せしめしものと説かる。

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

玄宗皇帝の朝にて 仲麻呂

賞を受く。

聖武天皇

天智二年 庚午 一三九〇〔七三〇〕

始めて女醫博士（産科）を置く。

第十五代
聖武天皇

聖武天皇、皇后職に施薬院を置かる。

七三〇
唐、三藏天竺より歸る。

殺生禁断の令出づ。

天平七年 乙亥一三九五〔七三五〕

痘瘡流行し天平九年又疫瘡流行して死者多し、病原は新羅より傳來せしものなり。

天平八年〔七三六〕

印度人、菩提仙那 Bodhisattva 及林邑人佛哲の兩人及波斯人李密醫が入唐副使と共に來朝し我國に留まる。

天平十三年〔七四一〕

國毎に國分寺設置さる。

天平十五年〔七四三〕

東大寺建立され大佛造らる。

^{第四十六代}孝謙天皇

天平勝寶元年 己丑 一四〇九〔七四九〕

僧、行基(藥草を病者に與へ、温泉を開きて療養に資す)歿す(八〇)。

天平勝寶六年 甲午 一四一四〔七五四〕

唐僧、鑑真來朝、律宗を傳へ又不草に精しく醫事に通ず。我國に初めて蔗糖を持來す(同五年とも記さる)。

天平勝寶八年 丙申一四一六〔七五六〕

△僧、法榮(禪師)能く病を看、醫藥を侍さしめらる。
△奈良正倉院建立され聖武天皇御遺愛の品々を收められ内に醫藥も藏せらる。

△醫師、禪師、官人各一人を左右京四畿内に遣はし疹疾の徒を救療せしむ。

^{第四十七代}淳仁天皇

天平實字七年 癸卯一四二三〔七六三〕

△僧、鑑真歿す(七七)。

△疫瘡(痘瘡)流行す。

^{第四十八代}稱徳天皇

神護景雲三年 己酉 一四二九〔七六九〕

※和氣清磨、宇佐八幡に使す。

^{第四十九代}光仁天皇

寶龜三年 壬子 一四三二〔七七二〕

△秀南、廣達等十人律及看病を以て世に聞え十禪師と稱せらる。

七三八 佛、モンペリエー Montpellier 大學の前身の基礎成る。

七五〇 アラビアのゲーベル Geber (Dschahir) (七〇一―七六五) 硝酸、硫酸、金屬等の生成を知る。
【アラビア時代、カリフ王朝、七五〇―一二五八】
七五二 唐、天寶年間、王壽「外臺秘要」四十卷を撰す。

七五五

羅馬法王領始まる。

※ 顔真卿、安祿山を討つ。

七五六

サラセン國、東西に分裂す。

七六九

韓退之生まる。

寶龜五年〔七七四〕
翌年、吉備眞備歿す。

寶龜九年〔七七八〕

皇太子數月を經るも病平復せられず因て更に勅し天下に大赦す、
又三十人を度して出家せしむ。

天應元年 辛酉 一四四一〔七八一〕

僧醫、羽栗翼を難波に遣はし朴硝を鍊らしむ（二度も遣
唐使に隨ひ彼地に渡り醫方に通ず）。

平安朝時代（約四〇〇年間）

（延暦三年 長岡遷都）
（同十三年 平安遷都）

延暦三年——建久二年

桓武・平城・嵯峨・淳和・仁明・文德・清和・陽

成・光孝・宇多・醍醐・朱雀・村上・冷泉・圓融・

花山・一條・三條・後一條・後朱雀・後冷泉・後

三條・白河・堀河・鳥羽・崇徳・近衛・後白河・

二條・六條・高倉・安德・後鳥羽天皇の治世

桓武天皇より明治天皇の東京遷都に至る迄京都は平安京として帝
都たり。

桓武天皇

延暦五年 丙寅 一四四六〔七八六〕

羽栗翼、内藥正に擢でられ侍醫を兼ね。父の古鷹、靈龜

二年阿部仲麻呂に隨ひ唐に渡り、彼地にて女王を娶りて翼
を生み、天平二年、翼、年十六父と共に歸朝し、和氣廣
世と共に名聲上る。

延暦七年〔七八八〕

僧、最澄、比叡山延暦寺を創立す。

延暦九年 庚午 一四五〇〔七九〇〕

△京畿に豌豆瘡流行す。

延暦二十三年〔八〇四〕

遣唐大使、藤原葛野麻呂等進發し僧最澄（傳教大師、天台宗）、空
海（弘法大師、眞言宗）之に隨ふ。

平假名は弘法大師の案ずるものと云はる。

延暦二十四年 乙酉 一四六五〔八〇五〕

△天皇に出雲廣貞御藥を奉じ效あり、爵一等を進めらる。

△儒者、菅原清、唐より歸朝、大學頭任ぜらる。唐醫方に通ず。

平城天皇

大同三年 戊子 一四六八〔八〇八〕

出雲廣貞、勅を奉じ安部眞直と皇醫方「大同類聚方」百
卷を撰ぶ。

嵯峨天皇

弘仁十二年 辛丑 一四八一〔八二一〕

七七四
カロー大帝、伊太利王となる。

東ローマ・サラセン・カロー大帝時代・獨オツ
ト一時代・東ローマ・羅馬法王時代
唐・後唐・後梁・後晉・後漢・宋・南宋時代
〔七八四—一一九一〕

八一六
英國、初めて耶穌紀元を用ふ。

※渤海來貢す。

藤原冬嗣、勸學院を立つ。

△畿内に博士、醫師を配置さる。

淳和天皇

第五十三代

天長四年 丁未 一四八七(八二七)

△物部廣泉(藥石の道に精し) 醫博士兼典藥允となる。

天長十年(八三三)

△清原夏野等「令義解」を撰す。

仁明天皇

第五十四代

承和二年 乙卯 一四九五(八三五)

大村直福吉、勅を奉じて「治瘡記」を撰す(不傳)。我國

最初の外科書なり。

僧、空海(弘法大師)歿す(六一二)。

承和六年 己未 一四九九(八三九)

菅原梶成、唐より歸る。醫方に通ず。

承和十八年 辛未 一五一二(八五一)

△針博士、侍醫となる。

清和天皇

第五十六代

貞觀六年(八六四)

△法印、法眼、法橋の三位階の制成る。

貞觀十一年 己丑一五二九(八六九)

菅原岩嗣、出雲廣貞の子、醫博士「金蘭方」五十卷を撰

す)歿す。

宇多天皇

第五十九代

寬平二年 庚戌 一五五〇(八九〇)

宇多天皇 四方拜を始める。

菅原道眞朝に仕ふ。同六年道眞の上奏により遣唐使の派遣止む。

遣唐使

舒明天皇二年(六三〇)、大上御田鐵、藥師惠日が命ぜられしに
始まり、宇多天皇の寬平六年(八九四)、菅原道眞の上奏により
廢せらるる間、二十數朝二百數十年の間に互り十五回も發せら
れたるものなり。隨行する者の中に彼地の醫方を學び來るもの
あり。

寬平三年 辛亥一五五一(八九一)

△侍醫、菅原善綱「名論要抄」を撰上す。

醍醐天皇

第六十代

昌泰元年 戊午 一五五八(八九八)

△藤原佐世歿す、寬平年間佐世勅を奉じ當時存せし總書目「日本國
見在書目」を撰す。中醫藥書百六十餘部、一千三百九卷の多きに

八六二
ノルマン、ロシア帝國起原す。

八七〇
西ローマ帝國、遂に分裂し東フランク(後のドイツ)、西フランク
(後のフランス)、イタリヤの三王國となる。

八七二
※唐、衰運に向ふ。
南伊太利の羅馬屬領サレルノ Salerno (ナポリの南方)
のサレルノ醫學校 Schola Salernitana 世に知らる。
八九〇—八九三
英、オックスフォード大學創立。

互り其大部は隋、唐の書と云はる（總書目の巻数は一萬六千七百九十巻にして醫方書は八百餘巻と記すものあり）。

昌泰四年 壬子 一五五二（八九二）

渤海國使、出雲に來着す。
△僧、昌住、漢文學、漢醫方等に對する漢和「新撰字鏡」十二巻を稿す。

菅原道眞、「類聚國史」を撰す。

延喜十五年 乙亥 一五七五（九一五）

痘瘡、赤痢流行す。天皇亦痘瘡を病み給ふ、流行を除かん爲め大赦の事行はる。

延喜二十二年 壬午 一五八二（九二二）

「古今集」成る。

深江（或は深根）輔仁（八九八—九二二）、大醫博士、勅を奉じ「掌中要方」「本草和名」を著はす。歿す。

延長三年 乙酉 一五八五（九二五）

醍醐天皇諸國に風土記を勸進せしめらる。

第六十一代 朱雀天皇

承平三年 癸巳 一五九三（九三三）

和氣時雨（清鷹の曾孫）醫博士に擧げらる（後年典藥頭と

なる）。

天慶二年（閏） 一五九九（九三九）

※天慶の亂、平將門反し、南海亂る。

天曆元年 丁未（閏） 一六〇七（九四七）

△痘瘡流行し人庶多く瘡れ、村上天皇及朱雀上皇共に之に罹らせらる。諸國に令して諸社に奉幣讀經して痘瘡を禳除せしめらる。

應和二年 壬戌 一六二二（九六二）

石清水の十二社に佛舍利を奉ず。

陰陽道の流行

陰陽道は奈良朝時代より行はれたるも延喜以後は神道、佛教の説をも混じ年を逐ふて盛んとなり、疫癘邪を攘はん爲めに祈禱行はれたり。

第六十五代 花山天皇

承觀二年 甲申 一六四四（九八四）

應神天皇の代に歸化したる漢人の奇針博士丹波康賴、隋唐の古醫典を參考し「醫心方」三十巻を奏進す。是は天元五年（九八二）撰せられたるものなり（其中に鼠咬症の記述もありと云はる）。

僧、源信（恵心僧都）「往生要集」三巻を撰す。

源順（「和名類聚鈔」の撰者）歿す。

九〇七

唐七ぶ。（六一八—九〇七）約二百九十年續きたり。

九一五

イスパニア（西班牙）のサラセン黄金時代。
ケンブリッジ大學の創立。

九二五

※エドワード、全ブリテンに嗣す。

アラビヤに醫師ラーゼス Rhazes（八五三—九三〇）或（八五〇—九二二）あり、醫學府庫 Continens を著はし痘瘡、麻疹を述ぶ。

九六二

東フランク王国（ドイツ王国）オットー大帝 Otto 神聖羅馬帝國皇帝となる。

九七三

宋の太祖「開寶本草」を撰せしむ。

九七六

※宋の太宗、支那を統一す。

九九六

佛、ジキルバー Gerbert 車機装置の時計を發明す。

第六十六代
一條天皇

長徳四年 戊戌 一六五八〔九九八〕
是歲初めて赤斑瘡（麻疹）流行す。
清少納言「枕草紙」を作る。
寛弘元年 甲辰 一六六四〔一〇〇四〕
紫式部の「源氏物語」成る。

第六十八代
後一條天皇

長元二年 己巳 一六八九〔一〇二九〕
（藤原道長没後二年）
△是より先四年前に疱瘡流行したり。十月―十一月京中の人「頸腫」を病む。世に「福來病」と云ふ。
長元七年 甲戌 一六九四〔一〇三四〕
△醫得業生を試験す。
△丹波雅忠、典薬頭となり、後、施薬院使に任ぜらる。

承承七年 壬辰 一七二二〔一〇五二〕
△千僧を大極殿に請じ觀音經を誦じ疫病を新療す。

第七十代
後冷泉天皇

治暦二年 丙午 一七二六〔一〇六六〕
（源頼義没後二年）
△宋商、玉滿靈藥及び鸚鵡を獻ず。

第七十二代
白河天皇

承暦四年 庚申 一七四〇〔一〇八〇〕
藤原道長、太政大臣。
高麗國醫を求むる牒狀を頒すも之を斥く。
承保元年 辛酉 一七四一〔一〇八一〕
丹波雅忠、晉唐の醫書を涉り「醫略抄」を著はす。

第七十三代
堀河天皇

承長元年 丙子 一七五六〔一〇九六〕
三月、清涼殿に和歌御會行はる。

一〇一三？
アラビア、アルブカシス Albukasis (九三六―)、外科書 Alisiri の著者に歿す。

一〇三五
宋の陳文仲、晉、唐醫の滋養強壯療法を唱導す。
一〇三七
アラビアの醫師アヴィセンナ Avicenna, Ibn Sina (「醫典」 Canon medicinae を著し一般に廣く用ひらる) 歿す(九八八―)。

一〇五七
宋、仁宗「嘉祐補註本草」を撰せしむ。之に蘇頌「圖經本草」を附す。

一〇六六
ノルマン、英蘭を征服す。

一〇八〇
宋、陳師文等「和劑局方」を撰す。

一〇八四
司馬光「資治通鑑」を上る。
コンスタンチン Constantinus Africanus, Konstantin (一〇一八―、サレルノ醫學校) 歿す。

一〇九六
第一次十字軍發す。土耳其族の聖地イエルサレム占據を奪回せんとして、西歐諸國が聯合軍を起し戰爭二百年に及ぶ。
※ 中世紀醫學の暗黒時代始まる(一四五三、百年戰爭の終了迄)

嘉承元年 丙戌一七六六〔一一〇六〕
△典藥頭丹波忠康歿す。
源義家歿す(六八)。

第七十四代
鳥羽天皇

承久元年 癸巳一七七三〔一一一三〕
延暦寺、興福寺の僧徒漸次猖獗す。

第七十七代
後白河天皇

保元元年 丙子 一八一六〔一一五六〕

※保元の亂。

保元二年 〔一一五七〕

信西入道(日向守通憲)「計子算法」(數學書)を著はす。

第七十九代
六條天皇

仁安二年 丁亥 一八二七〔一一六七〕

※平清盛、太政大臣となる。

僧にして入宋するもの多し。

仁安三年 〔一一六八〕

僧、榮西、宋に赴く。

第八十二代
安徳天皇

元暦元年 甲辰 一八四四〔一一八四〕

※一の谷の戦。

僧、蓮基「長生療養記」を撰す。

僧、皇圓「扶桑略記」(三十卷)を著はす。

鎌倉時代(一四二年間)

建久三年—元弘(正慶二年)三年

後鳥羽・土御門・順徳・仲恭・後堀河・四條・後
嵯峨・後深草・龜山・後宇多・伏見・後伏見・後
二條・花園・後醍醐天皇の治世

第八十二代
後鳥羽天皇

建久三年 壬午 一八五二〔一一九二〕

※源頼朝、征夷大將軍となり鎌倉幕府を開く。

一一〇八

唐、慎微、勅命により「證類本草」(大觀本草)を撰す。

(宋、北宋〔九六〇—一一二七〕一六七年、南宋〔一一二七—一二二九])

一一三六—一二七九

※支那、金の時代。

一一三七

△英、ロンドンに St. Bartholomew 病院建つ。

一一六三

ローマ教會より、流血を忌むの令出で外科手術は理髮師の行ふ所となる。

一一七七

「朱熹集註」成る。

十字軍時代・蒙古活躍時代・法皇、皇帝鬭争期
南宋・元の時代

※歐洲は、十三世紀以後は封建主義的社會構成は衰へ、十五世紀には伊太利の諸都市が商業の中心となり、所謂工場手工業(マニファクチュア)の時代となる。後續いて世界市場の探求となる。

〔一一九二—一三三三〕

第八十三代
土御門天皇

建仁元年 辛酉 一八六一〔一一〇一〕

△典藥頭、丹波頼基歿す。

元久元年 甲子 一八六四〔一一〇四〕

源頼家、伊豆修禪寺にて歿さる。

元久二年〔一一〇五〕

藤原定家、「新古今和歌集」を撰す。

第八十四代
順徳天皇

建保二年 甲戌 一八七四〔一一一四〕

僧、榮西（入宋者、臨濟禪を唱ふ）實朝に治病の爲に茶

を進め「喫茶養生記」を録進す。

此頃より創腫と名づけられたるもの外科と呼稱さる。

承久元年 己卯 一八七九〔一一一九〕

源實朝、公曉に殺さる。

藤原定家、「毎月抄」を著はす。
杉原紙初めて世に出る。

△權醫博士、和氣正基歿す。

第八十六代
後堀河天皇

安貞二年 戊子 一八八八〔一一二八〕

藤原道家、關白となる。

瀬戸の陶祖加藤四郎左衛門、宋より陶法を得て歸來す。

第八十九代
後深草天皇

建長元年 己酉 一九〇九〔一二四九〕

建長寺建つ。

一一九九 西班牙、ウアレンシア Valencia 大學立つ。
一二〇〇 南宋の朱熹歿す（七一）。

一二〇四 東ローマ帝國滅亡し、ラテン帝國建成す。

一二〇六 金、宋を壓す。

一二一五 ※英國に大憲章 Magna Charta 成る。
蒙古軍燕京に入る。
一二一九 伊、ボロニア Bologna 大學建つ。

蒙古成吉思汗、西域諸國を壓卷す。

一二三〇 佛、モンペリエ Montpellier 醫學校成る。

一二三三 伊、パドヴァ Padua 大學建つ。

一二三四

△ギリス Gilles (サルノ醫學校出身、一二四〇)歿す。

伊、メッシナ Messina 大學立つ。

一二三八

※フレデリック二世獨逸に霸王となる。

△金、元の醫學一二二九頃より興る。李杲（東垣）、續いて朱震
亨（丹溪）は其宗たり、甘温以て腸胃を補ひ疾病を治せんと
する所謂温補派醫學なり。

△支那に於ける儒の門戸は宋に於て分れ、醫の門戸は金・元に
於て分ると云はる。

一二三九

佛、グレゴル九世 Grégoire IX、モンペリエ Montpellier
醫科大學を建つ。

一二四〇

△フリードリッヒ二世醫師の資格試験をなす。

一二四七

△南宋、淳祐七年、提刑、宋慈「洗冤錄」（法醫學書）を撰す。

一二四九

英、オックスフォード Oxford 大學の創立。

第九十代
龜山天皇

弘長元年 辛酉 一九三一〔一二六一〕

徳政を行ひ新政二十一條を下す。

△忍性、極樂寺に施薬悲田院、療病院、敬田院、福田院、藥湯寮、癩病院、馬病室等を附設す。

弘長二年〔一二六二〕

親覽歿す。

△忍性、一ノ濱並に大佛の兩悲田に施食授戒す。

文永二年 乙丑 一九三五〔一二六五〕

畫人、藤原信實歿す。

文永三年 丙寅 一九三六〔一二六六〕

△典藥頭、丹波長世、鎌倉にて歿す。

第六次十字軍。

一一五〇

伊、パツイア Padua 大學立つ。

一一五一

南宋、淳祐十一年、李杲（東垣）歿す。

一一五〇—一五三

佛、ソルボンヌ大學建つ。

一一六〇

佛、E里にサン・ローム大學 College de St. Come 建つ。

一一六一

ラテン帝國及び東ローマ帝國再興す。

一一六五

伊の大詩人ダンテ Dante Alighieri 生る。

英國々會下院創設。

一一六七

英、ベーコン Roger Bacon (一一一四—一二九四、フ

ランシス派の僧) 著書 Opus majus を出し自然科学に

經驗と觀察を論ず。

文永九年〔一二七二〕

本願寺建立。

文永十一年〔一二七四〕

文永の役、元軍、對馬・壹岐に來襲す。當時元軍鐵砲を使用す。

第九十一代
後宇多天皇

弘安四年 辛巳 一九四一〔一二八二〕

元軍筑紫にて暴風に遭ひ全滅す。

弘安五年〔一二八三〕

日蓮歿す。

△鎌倉時代の醫道は僧によりて主導され(醫僧)、和氣氏又有勢力なり。

僧侶が齋食(とき)と稱して午時の一飯をなすに至り、在來

一日二食の風習が三食に變化したり。

弘安六年 癸未 一九四三〔一二八三〕

△忍性、疫癘流行に付き極樂寺門前に病者を集め療養を加ふ。

弘安七年〔一二八四〕

執權北條時宗卒す(三四)。

△惟宗具俊、「本草色葉集」を著はす。

一一七一

※蒙古、國號を元と改む、南京に都す(一二八〇年燕京即ち北京に移る)。

一一七二

※十字軍終る(戦時中壞血病の發生を見たり)。

△北京に洋醫フランク Frank Jaisin 醫院を開く。

一一七九—一三六六

支那、元の時代。

一一八二—一二九五

アラビヤ人支那に阿片を輸入す。

一一八四

英、ケンブリッジ Cambridge 大學建つ。

第九十一代
伏見天皇

承仁元年 癸巳 一九五三〔一二九三〕
惟宗時俊、「醫家千字文」を著はす。

第九十四代
後二條天皇

乾元元年 壬寅 一九六二〔一三〇二〕

一向宗一揆起る。

鎌倉大火、死者五百人に及ぶ。

嘉元元年 癸卯 一九六三〔一三〇三〕

梶原性全(淨心、誠觀)「頓醫抄」五十巻を撰述す。

△極樂寺忍性(痴人萬餘を集めて食を給す)歿す(八七)。

第九十五代
花園天皇

正和四年 乙卯 一九七五〔一三一五〕

梶原性全、「萬安方」六十二巻撰述す。漢魏唐宋の醫方を折衷採擇し、自家の經驗を加へたるものなり。

正和五年〔一三一六〕

北條高時、執權。

北條顯時、武藏金澤に文庫を設け儒佛の書を收む。

藤原經隆、百鬼夜行繪巻を畫く。

マルコ・ポーロの「東方見聞記」と歐羅巴
への日本宣傳〔一二七一—一二九五〕

ヴェニスの人マルコ・ポーロ Marco Polo (一二五四—一三二三) 陸路、東洋に來遊し元の世祖に仕へ、後歸國し「東方見聞記」を公にし、元軍ジバング Zibangu 國を撃ちて敗れしを記述しこの國に黄金珠玉充つと傳へしより歐羅巴人の來り求めんとする念尤まると云ふ。コロンブスのアメリカ大陸發見も日本に到らんとし偶然行はれたるものとも云はる。

一二八五
アルマナー Armani 眼鏡を製す。

一二八七

葡、リスボン Lisbon 大學立つ。

一二九四

北京にフランスカ派宣教師兼醫師 John 波來す。

一二九六

佛、ランフランキー Lanfranchi 「大外科」書 Chirurgia magna を著はす。

一二九九

元の朱世傑「算學啓蒙」を著はす。

一三〇二

フランス、國會初めて成る。

一三〇三

航海用羅針盤發明さる。

一三〇六

ポーランド王國獨立す。

一三〇八

元の武宗、至大元年王與「無冤錄」(法醫學)を撰述す。

伊、ボログナのモンディノ・ルッチ Mondino de Lucei 解剖を唱道す。

一三三〇

佛、モンドビルト Henri de Mondville (一二〇六—

待醫、外科)歿す。

一三三三

伊、ダンテ Dante 歿す(一二六五—)。

吉野朝廷時代(五七年間)

建武元年—元中(明德三年)九年

後醍醐・後村上・長慶・後龜山天皇の治世

第九十六代
後醍醐天皇

延元元年 丙子 一九九六(一三三六)

楠木正成、淡川に戦死す。

延元四年(一三三九)

北畠親房、「神皇正統記」を撰上す。

第九十七代
後村上天皇

貞和四年 戊子 二〇〇八(一三四八)

四條駿合戦。

延文三年 戊戌 二〇一八(一三五八)

安藝守定、女科を以て名を擧ぐ。

貞治元年 壬寅 二〇三三(一三六二)

僧、有隣、貞治年間に和漢醫方「福田方」を撰す。

文藝復興期 Renaissance に入る
元、明の時代

(一三三四—一三九二)

一三三五

元の至元元年、齊德之「外科精義」を著す。

一三三九—一四三九

※百年戦争、英佛兩國間に起る。

一三四五

歐羅巴に於て一時間を六〇分、一分を六〇秒に分けること普及す。

一三四八

△ベスト(黒死病) 歐洲に流行す。

獨、ブライグ Prag 大學設立(カロロ四世)。

一三五八

元の至正十八年、朱震亨(丹溪)歿す。

一三六〇—五

澳、ウィーン Wien 大學建つ。

第九十八代
長慶天皇

應安元年 戊申 二〇二八(一三六八)

陳延禮(支那人)歸化し筑前博多に住し醫を善くす。

永和四年 戊午 二〇三八(一三七八)

足利義滿、室町新邸に移る。

竹田昌慶、應安二年(一三六九)三十二歳にして明に渡り、金翁道士に學び牛黃丹等の秘方を受け歸朝す。

康暦元年 己未 二〇三九(一三七九)

馬島清眼僧都(尾張海東郡馬島の藥師寺僧、眼科に名高し)歿す。

一三六八

※元亡び明となる。阿片禁止令出づ。

此頃支那山東に倭寇現はる。

△佛、ショウリアク Guy de Chauliac (外科に精し)歿す。

一三八三

英吉利、カレの戦に初めて大砲を用ふ。

佛、マルセイユ市に於てはコレラ豫防に流行地域よりの入市者を四十日間交通遮断す(Quarantina) 檢疫隔離 Quarantine の語源ここに發す。

一三八六

ハイデルベルグ大學立つ。

四世紀より十四世紀の約千年間は宗教的思想に拘束され科學、殊に醫學への研究的發展の著しきものを見ず。即ち僧侶醫學 Monachmedizin と煩瑣哲學 Scholasticism, Scholastik の醫學の影響による。

室町時代(一八〇年間)

明德四年—元龜三年

後小松・稱光・後花園・御土御門・後柏原・後奈良・正親町天皇の治世

第百代 後小松天皇

應永二年 乙亥 二〇五五(一三九五)

※足利義滿、落飾す。

上杉憲定、下野國足利に學校を興し和漢の書を多く集む。

應永十五年(一四〇八)

足利義滿、歿す。

南蠻船、日本に渡來す。

應永十六年(一四〇九)

應永年間、堺の鉛市兵衛、支那明より鉛丹の製法を傳授し、以後鉛白粉の使用廣まる。

第百一代 稱光天皇

應永十九年 壬辰 二〇七二(一四一一)

南蠻船、若狭小濱に着す。

竹田善慶(昌慶の子)、御小松天皇の病を治し法眼に叙せ

らる。

應永二十七年(一四二〇)

幕府、明との交通を斷つ。

應永二十九年(一四二二)

僧、壽阿彌、後小松上皇御不豫に藥を奉る。

應永三十一年(一四二四)

飢饉甚し。

正長元年 申戌 二〇八八(一四二八)

△飢饉、病流行す。

僧、允能、後小松上皇に藥を奉る。

遣明使

足利幕府が明に遣はせし使節にして、後小松天皇より後奈良天皇の代に至る。

足利義滿、國庫の空乏を補はんとして明錢を求めしに始まる。

第百二代 後花園天皇

寶徳元年 己巳 二一〇九(一四四九)

琉球の商人藥種及錢を幕府に進む。

△京都に疫病流行す。

坂淨秀、「鴻寶秘要」を撰す。

文藝復興期 Renaissance・宗教改革期・航海探
検期・トルコ活躍期
明時代
〔一三九三—一五七二〕

一四〇三 朝鮮、李朝恭定王三年に活字(銅鑄)を作る。

一四〇九 ライプツヒ Leipzig 大學創立す。

一四二九

獨、一航海者ベハイム Behaim 地球儀を作る。

※佛、オルレアンの少女ジャンヌダルク Jeanne D'Arc 英軍の包圍を解く。

一四三八

獨、グーテンベルヒ Gutenberg 活字印刷を創む。

我國奈良朝時代既に百萬塔中に印刷經文を收む。

一四五〇

獨、バシル・バレンチン Valentine (一三九四—、化學者にして蒼鉛を發見す)歿す。

寶徳三年 辛未 二二一一(一四五一)
△中川子公、「捧心方」を撰す。

享徳二年 癸酉 二二一三(一四五三)
明との交通盛なり。
僧、月湖、明に入り、明の景泰三年「全九集」を、又六年「済陰方」を著す。

寛正元年 庚辰 二二二〇(一四六〇)
△同二年にかけて飢饉し病流行す。

第百三代
後土御門天皇

應仁元年 丁亥 二二二七(一四六七)
細川、山名、京都に戦ふ。
晝僧、雪州、遣明使に随ひ留學す。
宗貞秀等、朝鮮と歲遣船を約す。
應仁二年 戊子 二二二八(一四六八)
竹田照慶、將軍足利義政の病を治し法印に陞叙さる。「延壽類要」等著す。
△吉田徳春(室町幕府の醫)歿す(八五)。

文明十四年 壬寅 二二四二(一四八二)
△朝鮮、足利氏に藥劑を贈る。

長享元年 丁未 二二四七(一四八七)
田代三喜(武州川越、僧)、商船にて明に渡る。留まること十二年、李東垣、朱丹溪の術を學ぶ。
管領、畠山政長。

明應元年 壬子 二二五二(一四九二)
遣明使發す。
坂淨運、明應中明に赴き張仲景の方術を習ひ來り後柏原天皇の病を治して法印に叙せらる。「續添鴻秘要鈔」を著す。

明應七年 戊午 二二五八(一四九八)
僧醫、田代三喜、醫書を携へて明より歸朝す。

一四五二
ハンブルグに理髮師 Barthelemer 同盟(外科業者)成立す。

※東ローマ帝國滅亡、百年戰爭終る。

一四五五
※英國、薔薇戰爭始まる(一四八五)。

一四六〇
獨、ボルスポイント Piorpauit 外科を發達す。(獨逸最古の外科書を著す)。

一四七九
※イスパニア王國(スペイン)成る。

一四八二
希臘の數學者ユークリッド Eukleides of Alexandria の幾何、伊、メリヌのラドルト Erhard Raddolt により初めて印刷せる。(世界最初の印刷數學書)

一四八六
葡萄牙人、バートロミーウ・ヂャズ Bartholomew Diaz 喜望峯 Cape of Good Hope に達す。

一四九二
※伊、コロンブス Cristoforo Colombo, Christopher Columbus

西印度に着しアメリカ發見をなす、一四九三年一行イスパニヤに歸る。
煙草の喫煙、米大陸より歐羅巴に傳へらる。

一四九五
伊、ナポリに梅毒流行す。

一四九八
※葡人、ヴァスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama 喜望峯を廻り印度に達し、印度新航路の發見成る。

十六世紀

一五〇二 西班牙、アルメナール Juan Almenar 驅微外用療法に

水銀を初めて用ふ。

ウイテンベルヒ大學創立。

一五〇五

明の弘治十八年に當り翌年よりの武宗正徳年間(一五二一

一に至る)廣東瘡(梅毒?)大流行す。

一五一〇

※葡萄牙人、印度の西岸のゴアを占領す。

(46)

第百四代
後柏原天皇

永正二年 乙丑 二一六五(一五〇五)

△雨多く、飢饉、疫病流行す。

永正八年(一五一二)

明船三艘來る。

朝鮮と舊交を復す。

永正九年(一五一二)

北條早雲、相模の諸城を取る。

諸國に地震あり、關東飢饉す。

永正十年 癸酉 二一七三(一五一三)

遣明使、僧桂悟(了庵)歸朝す。

當時唐瘡(梅毒?)近畿より關東に蔓延す。又堺・博多等の海外貿易者に麻疹流行す。流球、支那、マラッカ等南方より輸入されたるものなり。

一五一五—一五一七

※葡人、支那廣東に渡來す。

△其頃支那に梅毒流行す。

一五二七

※獨、ルーテル Luther 宗教改革を唱ふ。

一五二九

伊、レオナルド・ダヴィンチ Leonard da Vinci(一四

五二—、畫家にして科學者、人體解剖圖譜等著はす)歿す。

※葡、マゼラン Magalhães, Magellan イスパニア王の命により五

船を率ひ地球一周の途に就く、大西洋より太平洋に出でフィリッ

ピン群島に達し土人に殺さる。其部下前後四年にして歸國す。

(一五二二)(ポルトガル、イスパニヤ(南緯)の富盛成る)。

一五二五

佛、英同盟成る。

(47)

永正年間、宗慶樂燒を、紹鷗信樂燒を始め、長門に萩燒を創む。

永正十六年 己卯 二一七九(一五一九)

※北條早雲、韭山城に歿す。

永正中、和氣明親明に入り醫を學ぶ。

大永五年(閏) 乙酉 二一八五(一五二五)

△後柏原天皇の御宇小瘡流行の禍を除かんが爲めに心經を書寫せられ諸寺をして祈願せしめ給ふ。

阿佐井宗瑞、女科に精し、明板の熊宗立「醫書大全」を刊行す、我國醫書板刻の濫觴と云ふ。

竹田定祐、「傷寒初心抄」を著はす。

一五三六

伊、スキピオ Scipio Ferro(一四六五— 數學者)歿す。

一五三八

王陽明(守仁)歿す(五七)。

波、獨、コペルニクス Nicolaus Copernicus(太陽中心の地動

第百五代
後奈良天皇

享祿二年 己丑 二一八九(一五二九)

天然の人、周防に來り眼鏡、望遠鏡を傳ふ。

享祿三年(一五三〇)

葡船、豊後に來航、大友氏と貿易す。

天文三年 甲午 二一九四(一五三四)

久志不(度會)常光、「管蠶備急方」を著はす。

天文六年 丁酉 二一九七(一五三七)

田代三喜(李朱派、明に留學す)歿す(七三)。

天文八年 己亥 二一九九(一五三九)

吉田宗桂(本草に精し)、入明の使僧策彦と共に明に渡る。

天文十年 辛丑 二二〇一(一五四一)

△吉田宗桂、明より歸る。

葡船牙船、豊後、鹿兒島に漂着す。

天文十二年 癸卯 二二〇三(一五四三)

説を創説す。著書を出す。

一五三二 新教の自由を許可するニューンベルヒの和約なる。

一五三四 佛、イダナチウス・ロヨラ Ignatius Loyola 耶穌會を創設す、

ジェスイタ教派の起原をなす(ジェスエスタの名一五五〇年頃起る、新教防壁を主眼とす)。

一五三五

獨、コルデス Valerius Cordus 薬局方 Dispensatorium を出す。

一五四一 瑞西、バラケルスス Paracelsus, Theophrastus von

Hohenheim(一四九三)ハーゼルの醫化學者、化學藥物を以て療病せんと主張す、定量化學の鼻祖(歿す) 一五四三

※ 戦國時代、織田、武田等群雄割據す。

葡人、薩摩種子ヶ島(多敷島)に來り鐵砲を傳ふ(南蠻來)。

△天文申、金持重弘、明に赴き醫を學ぶ。

天文十三年(一五四四)

南蠻人、薩摩に來る。

天文十四年 乙巳 二二〇五(一五四五)

△曲直瀬道三(初め僧)、京都に李朱醫方を唱道す。

天文十五年 丙午 二二〇六(一五四六)

南條宗鑑、「撰聚婦人方」を著はす。我國婦人科書の始

とす。

南蠻(ポルトガル、イスパニア)との交渉は葡船の種子ヶ島漂着渡來より始まり、ポルトガル、イタリア、イスパニア方面の文化輸入され、信長亦之を許す。

天文十六年 丁未 二二〇七(一五四七)

僧、策彦の再び明に使用するに當り、吉田宗桂、再度之に

隨行し、明の世宗の疾を療す。

天文十七年(一五四八)

葡船牙船、豊後に來る。

彌次郎、ゴアに到り洗禮を受く。

島山義忠、僧、昌虎を朝鮮、明に遣はす。

天文十八年(一五四九)

武田晴信、信濃國深志城を奪ふ。

白、ウエサリウス(ウエーザル)(伊、パツア大學)

Andreas Vesalius の「人體構造」De Humani Corporis

Fabrica 發表され解剖學に一新紀元を劃す。

△伊、エウスタヒウス Eustachius 副腎を記載す。

一五四五

伊、カルダノ Girolamo Cardano(一五〇一—一七六)代數書 Ars

magna arithmeticae を出す。

一五四六

獨、ルーテル Martin Luther(宗教改革論者)歿す。

△エヌチエヌ・シノール Etienne Charles 精養を解剖學に記載す。

一五四九 △サッカレロ Zaccharello 人體に於て初めて脾剔出を行ふ。

永祿十一年 戊辰 二二三八〔一五六八〕
 京都に南蠻寺建立され使僧グレゴリア・ルイ(Gregoria Louisa) 醫療を布教手段に用ふ。
 大村侯の勤めにより宣教師ウイレラ Villa 長崎に来る。
 永祿十二年〔一五六九〕
 信長、内裏を修理す。
 信長、使僧、ルイ・フロイスを引見す。
 元龜二年 辛未 二二三一〔一五七一〕
 大村純忠、葡人に長崎を開く。
 一向宗徒、叡山僧徒亂をなす。
 元龜三年 壬申 二二三三〔一五七二〕
 △吉田宗桂歿す(五三)。

西洋醫學の輸入(第一期)

南蠻流外科の胚胎
 天文年間葡萄牙人、續いて西班牙人の所謂南蠻人の切支丹宗の布教、通商と共に彼地の醫方、殊に其長とする外科輸入され、在來の漢醫方に加味され、所謂南蠻流外科として世に行はれ、豊臣氏以來の切支丹宗禁止、南蠻人排斥の後も長崎、堺、大阪等に其餘波を残したり。
 切支丹宗の我國に傳道されて拾餘年の後には其信者十五萬に上れりと云はる。
 又九州諸侯の切支丹宗を信する者多きは交易による利得と云ふ他、當時所謂戰國の亂世に於て西洋武器の火器、即ち鐵砲の入手に便を藉りたるものあるを看過する能はず。又鐵砲の傳來は我國戰法に一大變換を招來したり。

一五六八
 英、ターナー W. Turner 英國最初の本草書を出す。
 △伊、ワロリオ Varolio 腦橋 Pons を記載す。
 一五七一
 西班牙人、マニラに政廳を建つ。
 一五七二
 佛、パレー Ambroise Paré 一五六四年と今年に外科の著述をなし世に行はる。後、我國、西玄哲等又其和蘭譯書を重譯す。

安土・桃山時代(約三十年間)

天正元年―慶長四年
 正親町・後陽成天皇の治世
 (織田信長九年、豊臣氏約十七年間)

第百六代
 正親町天皇
 天正二年 甲戌 二二三四〔一五七四〕
 栗崎道喜、天正二年九歳にして呂宋に入る、三十餘歳迄彼地に留まり外科を修めて歸朝し、栗崎流外科の始祖となる。
 曲直瀬道三、金元醫學「啓迪集」八巻を出す。

天正四年〔一五七六〕
 ※信長、安土城に入る。

航海探險時代
 明時代

〔一五七三―一五九九〕
 一五七三
 和蘭、西班牙に叛す。
 一五七四
 伊、エウスタヒ Eustachi (o) 歿す(一五二四―、歐氏管の發見者)。
 △伊、ファブリチス Fabritius 靜脈瓣を發見す。
 一五七五
 伊、ワロリオ Varolio (一五四三―、腦橋等に名を留む)歿す。
 獨、ウインテル J. Winther (Günther, 一四八七―、Vesalius の師)歿す。
 一五七八
 明、萬曆六年、李時珍、二十七年間の勞苦により本草綱目の改訂を了す。一五九五年金陵に於て刊行さる(所載

天正七年〔一五七九〕
ワリニャーニ Valignani 第二回来朝、有馬に學林を開く。

天正八年〔一五八〇〕
英船、平戸に来る。

ワリニャーニ、大友義統に説きて白杵に學林を設く。
本願寺光佐、大阪に據りしより十一年にして信長に降る。

天正九年 辛巳 三三四一〔一五八一〕
秀吉、中國に戦ふ。

二月、西班牙人初めて來航す。
應取秀次(古方醫外科に精し)「外療新明集」(三十卷)を著す。

安土城下に天主教院建立。
ワリニャーニ、京都に上り信長に謁す。

信長、高野山僧徒を殺戮す。

天正十年〔一五八二〕
九州の大友、大村、有馬の三侯使をワリニャーニと共に羅馬法王に派遣す。

明智光秀、信長(四九)を本能寺に害す。
天正十二年〔一五八四〕
小西行長、黒田如水、洗禮を受く。

西班牙船、初めて平戸に来港す。

天正十三年 乙酉 三三四五〔一五八五〕
丹波全宗、施藥院司となり力を施藥治病に盡す。

後陽成天皇

天正十六年 戊子 三三四八〔一五八八〕
秀吉、南蠻寺を閉づ(天正十五年天主教の禁制を出す)。

天正十八年 庚寅 三三五〇〔一五九〇〕
切支丹ウアリニャーニ A. Valignani 島原にて「サストスの御作業」を活版印刷す。

秀吉、朝鮮使を葉樂第に引見す。

大友、有馬、大村の使羅馬より歸る。

久志不常辰歿す(八一)。

文祿元年 壬辰 三三五二〔一五九二〕
秀吉、朝鮮を征す。曲直瀬玄朔、坂淨慶等従軍す。
朱印船の制を定む。

文祿二年 癸巳 三三五三〔一五九三〕
應取秀次、「外科細壺」を著す。

文祿三年〔一五九四〕
天草天主教會より葡、羅、日、三國對譯辭書等を活字刊行す。

一千八百七十一異種に上る)。

一五七九

※和蘭、獨立す。
當時イスパニヤ(スペイン)は歐洲第一の強大國なりしも、其ネーデルラント即ち和蘭、獨立を宣言しネーデルラント合衆國と號しウィリアム統領となる(一六〇九年西班牙承認)。

一五八一

伊、マテオ・リッチ Mattheo Ricci 利瑪竇、印度より明に渡る(二十七年間在支)。

一五八二

伊、ガリレオ Galileo Galilei (一五六三—一六四二) 振子運動の規則性を發見す。
グレゴリー十三世 Gregor XIII 改曆をなす。

一五八八

※英、西班牙の無敵 Armada 艦隊を破る。

一五八九

伊、アランチウス Arantius(zio) (一五三〇—) 解剖學者、動脈、靜脈管等發見(歿す)。

一五九〇

顯微鏡、當時硝子細工の盛なりシオランダにて發明さる。

佛、アンブラス・パレー Ambroise Paré (一五一〇—) 外科醫、創傷治療に新生面を拓く(歿す)。其著述は又、我國西洋醫學の發展に貢獻したり。

普魯西に望遠鏡發明さる。
△明の李時珍の「江西本草綱目」南京にて刊行さる。

一五九二

佛、モンテーニ Montaigne (教育家) 歿す。

一五九三

明の程大位「算法統宗」を著す。
アラビアのアウイセナ Avicenna の遺著 Kanon 出版さる。

文祿四年 乙未 二二五五 (一五九五)

曲直瀬道三(田代三喜の門、李朱醫方を弘む)歿す(八九)。

慶長元年 丙申 二二五六 (一五九六)

栗崎道喜、呂宋より歸り栗崎流南蠻外科の祖をなす。

※ 西班牙船、サン・フェリツペ號 San Felipe 土佐に漂着す。

慶長二年 (一五九七)

豊臣秀吉、朝鮮再征の師を發す。

慶長三年 戊戌 二二五八 (一五九八)

岡家重、浮田秀家の仕を辭し、醫を業とす、小兒科を行ふ。

△加藤清正、朝鮮より「醫方類聚」二六三卷を持來す。

※ 豊臣秀吉、伏見城に歿す(六三)。

朝鮮人俘虜と我國工藝

秀吉の起したる文祿、慶長の朝鮮征討の兩役に俘虜として我國に連れ來りし者の數は夥しきものにて、中には當時盛んなりし茶道に刺戟されて陶、磁器を製し我國工藝界に貢獻する者多かりき。筑前の鷹取燒、豊前の上野燒、肥前の有田燒、平戸燒、薩摩燒、長門の萩燒等は又彼等俘虜の創めたるものなり。

慶長四年 己亥 二二五九 (一五九九)

徳川家康、木製活字を作らしむ(同十年迄、伏見版本)。

施藥院 至宗(丹波氏より出づ、叡山に致し、豊臣秀吉に交はる施藥の所を禁闕の南門に建つ)歿す(七四)。

施藥院宗伯(全宗を繼ぐ)、家康許して侍醫となす。

朱印船(奉書船)と海外發展

文祿元年(一五九二)豊臣秀吉が南海渡航の船に其許可書朱印狀を與へたるを嚆矢とし徳川初期に亘り外國貿易を許可されたる船舶を云ふ。長崎、堺、京都等の商沽競ひて船舶を出す、支那、南海、南洋、印度等に及び、我國人の彼地に居留するものも増加し海外發展の見るべきものありしも寛永十三年(一六三六)に至り耶穌教の弊により遂に領國の令を布くに至り朱印船も廢止さるに至れり。彼地への渡航、居留邦人中、山田仁左衛門(長政)、津田又左衛門、荒木宗太郎、木谷久左衛門、西村太郎衛門等は其高名なるものなり。當時の貿易商の中に京都の醫系角倉了以父子あり。

江戸時代(約二六七年間)

慶長五年—慶應三年

後陽成・後水尾・明正・後光明・後西・靈元・東山・中御門・櫻町・桃園・後櫻町・後桃園・光格・仁孝・孝明・明治の諸天皇の治世

後陽成天皇

慶長五年 庚子 二二六〇 (一六〇〇)

※ 關ヶ原戰にて家康軍勝つ。

一五九五

※ 和蘭人、喜望峯を廻りて東印度に航す。

一五九六

和蘭人、東洋に進出。

一五九七

△マルブルヒ、醫學校にて麥角中毒を探究す(麥角の付したるライ麥パン中毒)。

西力東漸時代・資本主義發生時代・近代國家成立時代
明・清時代

〔一六〇〇—一八六七〕

十七世紀—十八世紀—十九世紀前半

一六〇〇

在支、伊人利瑪竇(マテオリアチ)燕京に入る。

家康、活字三十萬を新彫す。

※三月、ウイリアム・アダムス William Adams (英人、後日本に居住し三浦按針と云ふ) ヤン・ヨーステン Jan Joosten (蘭人) 等の乗組たる和蘭船 *Tycho* 號豊後に漂着す。五月家康、大阪城にて引見す。

慶長六年 (一六〇一) 東海道五十三次の驛傳馬の制を定む。

慶長七年 (一六〇二)

徳川家康、江戸城内に文庫を建て (富士見文庫) 金澤文庫の書籍などを移し足利學校の僧寒松に命じ其目錄を作らしむ。

慶長八年 (一六〇三)

※徳川家康、將軍となる。

慶長九年 (一六〇四)

永樂錢流通す。

安南に書を送る。

幕府、初めて長崎に譯官を置く。

黒田如水没す (五九)。

慶長十年 (一六〇五)

※秀忠、將軍となる。

煙草の種を長崎に植ふ。

慶長十一年 (一六〇六)

家康、銅活字を新鑄せしむ (駿河版)。

慶長十二年 丁未 二二六七 (一六〇七)

林道春、長崎に於て求めたる李時珍の本草綱目を幕府に上る。

慶長十三年 戊申 二二六八 (一六〇八)

曲直瀬道三、「醫學天正記」三卷を著す。

慶長十四年 (一六〇九)

※和蘭と修交通商をなす。

幕府、諸侯の妻子を江戸に留めて質とす。

慶長十五年 (一六一〇)

田中勝助、家康の命を奉じ墨國 (ノバ・イスパニヤ New Spain) に渡る。

ポルトガル耶穌會教師フェレイラ Ferreira Christovao 來朝す (寛永十年捕へられ轉宗して澤野忠庵と稱し切支丹組間の通詞に任ぜらる)。

慶長十六年 (一六一一)

※切支丹宗を禁ず。

※世界地圖、日本に渡り来る。

第百八代

後水尾天皇

慶長十八年 癸丑 二二七三 (一六一三)

△兼康氏 (金保氏、口齒科、鍼博士丹波康頼の裔、多紀氏は其後なり) 幕府醫官となる。

※伊達政宗、支倉六右衛門をソロチと共に羅馬に遣す。

英、ギルバート Gilbert 磁石、磁性體及地球の大磁石に就きて新論を出す。

※英吉利の東印度會社設立。

一六〇一 丁、チホ・ブラク Tycho Brahe (一五四六、天文學者) 歿す。蘭人、オーストラリアを發見す。

一六〇二

※和蘭の東印度會社設立。

一六〇四

佛蘭西の東印度會社設立。

當時新興和蘭、英吉利は今迄世界的航海權を保持したる葡萄牙、西班牙に共同對抗せんとしつつありしものにして、一方歐洲に宗教改革あり、新舊教の對立、摩擦ありて是等鬭争は益々熾んとなる。後徳川幕府南蠻切支丹 (葡、西) の交易禁止をなす一因は又當時の新進和蘭の政策によるを想像せしむ。

一六〇六

和蘭の眼鏡師ヤンセン兄弟 Hans & Zacharias Jansen 創めて顯微鏡を作る。

一六〇八

クワロル Quercus 甘栗の製法を記載す (甘栗は輕粉として支那、日本には古くより醫藥に使用されたり)。

一六〇九

△アギヤン Aguin 甘栗の製法を記す。

獨、ケプレル Kepler 網膜の映像の倒像なるを發見す。

一六一〇

トラウトマン Jeremias Trautmann 子宮脱の産婦に切開分鏡 (帝王切開) をなす。

ハドン、ハドン灣を探險す。

英船、平戸に来港。
慶長十九年 甲寅 二二七四〔一六一四〕
半田順庵、阿媽港に赴き醫術を學ぶ。

吉田(角倉)了以歿す(六一)。

元和元年 乙卯 二二七五〔一六一五〕
喫煙を禁じ、煙草の賣買並に栽培を止む。

饗庭東庵(曲直瀬の門)歿す。

林道春、家康の命により銅活字一萬個を用ひて「群書治要」、「大藏一覽」の開板を監す。

幕府、公家諸法度と武家諸法度を定む。

元和二年 丙辰 二二七六〔一六一六〕
徳川家康歿す(七五)。

西吉兵衛、南蠻大通詞となる。

後西流外科の始をなす。

御蘭意齋(官鍼博士、門人多く著書あり)歿す。

伊達政宗、横澤將監を墨國、ノバ・イスパニヤ New Spain に遣す。

元和三年 丁巳 二二七七〔一六一七〕
二代將軍、秀忠。

幕府、吉原遊廓を許す。

煙草栽培を禁ず。

△那波道圓、校訂、活字「和名類聚抄」二十巻印刷成る。

元和五年〔一六一九〕

※山田長政、シャムに軍功を樹つ。

藤原愷高(朱子學派)歿す(五九)。

元和六年 庚申 二二八〇〔一六二〇〕

△英人、ウイリアムス・アダムス(三浦按針)平戸に歿す(五七)。
伊達政宗の支倉常長、歸朝す。

△河野松安、長時に醫術を學ぶ。

元和八年〔一六二二〕

毛利重能(明に渡り算法を學ぶ)、「歸除叢法」を著はす。珠算之より起る。

長時にて耶蘇教徒、刑せらる。

元和九年 癸亥 二二八三〔一六二三〕

※家光、將軍となる。

平戸の英商館閉鎖す。

△岡本玄治、東下して秀忠の病を療す。

曲直瀬玄朔、「醫方明鑑」を著はす。

一六一四 英、ネビーア Napier 對數發見の著述を出す。

一六一五 明、陳實功「外科正宗」を撰す。

一六一六 英、レクスビーア William Shakespeare (一五六四) 大劇作家(歿す)。
英、ハーヴェイ Harvey 血液の循環するを發見す。

一六一八―一六四八

※三十年戰爭、獨對佛瑞典の宗教戰。

一六一九

※和蘭人、瓜哇(パタウイヤ)を根據地とす。

一六二〇

英、フーコン Francis Bacon (大哲學者)のノーヴム・オルガノム Novum organum scientiarum 著はる。

アユルキ對數表公にさる。

一六三三

蘭、ドレッツベル Cornelius Drebbel 顯微鏡を改良し實用化する。

△獨、ミンデル Minderer (一五七〇) ミンデル氏精の創製者、醫にして藥に精し(歿す)。

北京にて洋醫ターレンツ Jean Terrenz 「人身概説」を著はす。

一六三三

△伊、アセリオ Casparo Acellio 犬に於て乳糜管を發見す。

一六三三

和蘭人、臺灣澎湖島に據る。

獨逸刊行の萬國地圖に初めて日本國を載す。

一六三四

△伊、サントリオ・サントロ Santorio Santro 醫學靜力學を著は

寛永四年 (一六二七)
京都の吉田光由、珠算書「塵劫記」を著す。
寛永五年 (一六二八)
比叡山の延暦寺講堂建つ。
濱田彌兵衛、臺灣に蘭人を打つ。
雨森芳洲歿す。
武田道安 (法眼、「記珠方」等著書あり) 歿す(八二)。

明正天皇

寛永七年 庚午 三三九〇 (一六三〇)
林道春、忍岡に學寮を建つ。
暹羅リゴール王、山田長政毒殺さる。
藤堂高虎、歿す。
永田徳不 (月湖の弟子、月鼎に醫を學ぶ、張仲景の學説を踐む、將軍秀忠の病を治して十八文を請求す、彼れ一服十八文の薬を行商、諸國行脚す) 歿す(一一八)。

寛永八年 辛未 三三九一 (一六三一)
曲直瀬玄朔 (法眼、延命院) 歿す(八三)。
美濃、深田正室、萬國地圖と地球儀を作り尾張侯徳川義直に獻す。義直又幕府に呈す。
寛永九年 (一六三二)
林道春、聖堂を忍岡に建つ。
徳川秀忠 (二代將軍) 歿す。
寛永十年 癸酉 三三九三 (一六三三)
切支丹宣教師、葡人、ヘレーラ Ferreira 歸化して禪宗となり澤野忠庵と稱す。
寛永十一年 (一六三四)
明の僧、如定來り石橋及攻玉、眼鏡製造の法を傳ふ、此頃長崎人濱田彌兵衛亦眼鏡を造る。
※長崎港に扇形をなしたる小島を出島と稱し起工さる。

寛永十二年 (一六三五)
※外國貿易の朱印船を停止す。
寛永十三年 (一六三六)
荷蘭人を長崎出島に居住せしめ、日葡混血兒をマカオに追放す。
寛永十四年 丁丑 三三九七 (一六三七)
本阿彌光悅、歿す。
△乗附爲春齋 (丹波氏の出、女科) 歿す。
△板坂卜齋、紀州侯に請ひ藥草三十六種を朝鮮に求む。

す。
一六二六
△伊、アゼリオ Asellio (一五八一)、解剖學者、脾臓の存在を知る) 歿す。
△蘭、センネルト D. Sennert 赤痢を記述す。

血液循環に關する支那文獻
素問、舉痛論云、經脈流行不正、環周不休、調經論曰、孫脈(毛細血管)、滿則傳入於絡脈(靜脈)、絡脈滿則輸入大經脈(動脈)
一六二八
英、ハーヴェー William Harvey、心臟及血液循環に關する論述 De motu cordis et sanguinis in animalibus を發表す。
△佛、Fabrice de Keirsee 人に於て亂脈管を發見す。

一六二九
伊、フアーベル Johannes Faber (伊、山猫學會員、顯微鏡 Mikroskop なる語の創始者) 歿す。
一六三〇
獨、ケプレル Johannes Kepler (一五七一、天文學者) 歿す。

一六三一
明、崇禎四年、陳司成「微瘡秘錄」を著す。

一六三三
ジュズネスト教僧侶 Barnabe de Cobo によりペルーより西班牙に、續いて羅馬に規那皮輸入さる。
一六三三
△マルシェナス Dominique Marchetti 腎切開術を行ふ。

一六三四
和蘭、ユトレヒト大學創立。
△ルシタヌス Zaechnus Lusitanus 瘰癧症を記載す。
獨、ヒルデン W. F. von Hilden (一五六〇、四肢切斷、磁力により眼球内鐵片を吸引す) 歿す。

一六三六
△伊、サントロ Santorio Santoro, Sanctiorius (一五六一、理學醫學派) 歿す。
一六三七
△佛、デカルト Desartes 調節と瞳孔收縮を論ず。

寛永十五年 戊寅 二二九八 (一六三八)

※天主教の禁を厳にす(前年天草一揆、島原之亂)。和蘭、日本と交易を開く。

△藥園を品川、牛込に開く。

寛永十六年(閏) (一六三九)

蘭船、平戸に来る。

伊豆伊東にて安宅丸成る、本邦未曾有の大船なり。

江戸城内の富士見文庫を同城内紅葉山に移す(紅葉山文庫)。

寛永十七年 (一六四〇)

中江藤樹、林羅山、太田宗資等著はる。

家光、西紀を剽擄したる倉庫の破壊を命ず。

京都に島原遊里設けらる。

仙臺藩士、支倉六右衛門、切支丹嫌疑にて家亡ぼさる。

寛永十八年 (一六四一)

平戸の蘭人商館を長崎出島に移さしむ。

譯官、通事を長崎奉行の下に置く。

鎖國令・和蘭との交通

幕府島原の亂に鑑み「切支丹」(カトリック舊教)の弊を認め、舊教を奉ずる葡萄牙との貿易を禁じ、葡萄牙人を放逐し、長崎出島に據る切支丹に關係なき和蘭人、支那人にのみ交易を許せり。

爾來我國への西歐文化輸入は、専ら和蘭を通じて行はるるに至れり。

西洋醫學の輸入(第二期)

長崎の和蘭商館を通じて西洋醫學輸入され、所謂蘭學の勃興を來たす。

一六三八

伊、ガリレオ Galilei 力學論を發表。

ハーバート大學創立。

一六三九

デル・ヒンコン Graf del Cincón (伯爵夫人) 規那皮を秘露より西班牙に持來す。

一六四〇

葡萄牙、西班牙より獨立す。

バスカル(十八歳)圓、離曲線に關する論文を發表。

南米エタアドルより歐洲にキナ皮をマラリア薬として輸入さる。

△伊、セヴェリノ Severino 水雪を以て局所麻酔を試む。

一六四一

△蘭、シルビウス F. Sylvius 初め「腦髓の解剖」をなす。

△獨、ホフマン Moritz Hoffmann 鳥の膀胱を發見す。

寛永十九年 壬午 二二〇二 (一六四二)

堀正意(曲直瀬門派)歿す(五八)。

和蘭甲比丹、エンサラキ江戸に參府し方物を獻ず。

寛永二十年 癸未 二二〇三 (一六四三)

吉田安齋、媽港に醫を學ぶ。

栗島道喜、呂宋に醫を修む。

南蠻船、天文書を獻ず。

後光明天皇

第百十代

正保二年 乙酉 二二〇五 (一六四五)

岡本玄治(古醫方曲直瀬玄朔の門、徳川秀忠、家光の病を治す、門弟多し、著書多し)歿す(五九)。

宮本武藏歿す。

清の鄭芝龍及び其子成功、我國に援兵を請ふ。

一六四二

英、ニウトン Isaac Newton 生まる。

伊、トリチェリ Torricelli 晴雨計を發明す。

伊、ガレリオ Galileo Galilei (一五六四) 落下の法則發見者歿す。

蘭、臺灣より西班牙人を逐ふ。

△獨、ウイリスング G. Wirsung 人に於て尿管を發見す。

△蘭、ボンチウス Jacob Bontius 東印度の脚氣及び熱帯赤痢を記す。

一六四三

△レナウス Marcellus Læcius 職位全轉錯症を報ず。

△ルジタヌス Zactus Iustinus 全身性癩皮症を報ず。

伊、セムリヌス M. Severinus 海蛇頭 Caput Medusae を記載す。

一六四四

ベルギーのヴァン・ヘルモント Van Helmont (一五七八) 醫學者にして化學者 Jatrochemiker 初めて「瓦斯」なる言葉を提唱し、胃腸病治療を研究す(歿す)。

※明亡ぶ。(一三六八—一六四四) 二七七年間續きたり。

一六四五

△伊、セベリヌス Severinus デモクリタスの動物解剖學を公にす。

英、ロンドンに Invisible College 會合せる。

正保三年 丙戌 三三〇六 (一六四六)
野間玄珠 (玄朝の門) 歿す (五六)。
僧、澤庵歿す (七三)。

正保四年 丁亥 三三〇七 (一六四七)
△長崎に明倫堂成り漢學、和學、醫學を教授す、向井元升官に請ひ
東上町に聖廟を建つ。

慶安元年 戊子 三三〇八 (一六四八)
△中江藤樹歿す (醫書の著述あり) (四)。

慶安二年 己丑 三三〇九 (一六四九)
和蘭甲必丹、フリシウス江戸に例參し、醫員カスバル・
スハンベルヘン Caspar Schambergen 之に隨行し、江
戸に滞留十ヶ月餘に及び其間私かに醫術を傳ふ、世に云
ふカスバル流外科之なり。

慶安三年 庚寅 三三一〇 (一六五〇)
浮世繪の始祖、岩佐又兵衛歿す (七三)。
寛永十九年 (一六四二) 筑前に漂着したる蠻船より得た
る天文書をフェレーラ (後歸化して澤野忠庵) にローマ
字にて譯せしめしものを向井元松、西吉兵衛日本文字に
譯し「乾坤辨説」と云ふ。我國最初の西洋翻譯書なり。

慶安四年 (一六五一)
將軍家光歿し、家嗣斷ぐ。
山井正雪、九橋忠彌等幕府を倒さんと謀り事敗る。
是歲より和蘭人の風聞書を見ることを得。

承應元年 壬辰 三三一一 (一六五二)
△澤野忠庵 (葡人にして歸化したる醫) 歿す (七三)。

承應二年 癸巳 三三一二 (一六五三)
明人、戴曼公、長崎に來り治痘の方を傳ふ。

江戸、玉川上水工事始まる。
秤日の制を定む (東國は守隨氏、西國は神谷氏の秤を用ふ)。

後西天皇

承應三年 甲午 三三一四 (一六五四)
向井元升、譯官と共に蘭醫のメストロアンス・ヨンアン
の口傳を和譯して「紅毛流外科秘要」七卷を作る。

唐僧、隱元禪師、長崎に來り歸化す。
明曆元年 乙未 三三一五 (一六五五)
淺草文庫の創立者、醫師板坂卜齋歿す (七八)。

明曆二年 丙申 三三一六 (一六五六)
「乾坤辨説」進上さる。

明曆三年 丁酉 三三一七 (一六五七)
△古林見宜 (祖祐村、明に遊ぶ、丹波派、著書多し) 歿す (七九)。

江戸大火 (振袖火事) 死者十萬八千餘人。
幕府、湯女 (私娼) を禁ず。
林藏山 (道春) 歿す (七五)。
徳川光圀、大日本史「編纂」に着手。
金澤清左衛門、規矩術を用ひて江戸地圖を作る。

一六四六
△蘭、デイメルブロック Diemerbroek ネットを記述す。

一六四七
△英、ウィリス Th. Willis 糖尿病患者の尿の甘味により糖を含む
を認む。

△佛、Jean Pecquet 犬に於て胸管を發見す。

一六四八
△ジエヌエスト派僧キルヘル A. Kircher 鼓膜を記載す。

一六五〇
△佛、デカルト René Descartes (一五九六—、哲學者にして解析
幾何學を創設す、氏の機械觀哲學は又ハーヴェーの血液循環發見
と共に當時の醫學に一新生面を拓かしむ) 歿す。

△英、グリフソン Glisson 佝僂病を記載す。

一六五一
△丁抹、バルトリン Th. Bartholin 淋巴管を發見す。

△英、ハイモール N. Highmore 上顎竇を發見す。

一六五二
△蘭、Joh. van Horne 人に於て胸管を發見す。

一六五三
△瑞典、ルドベック O. Rudbeck 淋巴管を發見す。

【一六五三—五八英國 Cromwell の革命】

一六五四
獨、フェルチナンド Ferdinand II. アルコール寒暖計
を作る。

一六五五
△獨、シュナイデル Schneider 小兒の咽頭粘膜に存する固有の腺
様組織に注目す。

一六五六
△英、ワルトン Th. Walton 顎下腺管を發見す。

△蘭、ホイヘンス Huygens 重錘装置の時計を發明す。

一六五七
英、生理學者ウィリアム・ハーヴェー William Harvey
(一五七八—、血液循環を發表す) 歿す。

伊、マルビギー Malpighi 毛細血管、氣管支と肺胞の關
係、筋肉と纖維組織等の區別をなす。

伊、アカデミア Accademia 水銀寒暖計を作る。

寛治元年 戊戌 二二一八〔一六五八〕
△向井元升(又元松)京都に移住す(五〇)。
下總佐倉の義民木内宗五郎刑死す。

寛治二年 一六五九
明人、朱之瑜(舜水)及び陳元賛來朝す。

寛文元年 辛丑 二二二一〔一六六一〕
嵐山甫安、松浦侯の命により長崎に赴きアルマン・カ
ッツに和蘭外科を學ぶ。

寛文二年 壬寅 二二三三〔一六六二〕
アンマン・カッツ歸國シダンネル長崎出島に來る(三
年在留)。
鄭成功、臺灣に據り和蘭人を逐ふ。

元天皇^{第百十二代}
寛文三年 癸卯 二二三三〔一六六三〕

黒川道祐、「本朝醫考」三卷を著す。
杉本忠恵(長崎の南蠻流外科、澤野忠庵の門人)、幕府の
醫官となる。

△施藥院宗伯歿す(八八)。

野中象山歿す(四九)。

寛文四年 甲辰 二二三四〔一六六四〕
永井尚庸、本朝編年史の總裁を命ぜらる。
△醫、江村專齋歿す(一〇〇)。

寛文六年 丙午 二二三六〔一六六六〕

△藥商の制を定む。

山鹿素行の「聖教要録」禁止され、赤穂に配さる。

中村惕齋、「調蒙圖彙」(二十一卷)出版さる、我國博物學書の最
初をなす。

一六五八
蘭、ホイヘンス Huygens 振子時計を發明す。

蘭、スワンメルダム Jan Swammerdam 蛙の血球を
發見す。

△ウエッフェル J. Wepfer 卒中は腸出血によるとなす。

一六五九
△洋醫ボイム Michael Boym 支那に渡來す。

一六六〇

△獨シ・ナイデル Schneider 鼻汁は腸より作らるるものにあらず
して粘膜より作らるるとす。

一六六一

△丁、ステノ Nikolaus Steno (一六三八—一八七) 耳下腺の排液管
を發見す。

英、チャンバレン Chamberlen 産科鉗子を秘かに製
し使用し公開せず。

一六六二

ロンドンの王立學會創設。

* 明亡び清の時代(一六六二—一九一一)となる。

佛、パスカル Pascal (一六二五—、物理學者)歿す。

一六六四

△蘭、グラーフ Graaf 唾液腺と膵腺に永久尿管を作る。

△蘭、スワンメルダム Jan Swammerdam 淋管の瓣膜を發見
す。

一六六五

英、フック Robert Hooke 植物に Cell「小室」(細胞に
對する原始名)を認む。

△伊、マルピギー Malpighi 白血球を發見す。

英、レン Christopher Wren、ローワー Richard Lower
犬に直接輸血をなす。

△英、ローワー Lower 人工呼吸により血液の鮮紅となるを認む。

佛蘭西に科學雜誌 Journal des Savans 刊行せる。

一六六六

△英、カウパー Cowper 尿道腺を精述す。

英、ボイル Boyle、佛、マリオット Mariotte 氣體の壓力と容積
の關係の公式を發表す(一六六二—一六七九年)。

英、ニュートン Newton 光學及び宇宙引力に關し論文を發表す。
佛のアカデミー Académie des Sciences 創立。

寛文七年〔一六六七〕
近畿諸國の本田島に煙草栽培を禁ず。
徳川光圀、備臣に著髪せしむ。

寛文八年 戊申 二二三八〔一六六八〕
戸田旭山、「中條流産科全書」を著す。

寛文九年 己酉 二二三九〔一六六九〕
長崎大通詞、西吉兵衛、醫業を立て玄甫と號す。(西流の祖)「諸國土産書」を作る。

△名古屋玄醫、「問甫食物本草」二巻を著す。
野々口(繼屋)立圃歿す(七一)。

寛文十年 庚戌 二二三〇〔一六七〇〕

嵐山甫安、長崎より京都に出づ。
大坂、橋本正數、算木代數の書「古今算法記」を著す。
安井算哲、地球儀を製す。
林篤信等、「本朝通鑑」三百十巻成る。
末次平藏、蘭式船を建造して幕府に獻す。

寛文十一年 辛亥 二二三一〔一六七一〕
向井元升、加州侯の請に應じ「庖厨備用大和本草」十三巻を著す。
河村瑞軒、江戸陸奥間の海運を始む。

寛文十二年 壬子 二二三二〔一六七二〕
「校正本草綱目」三十九冊雕刻成る。之れ本草綱目我國最初の雕刻不なり。
徳川光圀、彰考館を開く。

延寶元年 癸丑 二二三三〔一六七三〕
長崎蘭館醫としてリーネ W. ten Rhyne 來朝。

延寶二年〔一六七四〕
關孝和、「發微算法」(代數學)を説く。
狩野探幽歿す(七三)。
天主教禁制の高札を建つ。

延寶三年〔一六七五〕
獨逸人、タレイル Andrew Cleyer 和蘭貢使に隨ひ江戸に參府、將軍に謁す、長崎に留まること四年、貞享三年歸國す。其間日本産植物を研究し千三百六十種の圖説を作り、彼地の學術雜誌に掲載す。歐洲人の我國植物を研究したる最初の人なり、後年シーボルト本邦の補に Cleyera の屬名を付す。

一六六七
佛、デニ Denis 英、ロー Lower 人體に輸血を敢行す。

蘭、レウエンヘーク Anton van Leeuwenhoek 水を檢鏡してバクテリア(微生物)を發見す。

一六六八

△獨、グラウベル Glauber (一六〇三)、製藥化學者、硫酸ソーダ、驚異藥著はる(歿す)。

△佛、マリオット Mariotte (物理學者)眼底の盲斑を發見す。

一六六九
獨、ブランド Braundt 燐を發見す。

一六七〇

△伊、マルビギー Malpighi 腎臓内にマルビギー氏小體を發見す。
△ツァンベッカー Zambecari 犬に就いて經腹膜腎臓出術を行ふ。

一六七一

澳、コメニウス Comenius (一五九二)、教育者、大教授書 Didactica Magna, 世界圖繪 Orbis Pictus の著者(歿す)。

一六七二

蘭、ボエ Franz De Boe 一名シルビウス Franciscus Sylvius (一六一四)「醫藥化學派 Jatrochemical school」を立つ、和蘭ライデン大學に名聲高し(歿す)。

△グレイセル George Greisel 急性脾臓壊死を初めて報す。

△佛、ル・グラ Le Gras 吐根を歐洲に輸入す。

△佛、セニエット Seignette 新製下劑セニエット鹽を發見す。

△英、ウイリス Willis 氣管支喘息を評述す。

△獨、ブルンネル Brunner 十二指腸腺を記す。

一六七三

△蘭、グラーフ R. de Graaf (一六四一)、グラーフ氏卵胞を發見す(歿す)。

蘭、レウエンヘーク Leeuwenhoek 人血中に赤血球を發見す。

一六七五

△英、ウイリス Wh. Willis (一六二二)、ウイリス動脈環(歿す)。
蘭、ブランカルト St. Blankaard 血管内注射をなす。

延寶四年 丙辰 二二三六(一六七六)

△野間三竹(玄孫の子)歿す(六九)。

延寶五年(閏) 丁巳 二二三七(一六七七)

△向井靈蘭(元升、古醫方、儒者、門下に具原益軒あり、著書十餘種あり)歿す(六九)。

明僧、心越、慧雲等歸化する。

延寶六年 戊午 二二三八(一六七八)

△館林了庵、新井玄圭等「食物摘要」六巻を著はす。

山脇玄心(曲直瀬玄朝の門、五朝に仕ふ侍醫、勅撰「養壽録」を著はす)歿す(八一)。

△佐藤信淵(二世、醫にして「經緯記」を著はす)歿す。

延寶七年 己未 二二三九(一六七九)

名古屋玄醫、「醫方問餘」を著はし古醫方を唱ふ。

天和二年 壬戌 二三四二(一六八二)

將軍二の丸にて蘭人の國樂を聴く。

△山崎闇斎歿す。

天和三年 癸亥 二三四三(一六八三)

嵐山市安、「蕃國治方類聚」(二巻)を著はす。

備前、岡山の醫、萬代(モズ)淨閑富山に來り、藩主前田正甫に秘法反魂丹を奉る。正甫元祿三年江戸に在り登城中、某國主の急病を反魂丹にて救ひ其奇効業に認められ、國境の閉ぢられたる封建時代にも民間藥反魂丹、富山の賣藥として官許を得て全國に行商するに至る。

貞享元年 甲子 二三四四(一六八四)

西玄甫(幕府醫官、和蘭通詞、葡萄牙文字の天文書を譯解し「乾坤辨説」を著はす。之我國に於ける西洋書翻譯の嚆矢)歿す。

△人見玄徳(法印、小兒科)歿す(八一)。

保井算哲、新曆(貞享曆)を撰進す、元の授時曆によりて新作せるものなり。

貞享二年 乙丑 二三四五(一六八五)

檜林鎮山、一六四九年刊の佛醫アムプロアス・ハーレー

一六七六

△獨、ブランドेट Brandet 尿中より糖を證明す。

一六七七

蘭、スピノザ Spinoza (一六三二—、哲學者)歿す。

△英、グリッソン Gisson (解剖、内科、肝臓グリッソン氏囊を發見す)歿す(一五九七)。

蘭、ハム Ham 精蟲を發見す。

一六七八

蘭、ホイヘンス Christian Huygens 光の波動説の論著を出す。

一六七九

伊、ボレリ Giovanni Alphonso Borelli (一六〇八—、

ナポリの人、醫藥力学派 Jatromechanical school を立つ)歿す。

英、メーヨー J. Mayow (一六四五—、化學、生理學者、呼吸に

空氣の成分必用を論ず)歿す。

△バッハマン A. Q. Bachmann 消化不良論 De Dyspepsia を著

はす。

△瑞西、ボネー Th. Bonet 病理解剖書 Sepulchretum seu

anatomica practica ex cadaveribus morbo denatis を著は

す。

△蘭、レウウェンハーク Leuwenhoek 筋肉の横紋を發見す。

一六八〇

△蘭、ショワンメルダム Jan Schwammerdam (一六三七—、解

剖學者、注射を始む)歿す。

△丁抹、バルトリン Thomas Bartholin (一六一六—、解剖學に

精し)歿す。

一六八二

△マウリエ St. Mauriac 卵巣妊娠を報ず。

一六八三

英、ニートン I. Newton 萬有引力の法則を發見す。

一六八四

獨、ライプニッツ W. Leibnitz 微分學を發明す。

一六八五

△英、ハイモーン Highmore (一六一三—)歿す。

mbroize Parté の蘭譯を得て之を譯讀す。
山鹿素行歿す(六四)。

貞享三年 丙寅 二三四六(一六八六)

幕府、醫瀬尾昌琢に蘭醫術を學ばしむ。

△井上玄微(曲直瀬玄朝の門、朝廷幕府に治を行ふ)歿す(八五)。

△今大路玄淵(典藥頭)歿す(五一)。

伊良子道牛、蘭を修得に長崎に赴く。

貞享四年 丁卯 二三四七(一六八七)

嵐山甫安、兎腎手術を行ふ。

東山天皇

元祿元年 戊辰 二三四八(一六八八)

△橋本綱山、「外科諸伎術書」を蘭書より譯述す。

和蘭館にホフマン醫員として來朝す。

△長崎の醫、盧草碩歿す(四三)。

元祿二年(閏正) 己巳 二三四九(一六八九)

「眼目明鑑」刊行さる、之我國眼科専門書の始なり。

△幕府、普鏡科杉山和一に加菴す。

長崎に唐人屋敷設けらる。

元祿三年 庚午 二三五〇(一六九〇)

獨人、ケンプエル Engelbert Kaempfer (一六五一—一七二六) 出島商館醫員として來朝す。翌年、蘭使將軍に引見さる時隨行す。

聖堂を湯島に移し、昌平坂學問所と改め官學とす。

一六八六
獨、ゲーリケ V. Guericke (一六〇二—、物理學者、排氣機を發明しマクデブルヒ半球の實驗をなし、電氣磁氣の知見を廣め同名の電氣相反撥するを發見す)歿す。

△丁、ステノ Steno (一六四八—、耳下腺管等を發見す)歿す。

一六八七

△伊、ボノモ C. Bonomo 疥癬虫を發見す。

一六八九
英、トーマス・シイドナム Thomas Sydenham (一六一二—、臨牀學者、疾病の分類に貢獻す)歿す。

著者不詳、「人倫訓蒙圖彙」刊行さる。

元祿四年 辛未 二三五二(一六九一)

和蘭外科醫、栗崎正羽、吉田自庵、村山自伯、幕府醫官となる。

△黒川道祐(儒醫「本朝醫考」を著はし「醫人傳」を作りしも祖先を褒めたる廉にて禁止さる)歿す。

熊澤蕃山(七三)、土佐光起歿す。

△和蘭貢使、江戸に參府、醫ケンプエル隨從す。

元祿五年 壬申 二三五三(一六九二)

△橋本綱山、通詞を辭し和蘭流外科に専念す。

徳川光圀、楠木正成の碑を澁川に建つ。

△ケンプエル歸國す。

△桂川甫筑(三三)、蘭方外科を以て甲府侯徳川綱豊に仕ふ。

香月啓益「婦人壽草」を著はす。

元祿六年 癸酉 二三五三(一六九三)

新井白石、甲府侯の侍講となる。

△嵐山甫安(平戸通詞、外科を修む)歿す(六一)。

井原西鶴歿す(五二)。

元祿七年 甲戌 二三五四(一六九四)

鍼醫、杉山和一歿す(八五)。

俳人、松尾芭蕉(五一)、吉川惟足(七九)、狩野益信、繪師菱川師宣歿す。

僧丹、智環、吉田光由集「倭漢合運指掌圖」(年表、四卷)上梓さる。

一六九一
獨、シュライエル Schreyer 法醫學の肺試験 Lungen schwinprobe を發表す。

英、ボイル R. Boyle (一六二七—、化學者、ボイルの定律を發見す)歿す。

一六九四
伊、マルコギー Marcello Malpighi (一六一八—、解剖學者、腎マルビギー氏體發見者)歿す。

英蘭銀行創立す。

△蘭、デッケルス Frederik Dekkers 煮沸法及び醋酸加試験にて蛋白尿を知る。

元祿八年 乙亥 二三五五(一六九五)

岡不二抱、「病因指南」を著す。

△人見元徳、「本朝食鑑」十二巻を撰す。

長崎の西川如見(西洋の地理、天文に通ず)、「華夷通商考」を著す。

元祿九年 丙子 二三五六(一六九六)

幕府、奉行に命じ海内輿地圖を校正せしむ。

桂川甫筑(和蘭流外科嵐山の流)幕府醫官となる。

△伊良子道牛(漢蘭折衷派)山城國伏見に開業す。

名古屋支醫(張仲景の古方醫にして)「醫方問餘」、「脈要訓蒙」、「怪病一得」、「金匱註解」等多数の著述をなす(歿す(六九))。

古醫方の樹立と名古屋支醫

室町時代、田代三喜明國に渡り彼地にて金、元の李、朱醫方を習得し歸朝するや之を唱道し、門人曲直瀬道三、又此醫方を宣傳するに及び我國醫方は概ね道三派に歸したり。徳川四代將軍家綱時代(寛治年間)に京都の名古(護)屋支醫は之に對し醫方は宜しく古方に復歸すべきものとし漢の張仲景を祖述せり、續きて後藤長山「内經」及び「傷寒論」を師宗とす。世之を古方家と稱し、李、朱の醫方を奉ずるものは後世家と云はるるに至りたり。

元祿十年(一六九七)

本木良意(大通詞)歿す(七〇)。

元祿十一年 戊庚 二三五八(一六九八)

京都、岡不爲竹「廣益本草大成」二十三巻、「和語本草綱目」一巻を著す。

△木下順庵歿す(七八)。

宮崎安貞歿す。

種子ヶ島の領主種子島久基、琉球王より甘藷を得て島内に殖ゆ。

元祿十二年 己卯 二三五九(一六九九)

△井關玄説(曲直瀬玄朝の門、法眼)歿す(八二)。

△河村瑞軒歿す(八三)。

元祿十三年 庚辰 二三六〇(一七〇〇)

△鳩野宗巴(初代、南蠻に私かに航す、又長崎にて南蠻、和蘭醫に學ぶ)歿す。

△鳩野宗巴(初代、南蠻に私かに航す、又長崎にて南蠻、和蘭醫に學ぶ)歿す。

△水戸光圀歿す(七三)。

△水戸光圀歿す(七三)。

元祿十四年 辛巳 二三六一(一七〇一)

淺野長矩、吉良義央を殿中に傷く。

△栗崎正羽、坂本養貞、吉良義央の創を継ふ。

△北山友松子(明人の子、歸化僧獨立の門、醫方に精し)歿す。

元祿十五年 壬午 二三六二(一七〇二)

△中村惕齋歿す(七四)。

一六九五

フランス、出版の自由を許す。

△フランシス・ホイヘンス Huygens (一六二九) 物理学、複合レンズ、波動説)歿す。

波動説)歿す。

一六九八

サウアリー Thomas Savery 實用蒸気原動機に特許を得。

一六九九

△洋醫ローデス Bernard Rhode 北京にて御醫となる。

△伊、ラマツチ Bernard Ramazzini 職業病学 De morbis artificum diatriba を始めて提唱す。

獨、ベルリンアカデミー(學會)設立。

十八世紀

一七〇一

米、エール大學建つ。

△コモール M. Chomel 十二指腸瘻室を記載す。

△ホウストウン R. Housoun 卵巣囊腫を臨牀診断す。

一七〇二

△獨、ホルムズグ Homberg 細菌を發見す。

△蘭、ブランカルト Stephan Blankaard (一一五〇) 臨牀家、初めて靜脈内注射をなす)歿す。其著述は我國

臨牀家、初めて靜脈内注射をなす)歿す。其著述は我國

元禄十六年 癸未 二二六三〔一七〇三〕
△松下見林(古林見宜の門)歿す(六七)。

寶永二年 乙酉 二二六五〔一七〇五〕

△淺井周伯(味岡三伯の門、井原道聞、岡本一抱と併び名聲高し)歿す(六三)。

△伊藤仁齋(七九)、北村季吟歿す。

△村上等全(冬嶺と號す、痘科、御醫、法印)歿す(八二)。
甘藷、琉球より薩摩に渡り来る。

寶永三年 丙戌 二二六六〔一七〇六〕

△榎林鎮山、「紅毛外科宗傳」三冊を撰す、我國西洋外科書(A. Pare)の鈔譯せるものの最初なり。

△荻生方庵(祖傳の父、法眼、幕府醫官)歿す(六七)。

寶永四年〔一七〇七〕

富士山噴火す。

寶永五年〔一七〇八〕

和算家、開孝和歿す(六七)。

東大寺大佛殿を再建す。

※伴天連ジュアン・シドツチ Juan Baptista Sidotti (モハン・シロウテ) 大隅に上陸し、長崎を経て江戸に送らる。

第百十四代
中御門天皇

寶永六年 己丑 二二六九〔一七〇九〕

貝原益軒、「大和本草」十六巻を著はす。

△後藤良山、香川修徳、温泉の效を研究す。

綱吉薨じ、家宣將軍となる。

寶永七年 庚寅 二二七〇〔一七一〇〕

稻生若水、「庶物類纂」七百六十巻を著はす。

新井白石、「西洋紀聞」を書く。

正徳元年 辛卯 二二七一〔一七一〕

△榎林鎮山(榎林流外科、大通詞、蘭學に通ず)歿す(六九)。
三宅觀淵、室鳩巢、幕府に仕ふ。

正徳二年 壬辰 二二七二〔一七一二〕

法橋寺島良安(和氣仲安の門、御城入醫師)「和漢三才圖會」(八十冊、百五巻)を上梓す。

正徳三年 癸巳(同) 二二七三〔一七一三〕

吉田自庵(南蠻流外科、奥外科となる)、「三國流外科傳書」三十巻他に著書あり)歿す。

新井白石、「采覧異言」成る。

正徳四年 甲午 二二七四〔一七一四〕

に輸入され所謂蘭方醫學に貢献す。

一七〇三

※露都ベテルスブルグ建設さる。

△伊、マリニー L. Bellini (一六四三)、腎細尿管の研究に名を遺す、醫學學派)歿す。

一七〇四

英、ロック J. Locke (一六三二)歿す。

英、ミード Mead 「太陽と月の人體に及ぼす力」を著はし英ニュートン思想を取入れたる考察をなす。

ヂースバッハ Diesbach ヴェルリン青を作る。

一七〇五

佛、ブリソー Brisseau 白内障は水晶體の濁濁によるを發見す。

一七〇六

△伊、ハグリヴィ(Giorgio Baglivi (一六六八)又一七〇七、醫學派、滑平筋と横紋筋を區別す)歿す。

一七〇七

△伊、モルガニー Morgagni 「解剖學書」Adversaria anatomicaを著はす。

一七〇七

※イングランド、スコットランド合して大ブリテン王國を結成す。

一七〇八

△佛、プーバルト Poupert (一六一六)、解剖學、同氏(親帯)歿す。

一七〇九

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

一七一〇

△英、カウパー Cowper (一六六六)、解剖學、同氏(腹)歿す。

貝原益軒(筑前の人)「大和本草」、「本草綱目和名目録」、「養生訓」等著はす。歿す(八五)。

繪師菱川師宣歿す(七七)。

正徳五年 乙未 二二七五(一七一五)

稻生若水(明暦元年一六五五生、名宜義、本草博物學者、木下順庵に學ぶ著書多し)歿す(六一)。

新井白石の建議により新令を發し長崎よりの國內金貨の流出を防ぐ。

澁川春海(初め安井算哲)歿す(七七)。

享保元年 丙申 二二七六(一七一六)

△新井白石蘭醫ワロー・マンに質問す。

△原芸庵(古醫方)歿す(七四)。

尾形光琳(畫家)歿す。

享保三年 戊戌 二二七八(一七一八)

△並河天民(儒醫、伊藤仁齋の門)歿す(四〇)。

享保四年(一七一九)

將軍吉宗、西川如見を召して西洋書を講究せしむ。

享保五年 庚子 二二八〇(一七二〇)

△野呂元丈、探藥御用の命を受く。

△井原道閑(素問、難經に精し)歿す(七二)。

宗教以外の洋書及び其漢譯の禁解かる。

水戸家、大日本史を幕府に獻す。

享保六年 辛丑 二二八一(一七二一)

△施藥局、小石川白山に開かる。之を養生所と稱す。之は小川篤船(古方醫)の肝煎によるものなり。

江戸町奉行管下の人口五〇一、三九四、内女一七八、一〇九。

享保八年 癸卯 二二八三(一七二三)

△幕府、今大路親顯に醫書を校訂せしむ。

△小瀬復庵(加賀侯醫、詩を良くし新井白石と交はる)歿す(五〇)。

享保九年(一七二四)

西川如見(天文家)歿す(七七)。

英一蝶(七三)、近松門左衛門(七二)歿す。

享保十年 乙巳 二二八五(一七二五)

桂川甫筑、洋藥を製しめらる。

新井白石歿す(六九)。

享保十一年 丙午 二二八六(一七二六)

一七一五

「日本西教史」の原本なる。セスキット教會の日本傳道史バりにて公表さる。

△洋醫、カस्ता Jean Joseph Quata 北京に御醫となる。

一七一六

清の康熙字典成る。

獨、ライブニッツ G. W. Leibniz(一六四六、哲學者)歿す。

一七一七

△英、モンタグ Lady Montague 痘着乾痲を植ゑる東洋式種痘を英國に輸入す。

英、ブレール P. Blair 齒門痲痺、狹窄症を報ず。

一七一八

獨、ハイステル J. Heister の外科書出版され歐洲を風靡す。又氣管切開を行ふ。

△我國に於て杉田玄白等又此の著書の和蘭譯書を重譯す。

△ホーン Bohn(一六四〇、消化作用を研究す)歿す。

一七一九

英、デフォ De Foe「ロビンソン・クルソー」を出版す。

一七二〇

蘭、バルフィン Palfyn 分鏡鉗子を弘む。

蘭、レウエンヘーク A. van Leeuwenhoek(一六三二)

一、微菌學の鼻祖)歿す。

伊、ワルサルワ A. M. Valsalva(一六六六、解剖學)

歿す。

一七二四

ダンチツヒのフアールン・ハイド Gabriel Daniel Fahrenheit 寒暖計を作る。

△佛、ギョオ Goyot 歐氏管に消息子を通す。

△蘭、デメルテル H. van Deventer(一六五一、産科)歿す。

一七二五

△プロシア、醫師法を制定し國家試験を設く。

△越智平庵（法眼、侍醫）歿す（八五）。
全国の人口を検す、二六、九二一、八一六人。
享保十二年 丁未 二三八七（一七二七）
山脇玄修（玄心の養嗣）歿す（七四）。
吉宗始めて甘蔗を濱御殿に植ゑしむ。

享保十三年（一七二八）
荻生徂徠（物茂卿）歿す（六三）。
享保十五年 庚戌 二三九〇（一七三〇）
△年末感冒流行す。
△三宅石庵（講學、醫術にも精しく「醫事傍觀」を著はす）歿す。
享保十六年 辛亥 二三九一（一七三一）
△後藤梨春（江戸の醫）、「物品目錄後編」を作り和蘭の動植物を紹介す。
支那の沈南頓長崎に來り畫術を傳ふ。

享保十七年 壬子 二三九二（一七三二）
室鳩巢の「駁臺雜話」成る。
長崎地方に饑饉ありしも甘蔗の代用により助かる。
享保十八年 癸丑 二三九三（一七三三）
古醫道の復古者、後藤良山歿す（七五）。
西南地方大飢饉、餓死十六萬九千九百餘人。
享保十九年 甲寅 二三九四（一七三四）
伊良子道牛（漢蘭折衷醫）歿す（六四）。

室鳩巢歿す（七七）。
丹羽貞機、「庶物類纂」を編す。

第百十五代
櫻町天皇

享保二十年 乙卯 二三九五（一七三五）
△西玄哲、「金瘡跌撲療治之書」（和蘭外科）を譯述す。
青木教書（昆陽）、「蕃考」を刊行す。
甘蔗を吹上の庭園に試植す。

元文元年 丙辰 二三九六（一七三六）
河合尙久、「無冤錄述」を著はす、之我國法醫學書の始なり。

荷田春滿、伊藤東涯歿す。
元文二年 丁巳 二三九七（一七三七）

△望月鹿門（古醫方）歿す。
△栗崎正羽（南蠻流外科、御番外科醫）歿す（三〇）。
長崎天文家、北島見信「紅毛天地二圖贊說」を著はす。

元文三年（一七三八）
青木昆陽、幕府の蘭學員となる。
「庶物類纂續集」成る。
近江長濱に縮緬を織り出し、薩摩に加須利木綿を、伊勢に萬古燒を始む。

元文四年 己未 二三九九（一七三九）
幕府の儒官、青木昆陽、醫官、野呂元丈幕命により長崎

一七二七
英、ニュートン Newton（一六四三）、自然科学者、萬有引力の
発見者）歿す。
△瑞西、ブルンネル Brunner（一六五三）、腸に於る同氏腺發
見）歿す。

一七二八
△英、ハンター John Hunter 微淋一元説をなす。
一七三〇
△獨、 Hoffman Fr. Hoffmann 萎黄病を記載す。
△リベルクエーン Lieberkuhn 小腸腺を發見す。
△英、ダグラス J. Douglas 腹膜を精述し、同氏高を記載す。

一七三三
△佛、レオミュール de Réaumur 列氏寒暖計を作る。
△巴里に外科學校成る。
一七三三
△佛、ウインスロウ Winslow 交感神經なる名稱を提唱す。
一七三三
△英、ハイルス Hales 血液動力學 Haemodynamics を著は
す。
一七三四
獨、スタール (Georg Ernst Stahl)（一六六〇）、アニ

一ト Anima ノロギスト、Philogiston 論者）歿す。

一七三五
瑞典、リンネ Linné 分類學の劃期的寶典「自然體系」Systema
Naturae を出版す。

△西班牙、カサル Caspar Casal ヲラッダ獨妻紅斑を記載す。
△獨、ウエルホッフ Werholf 出血性紫斑病を報ず。
一七三六
△蘭、ブアハーヴ Boerhaave 體温計の使用を高唱す。
△佛、ブチー J. Petit 乳嘴突起切開術を行ふ。

一七三七
ゲッティングゲン大學立つ。
△伊、サントリニー Santini（一六八一）、解剖學に貢獻す）歿す。

一七三八
蘭、ブアハーヴ Hermann Boerhaave（一六六八）和
蘭ライデン大學に居たる教師、文化史的感化を及ぼす）
歿す。
英、ワイアット John Wyatt キール Lewis Paul ローラー紡
績機の特許を得、之十八世紀産業革命の端緒と云はる。
一七三九
※英吉利、イスパニヤの戰爭。

に赴き蘭學を學ぶ。

元文五年 庚申 二四〇〇〔一七四〇〕

△香月牛山(後世家)歿す(八五)。

△植村政勝、「諸國探樂記」を著す。

△甲賀通玄、「醫方紀源」を著す。

寛保元年 辛酉 二四〇一〔一七四一〕

野呂元丈、「阿蘭本草和解」を著す。

青木教書(文藏、昆陽)をして古文書を搜索せしむ。

寛保二年 壬戌 二四〇二〔一七四二〕

△堀元仙、「腹診書」を著す。

將軍、甲比丹トーマス・ファン・レーを引見す。

青木教書、蘭人を其旅館に訪ふ。翌年教書(昆陽)をして蘭學を講せしむ。

幕府、御定書百箇條を定む。

一七四〇

△佛、ゴチノ Godinet 痛に對する社會的施設を創む。

△英、フレータ I. Freke 多發性、進行性、化骨性筋炎を記す。

一七四一

獨、ハルレル Albrecht von Haller 筋肉の實驗生理学、學會に衝動を與ふ。

△英、シェセルテン Cheselden 虹彩切開術を始む。

佛、ブチー Francois Pourfour du Petit (一六六四—解剖上、實驗上末梢神經分布は中樞の對側にあり、錐體路交叉を發見す)歿す。

路交叉を發見す)歿す。

一七四二

佛、アンドレ Andre 整形外科 Orthopaedie を創始す。

△伊、トルタイ Francesco Tori (一六五八—、マラリア Malaria 悪氣の病名を痛に創めて用ふ)歿す。

△英、クレランド Cleland 鼻腔より歐氏管にカテーテルを挿入す。

瑞典、セルジウス Andreas Celsius 攝氏寒暖計を發明す。

△英、ドーヴァー Thomas Dover (一六六〇—、ドーフル散で知らる)歿す。

獨、ホフマン Friedrich Hoffmann (一六六〇—神經エーテル論者)歿す。

△清、乾隆七年「醫宗金鑑」出版さる。

一七四四

△シヨリツヒ Schurig 腎截開術を初めて行ふ。

一七四五

△獨、リーベルキョーン Lieberkuhn 腸腺を記載す。

英吉利にて理髮師、外科醫と分離さる。

一七四六

△メングニ Menghini 在來貧血、衰弱等に與へられたる鐵劑の作用(鐵の血液成分にして之が投與により血中鐵の増多を認む)を科學的に明かにせり。

△佛、フォシャール Fauchard 齒槽膿漏を記載す。

一七四七

△獨、ハレル Albrecht von Haller 生理學書 Primae lineae physiologiae を著す。

獨、マルタラフ A. S. Marraf 甜菜に糖の含まるるを發見す。

佛、ラメトリー La Metrie 「人間機械論」を著す。

一七四八

△獨、メツケル Meckel 迷走神經を記載す。

一七五〇

△佛、ブチー J. Petit (一六七四—、外科)歿す。

寛保四年 甲子 二四〇四〔一七四四〕

△支那歴代名醫圖(各時代に於る名醫並に其著書表解圖録折本)増補版、京都竹菴樓より上梓す。

天文臺を江戸神田佐久間町に建つ。

延享二年 乙丑 二四〇五〔一七四五〕

清人、李仁山長崎に來り種痘法を傳ふ。

※吉宗退き、家重九代將軍となる。

長崎、阿蘭陀通詞和蘭文書譯讀の特許を受く。

延享三年 丙寅 二四〇六〔一七四六〕

松岡恕庵(儒者にして本草學者「用藥須知」(正續)、「本草彙言摘要」、「食療正要」等著す、門下に小野蘭山あり)歿す(七九)。

蘭唐商額を改め蘭船二艘、唐船十艘とす。

△森養竹(漢方醫、本草家)歿す(七七)。

延享四年 丁卯 二四〇七〔一七四七〕

桂川市筑(和蘭流外科、蘭醫ダネルアンマンズを師とす。奥醫師)歿す(八七)。

延享年間より江戸谷中笠森稻荷(徽守)參詣始まる。

△山科李溪(法眼、京都に住す)歿す(四六)。

百十六代
桃園天皇

寬延四年 辛未 二四二一〔二七五二〕
吉益東洞、年五十にして傷寒、金匱の諸方を撰び「類聚方」を作る。

寶曆二年 壬申 二四二二〔二七五二〕
清の「醫宗金鑑」我國に入る。
青木昆陽の「和蘭文譯」第四集成る。

寶曆三年 癸酉 二四二三〔二七五三〕
阿部將翁（本草學者）歿す（八四）。
平賀源内、長崎に和蘭學を習ひ江戸に出づ。

寶曆四年 甲戌 二四二四〔二七五四〕
山脇東洋（玄心）玄修、東洋、代々醫官、古醫方を唱道し「傷寒論」、「金匱要約」を祖述す、京都西郊刑場に於て小濱藩醫小杉玄適と共に囚屍を解剖す。

△岡本一抱（劉張醫方、後世家）歿す（六九）。
△堀元厚（京都、小川朝庵の門に出で著書あり）歿す。
「玉山詩集」刊成。
浮世繪師、西川祐信歿す。
寶曆五年 乙亥 二四二五〔二七五五〕

香川修徳（古醫方、儒醫一本説をなし著書あり）歿す（七三）。
是年より寶曆曆とす。

寶曆六年 丙子 二四二六〔二七五六〕
△細川重賢、熊本に再春館なる醫學寮を創設す。

寶曆七年 丁丑 二四二七〔二七五七〕
此頃杉田玄白（二五）、西洋外科術を唱ふ。
田村元雄初めて物産會を江戸神田に開く。

寶曆九年 己卯 二四一九〔二七五九〕
藤井見隆（「醫療雜合眼目精要」等を著はす）歿す（七一）。
竹内式部罪せらる。
山脇東洋、「臟志」（解剖書）を刻す。
是頃菅羽屋九郎兵衛、京都に清水鏡を創む。
寶曆十年 庚辰 二四二〇〔二七六〇〕
△蘭醫、西玄哲歿す（八〇）。
△和蘭外科醫、ホウル來朝。

一七五一

佛蘭西にデドロイ等により百科辭典刊行さる。
瑞典、リンネ Linné 二名法を創始す。

△佛、ラメトリー La Mettrie（一七〇九）、和蘭に留學、和蘭醫學を輸入し佛蘭西醫學に貢献す。歿す。
△英、バートン J. Burton 産科に骨盤測定を始む。

一七五二
米、フランクリン Benjamin Franklin 「風の實驗」をなす（空中電氣）。
英、新太陽曆を用ふ。

△獨、ハルレル Haller 筋肉の刺戟性を發見す。
一七五三
英國博物館創立さる。

一七五四
伊太利、ネーブルス大學に經濟學科開設さる。
米、コロンビア大學創立。

△英、ワトソン R. Watson 鞏皮症を記す。
一七五五

△ブラック Black 假製マグネシアを創製す。
露、モスコウ大學創立。

カント、ラプラスの星雲説出づ。

一七五六
獨、ライデンフロスト Leidenfrost ライデンフロスト現象を發見す。

一七五七
獨、ハルレル Haller 人體生理學 Elementa physiologiae corporis humani を著はす。

△獨、チットマン Zimmern（一六七一、同氏前）歿す。

一七五八

獨、ハイステル Lorenz Heister（一六八三、解剖、外科、久しく和蘭に留まる）歿す。其著書は又我國醫學に貢献す。

△獨、ガウプ Hieronymus David Gaub 病理學書 Institutiones pathologicae medicinalis を著はす。

一七六〇

△、佛、ウインスロー Winslow（一六六九、解剖學に貢献す）歿す。

奥村良竹（古醫方、本草に精しく、吐方「世に喧傳す」歿す（七五）。又翌十一年歿とも云はる。
△小川篤船歿す（八九）。
△佐野原泉、「非臍志」を著して山脇東洋の「臍志」を取す。
寶曆十一年（一七六一）
野呂元丈歿す（六九）。

第百十七代
後櫻町天皇

寶曆十二年 壬午 二四三三（一七六二）
△京、如黄山（醫學院、法眼）、吉谷東洞の「醫斷」を難じ「斥醫斷」を著す。
山脇東洋（古醫方「臍志」、（解剖録）「養壽院醫則」、「外臺秘要方」著はす）歿す（五八）。
△合田剛（讃岐の人）、「紅毛醫言」を著はす（不傳）。
寶曆十三年 癸未 二四三三（一七六三）
△本草家田村元雄、幕府に仕ふ。
△源榮徳、「脚氣類方」を著はす。
△和蘭外科醫、ボルス・トマン賞使に隨ひて来る。
賈茶翁歿す（八九）。
明和元年 甲申 二四三四（一七六四）
平賀源内、蘭學醫中川淳庵の指導により石綿を得て火浣

一七六一
奥、アウエンブルッゲル Auenbrugger 胸部打診法を創始す (Inventum novum ex Percussione thoracis humani ut Signo abstrusus interni pectoris morbos detegendi を著述す)。
モルガニ Morgagni 膈膜囊腫を剖見す。又喉頭結核を報告す。
一七六二
佛、ルソー J. Rousseau 「民約論」出づ。

一七六三
△英、スメリー William Smellie (一六八〇—、産科、スメリー型鉗子の發明) 歿す。
一七六四
米、フィラデルフィアに大學創立す。

ジョン・ストーン Johnstone 神経節神経（後の自律神経）を記載す。

△伊、コッソ Cotugno 坐骨神経痛を記す。
△カヴァ Cavare 印度にてヒマシ油を下劑として創使す。

一七六五
△伊、モルガニ Morgagni 心搏異常緩徐による症候群を記載す（後のアダマス、ストークス氏症候群）。

△塊、ガッセル Gasser (解剖學者) 歿す。

一七六七
佛、ソワージ B. de Sauvages (一七〇六—) 歿す。

△英、ヒバーデン Heberden 痘瘡と水痘とを區別す。

△伊、フォンターナ Fontana 毒蛇の毒素を記述す。

一七六八
英、ヒバーデン William Heberden 狭心症を記載す。

△英、ホイット R. Whyte 結核性腦膜炎及び脊髄に於る反射中樞を記載す。

一七六九
英、ハンター Hunter 性病一元論を唱ふ。

布を作る。
△御園中集（古醫方、鍼師四品）歿す（五九）。
△和蘭外科醫、ホントノウ來朝す。
△江戸神田紺屋町に人參座を置き一般の療養に資す。
明和二年 乙酉 二四三五（一七六五）
幕府、衆醫の躰壽館（奥醫多紀安元に神田佐久間町の地を貸し建てしめたるもの）に至り其術を研究するを許す。
△本草學者、小野蘭山、島田充房と共に「花葉」を著はす。
後藤聖春、「紅毛談」を著はす。
明和三年 丙戌 二四三六（一七六六）
△賀川玄悦、産科を興す。
△水宮獨嘯庵（山脇東洋、奥村良竹の門）歿す（三五）。
伊良子光顯、「外科訓蒙圖彙」成る（圖は佛バレー外科書に準ず）。
前野良澤、青木文藏に和蘭語を習ふ。
明和五年 戊子 二四三八（一七六八）
△前野良澤、杉田玄白、和蘭甲比丹隨行醫パアルを江戸客館に訪ふ。
山脇東門（東洋の第二子、古醫方）、一婦人の屍を解剖し圖譜を作る。
△林一鳥（蘭醫）歿す（八九）。
明和六年 己丑 二四三九（一七六九）
賀川玄悦（子玄）、「産論」を著はす。氏は文に暗く皆川淇園の助力を得たり、獨學よく一新機軸を出す、後年シ

「ポルト之を獨譯して彼國に送る。妊婦マッサージ術を
良くす。

△望月鹿門(折衷漢方家)歿す(七三)。

△麻田剛立、地動説を唱ふ。

青木昆陽歿す(七二)。

△戸田旭山(大阪、本草學者、香川修徳の説を駁す)歿す(七四)。

加茂眞淵歿す(七三)。

第百十八代
後桃園天皇

明和七年 庚寅 二四三〇〔一七七〇〕

古醫方荻野臺州、河口信任、刑屍を解剖し「解屍篇」を
著す。

△平澤隨貞撰「醫道便易和解」出版さる。

前野良澤、平賀源内、長崎に到り蘭學を習ふ。

明和八年 辛卯 二四三一〔一七七二〕

平賀源内、電氣發機を複製す。

後藤梨春(「紅毛談」を著す)歿す(七〇)。

三月四日、前野良澤、杉田玄白等江戸千住小塚原にて死
刑囚の腑分を観る、其翌日より良澤等はクルムス著の解
剖書ターヘル・アナトミアの譯述を始む。

山脇東門、京都にて解屍す。

建部清庵、「備荒草木圖」を撰す。

安永元年 壬辰 二四三三〔一七七二〕

幼年を十四歳以下、大人を十五歳以上として處罰す。

△本木了意、遺稿「和蘭全縣内外分合圖」を刊行す。

△桂川甫周、和蘭甲比丹例參に際し對話を命ぜらる。

安永二年 癸巳 二四三三〔一七七三〕

△幕府、多紀安元(元徳)の醫學館(購書館)再興を許し資を官醫・
藩醫、市醫に募らしむ。

△典劣齋、「達生園産科内外術秘録」成る。

△前野良澤、再び長崎に遊學す。

醫師、龍長愷(鶴臺)(六五)、吉益東洞(古醫方、萬病

一毒論者)(七二)歿す。

△武田叔安(幕府醫官「痘科鑑」を校正す)歿す(七四)。

△疫病流行し、江戸中にて死者凡そ十九萬人に及ぶ。

安永三年 甲午 二四三四〔一七七四〕

杉田玄白等、譯述に四年を費せし「解體新書」五卷を刊
行す。

「解體新書」の出版

前野良澤、杉田玄白等は和蘭解剖圖 Kalmus (Johann Adam,
一六八九—一七四五・獨逸の醫學者)著ターヘル・アナトミア
の眞實を寫すに感じ之が翻譯を思ひ立ち艱難苦勞四年の後漸く
出版するに至れり。茲に和蘭醫學勃興の新氣運を醸成す。

一七七〇

△伊、コッソ Cotugno 坐骨神經痛を記述し又浮腫患者尿を煮沸し
て白濁沈澱を認め尿蛋白煮沸試験を發明す。

獨、アルピヌス B. Albinus Siegfried (一六九七—、當
時の鍊金化學的見解に對して生理學の基礎を生體の微細
構造に求む)歿す。

一七七二

大英百科全書の初版出づ。

クラウフォード Crawford 熱量計を創始す。

伊、モルガニー Morgagni (一六八二—、當時の病理解
剖學の泰斗)歿す。

△伊、フラポリ Farpelli 皮膚疾患ペラツラを命名す。

一七二二

蘭、ヴァン・スウィーテン Van Swieten (一七〇〇—、

ライデンに居たるブアーハーヴェ Kerkhawe の門下、
維納醫學校を復興す)歿す。

△獨、フォーゲル Vogel 水痘 Variellen を命名す。

△カーデ Rodelle le Oudet 尿中より尿素を證明す。

歐洲に於ては十八世紀後半より所謂産業革命期 Industrial
Revolution に入り、英より佛、獨に工場工業興る。

一七三三

英人、支那に阿片を輸入す(以前は葡人之を行ふ)。

△英、フォザギル Forbergill 三叉神經痛を記述す。

一七七四

獨、ゲーテ Goethe の「若きエテルの悩み」出づ。

ウイリアムソン、電氣魚に於て動物電氣を観察せり。

英、ワット J. Watt マルタン M. Boulton と協力して蒸氣機
關を發明す。

△佛、プチー J. I. Petit 乳嘴突起穿開をなす、又横膈膜弛緩症
Eventratio diaphragmatica を記載す。

△伊、コッソ Cotugno 腦脊髄液を發見す。

安永四年 乙未 二四三五〔一七七五〕

蘭船、木乃伊を輸入す。
俳人、加賀千代歿す。

七月、蘭館に蘭醫トウンベルグ着任す。

賀川玄迪（子啓支悦の門、良く業を繼承す）、
「産論翼」を著し圖を作り「産論」の説を詳かにす。

山脇東門（古醫方）、
不年及び安永五年に男女各一人の屍を解剖す。

△原芸菴（古醫方、世目して傷寒科となし盛名あり）歿す。

漢蘭折衷派

徳川中期より蘭學の勃興と共に漢方醫も蘭方の説く身體内景（解剖）の眞實なるを認め漢醫方に蘭醫方を取り入れ我國醫方に一大改良、進展をなさしめたり。此派の主なるもの左の如し。

山脇	東洋	永富	獨嘯庵	中神	琴溪	荻野	元凱
柚木	太淳	衣關	順庵	木庄	晋一		
賀川	玄悦	奥	劣齋	片倉	鶴陵	原	南陽
華岡	青洲	本間	棗軒				

安永五年 丙申 二四三六〔一七七六〕

蘭使隨從の瑞典人トウンベルグ K. P. Thunberg（後に「日本植物圖誌」を著はす）上京の時、桂川甫周、中川淳庵之に西洋學を學ぶ。

平賀源内、エレキテルと稱する靜電氣機械を製作す。

△田村藍水（本草學）歿す（五九）。

池野大雅堂（霞樓）歿す（五四）。

安永六年 丁酉 二四三七〔一七七七〕

△賀川玄悦（七八）、香川南洋（六四）歿す。

林子平（仙臺藩士）、海外事情を知らんとし長崎に出向ふ。

安永七年 戊戌 二四三八〔一七七八〕

三浦梅園、長崎に遊學す。

△大槻玄澤、建部亮策、杉田玄白の門に入る。

儒、伊藤蘭嶋歿す（八五）。

光格天皇

安永八年 己亥 二四三九〔一七七九〕

△平賀源内卒死す（五一）、杉田玄白其衣履を橋場總泉寺に葬る。

杉田玄白、「癘醫新書」を書く。

△賀川玄迪（玄悦の養嗣）歿す（四一）。

安永九年 庚子 二四四〇〔一七八〇〕

△小田野直武（「解體新書」の圖板を描く）歿す（三二）。

一七七五

※ 亞米利加、獨立戰爭始まる（一七八三）。

瑞典、化學者シェーレ C. W. Scheele 又之と無關係に英、プリ
ストレー Priestley 酸素を發見す。

△英、ドーブソン Dobson ウィリス Th. Willis（一六二二—一六
七五）糖尿を患者の尿中に味覺によりて糖の存在を知りたるを釀
酵試験アルコールに誘導して之を證明す。

△獨、メスメル A. Mesmer 催眠術を醫療に應用す。

△佛、ボルドウ Borden 各内臓が特殊の物質を血中に出すと創め
て説く（内分泌説の端緒）。

△バル Ball 腸間膜淋巴腺炎を腸間膜癆 Tuberculoenterica とし
て記載す。

△ポーレ Poole ドブロン Dobron 糖尿より葡萄糖を検出す。

舊ウィーン學派（一七四五—一七九〇）

蘭、ヴァン・スウィーテン Van Swieten（一七〇〇—一七七
二）^{*}、アントン・ド・ファン Anton de Haan（一七〇四
—一七七六）^{*}、アウエンブルック Auenbrugger（一七一一—
一八〇九）^{*}、ステルク A. Steerck（一七三二—一八〇三）^{*}、
ドム M. Stoll（一七四二—一七八八）^{*}、フランク J. P. Frank
（一七四五—一八二二）等顯はる。

一七七六

英、カウエンチャッペン Cavendish 水素を發見す。

△シェーレ Scheele 痛風結節中に尿酸を發見す。

△蘭、アヘン Anton de Haan（一七〇四—一七八八）、臨牀家にして觀察と

經驗を高唱す（歿す）。

佛、ボルドウ Th. Borden（一七二二—一七八八）、生氣論者 Vi-
talist）歿す。

△伊、スピランザニー Spurrizanti 動物の皮下に酸素を注射して
血液の鮮紅色を呈するを認む。

一七七七

獨、ハルレル Albrecht von Haller（一七〇八—一七八八）、實驗
を重視し近代生理の發達端緒に貢獻す（歿す）。

△佛、シヨール Siganlt 恥骨縫際切斷術を創始す。

△ストル Stoll 原發性膽囊炎を初めて報告す。

一七七八

瑞典、リンネ Carl von Linné（一七〇八—一七八八）、博物學者、二命法
の創始者（歿す）。

瑞、ルソー J. Rousseau（一七二二—一七八八）、啓蒙思想家（歿す）。

英、ブラウン John Brown「醫學要綱」Elementa me-
dicinae を著はす。

佛、バルテー Barthez「生理學新論」Nouveaux eleme-
nts de la science de l'homme を著はす。

一七七九

英、プリストリー Priestley 植物の酸素を發生するを發見す。

蘭、インゲンハウス J. Ingen Housz 植物は炭酸ガスを取入れ
て酸素を發するを發見す。

一七八〇

△佛、ウエンツェル Wenzel 紅彩切除術を行ふ。

△大槻玄澤(二四)、前野良澤に和蘭語を學ぶ。
大和見水歿す。
天明元年(閏) 辛丑 二四四一(一七八二)
畑黄山(御醫)、京都に醫學院を立つ。
△瀬丘長珪(吉益東洞の門、腹診の妙手)歿す(四九)。
△惠美三白(古醫方、吐方、斷食を唱ふ、名聲著はる)歿す(七五)。
△華岡青洲、京都に遊學す。
天明二年 壬寅 二四四二(一七八二)
幕府、天文臺を淺草に移す。
林子平、「和蘭船圖説」をなす。
△山脇東門(東洋の第二子)歿す(四七)。
△建部清庵(一關侯醫)歿す(七一)。
△淺井圃南(古醫方)歿す(七七)。
塙保己一、「群書類從」を編成す。
天明三年 癸卯 二四四三(一七八三)
大槻玄澤、「蘭學階梯」を著はす。
司馬江漢、銅版を創む。
佛人、谷口蕪村、横井也有、近松半二歿す。
小野蘭山、「大和本草會議」を著はし貝原益軒の「大和本草」の誤謬を正す。
伊良子好問(光顯の父)歿す(七一)。
天明四年 甲辰 二四四四(一七八四)
△飢饉、疾病又流行す。

辨壽館にて百日教育の法を始む。
△野村立榮(劉瑛、美濃の人、長崎和蘭醫官に就いて醫を學ぶ)名古屋に蘭醫方を弘む。
天明五年 乙巳 二四四五(一七八五)
△前野良澤、「和蘭譯箋」を著はす。
林子平、「三國通覽圖説」成る。
桂川甫筑、「萬國圖説」を作る。
△大槻玄澤(二九)、長崎に遊學す。
天明六年 丙午 二四四六(一七八六)
江戸大火、湯島聖堂焼く。
△小石元俊(京都)、江戸に來り杉田玄白、大槻玄澤に教を乞ふ。
△中川淳庵、歿す(四八)。
△華岡青洲、紀州に歸る。
天明七年 丁未 二四四七(一七八七)
△片倉元周、「微瀉新書」を著はす。
桂川甫周、「和蘭館長を療す」。
△東都醫官、吉田宗信「歴代名醫一覽」(一巻、折本)を上梓す。
△山田圃南(折衷漢方家「傷寒考」等著はす)歿す(五七)。
天明八年 戊申 二四四八(一七八八)
柴野栗山、昌平饗に講ず。
△中井竹山、「草茅危言」出づ。
懸川春町、「御品負蝦夷押領」著はす。
本木良水、「阿蘭陀水鏡曆和解」を著はす。
司馬江漢、長崎に遊ぶ。

一七八一
英、カヴェンディッシュ Cavendish 水を合成す。
一七八二
△獨逸ホルスタインに於て始めて種痘を行ふ。
一七八三
*英、米合衆國の獨立を承認す。
瑞、數學者オイレル I. Euler (一七〇七)歿す。
△佛、サウスール Gaussine 毛髮湿度計を發明す。
英、ラムスデン Ramsden 平凸レンズを密着せしめたるレンズを製す。
△英、ハンター W. Hunter (一七一八)、解剖學者)歿す。
△マルグラフ Margraff 尿中より磷酸石灰を證明す。
△英、ホワイト White 關節、結核を白色腫と命名す。
一七八四
△英、カルレン Cullen ロイマチスを獨立疾患とす。

△米、フォーチース Fordyce 米國に於ける血友病親族を報告す。
一七八五
英、ウイザリング Withering チギタリス葉の臨牀治験を報す。
△伊、スバランザニ Spallanzani 犬に就いて人工妊娠を行ふ。
△佛、ラヴォアジエ Lavoisier 呼吸率 CO_2 、 O_2 に關する實驗をなす。
一七八六
△英、フアウラー Th. Fowler ホーレルス水を治療界に出す。
△伊、スバランザニ Spallanzani 唾液を混ぜる食物の消化早きを認む。
瑞、オチール L. Odier 着鉛劑を制瀉劑に用ふ。
一七八七
タイデマン D. Tiedemann 兒童心理學の著述を初めて出す。
△英、ウォラストン Wollaston 痛風關節中に尿酸鹽の結晶を發見す。
一七八八
英、オーストラリヤに刑囚植民地を置く。
獨、ゲーテ Goethe 「エタモント」を出す。
英、ブラウン John Brown (一七三五)、疾患を興奮と衰弱によるものに分ち、後者に刺戟的療法を加へ、肉汁の創始者)歿す。

△吉益南涯、大阪に移る。

寛政元年 己酉 二四四九(一七八九)

△躰壽館より法眼侍醫多紀安元、丹波元貞編「廣惠濟急方」出版す。
緒方春朝、秋月藩の痘瘡流行に鼻乾苗法を創めて行ふ。
三浦梅園(醫の外、天文曆數に通ず)歿す(六七)。

藤井貞幹(「逸號年表」等を著す)歿す(六八)。

寛政二年(一七九〇)
和蘭來貢。
妊婦の死刑を禁ず。
朱子學以外の異學を禁ず。

寛政三年 辛亥 二四五二(一七九二)

尾藤二洲、幕府の儒員となる。
醫學館の制を改めて躰壽館を官學となす。
林子平の「海國兵談」上梓さる。

中神琴溪(近江福島)、四十九歳の時京都に移り住す。
△吉益南涯、京都に歸る。

寛政四年 壬子 二四五三(一七九三)

本木良永、譯書を出して地動説を初めて紹介す。
宇田川玄隨、和蘭、ホルテル Johannes de Gorter(一七八九—一七六二)の内科書を譯して「西説内科選要」十八卷を著す、之れ和蘭内科學譯述の濫觴なり。

△福井楓亭(醫官、晋、唐、宋の良方をとり「集驗良方」を著す)歿す(六八)。

△新井白蟻(易醫)歿す(七八)。

△前野良澤(七〇)、杉田玄白(六〇)二師の壽宴催さる。

寛政五年 癸丑 二四五三(一七九三)

高山彦九郎、自害す(四四)。
星野良悦、年來人屍解剖を志し官に請うて刑屍二つを解剖し木を以て骸骨を模製し、江戸に出で杉田、大槻、桂川等に示し激賞を受く。

大槻玄澤、杉田玄白の遺志を繼ぎ「瘍醫新書」(五十卷)を完成す。之玄白の吉雄耕牛より得たるハイステルニ「*Hydrotus*」外科書の譯述なり。

△江馬春齡(大垣の人)、江戸に上り前野良澤に學ぶ。

嶺春泰歿す(四八)。

寛政六年 甲寅 二四五四(一七九四)

新井君美、「西洋紀聞」を幕府に上る。

△英、ポット P. Pott(一七一三—、外科醫)歿す。

△英、カウレイ Cowley 糖尿病に膀胱病變を描描す。

△イルランタン Pelletan 異物除去の目的に喉頭截開を行ふ。

△英、プリーストリー Priestley 尿中に尿酸を證明す。

△英、メーリ Baillie 内臟轉位を報ず。

△獨、フランク J. P. Frank 衛生書「System einer vollständigen medicinischen Polizey」を著す。

一七八九

※佛國、革命起る(一七八九)。

△和蘭、カムメル Camper(一七二二—、解剖外科學者)歿す。

△英、ヘーリ M. Baillie 卵巢の皮膚様囊腫を記載す。

一七九〇

米、フランクリン Benjamin Franklin(一七〇六—、物理学)歿す。

英、カレン William Cullen(一七〇〇—)、解剖、外科、神経系を流體的に考ふ、講義に從來のラテン語を廢し英語を用ふ)歿す。

△佛、フルクロ Fourcroy 尿中より磷酸アンモニア・マグネシア鹽を析出す。

一七九一

伊、ガルヴァニ Luigi Galvani 動物電氣を發見す(後一年にて伊、ボルタ Volta 接觸電氣とす)。

△佛、シュペー Chopart 關節離斷術を行ふ。

一七九二
△佛、ピネル Pinel 精神病者を開放す。

一七九三
英、ハンター John Hunter(一七二八—、外科に基礎醫學的知識を入れて理論化する)歿す。

一七九四
英、ラサフォード D. Rutherford 最高、最低寒暖計を作る。

△大槻玄潭、初めて太陽曆元旦宴、新元會を開く、和蘭陀正月と云ふ(十一月十一日が西曆の元旦に當る)。
桂川甫周、幕府醫學館に外科を講ず。
△四月、和蘭貢使江戸に来る、曉從に醫師ヘルンハルト・ケルレルあり。

片倉鶴陵、鼻茸離斷術を行ふ(一八〇五年のロバートソン金屬係蹄法の發明より十二年前なり)。
本木良永(長崎大通詞)歿す(六〇)。

寛政七年 乙卯 二四五五(一七九五)
緒方春朔、我國最初の種痘方書「種痘必須辨」を著はす。
高橋作左衛門、天文方となる。

畫家、圓山應舉歿す(六三)。
寛政八年 丙辰 二四五六(一七九六)
△因幡の醫、稻村三伯(海上隨鴨)「ハルマ和解」を完成す(江戸波留麻)。

柚木太淳(京都、漢蘭醫)、「解體鎖言」及び「眼科精義」を著はす。
△家傳醫家之外限りに轉科、難相成旨達旨さる。

△丹波元簡、幕府書庫の深江輔仁の撰述「本草和名」二卷を上木す。
橋本宗吉、鳴南新譯地球全圖」を刊行す。
寛政九年 丁巳 二四五七(一七九七)
聖堂を幕府學校とす。
蘆屋山人、「和漢年契」を刊行す。
明年より寶曆曆を廢し寛政曆を行はしむ。

池田瑞仙、痘科を以て幕府醫官となる。
△蘭醫、宇田川玄隨歿す(四三)。
△翰林庵山(佐賀侯醫)歿す(六一)。

寛政十年 戊午 二四五八(一七九八)
幕府、諸國の人口を調査す、二五、四七一、〇三三人。
近藤守重、擇提島に大日本憲土呂布の標柱を建つ。
長崎の通詞、本木仁太夫の門人志筑忠雄(中野柳圃)「曆象新書」を公にす(其論する宇宙の起原は一七九六年ラプラスの發表せる星雲説と根柢を一にす)。
大槻玄潭、杉田玄白の「解體新書」を重訂し十三卷となす。

△幕府、醫學館に痘科を設け池田瑞仙教授となる。
西本願寺法主文如病み、蘭醫江馬蘭齋、大垣より京都に赴き之を療す。
△仙臺藩木村壽順(蘭醫)刑屍を解剖し其供養塔を建つ。

△古田篁墩(儒醫、井上金峨の門)歿す(六八)。
寛政十一年 己未 二四五九(一七九九)
△麻田剛立(天文曆日と醫學を獨學す)歿す(六六)。
△伊良子光顯(道牛の孫、洋醫方)歿す(六三)。
△小野蘭山(七一)、醫學館に本草を講ず。
△秋、疫痢流行す。
△高良齋「女科精選」を著はす。
△澁江長伯、幕府醫官、蝦夷地に草木を採取す。

佛、ラヴォアジエール L. Lavoisier (一七四三—、化學者
燃焼の理論、物質不滅の法則を發見す) 殺さる。

△英、ミード R. Mead (一七一〇—、醫藥化學派) 歿す。
△佛、ヴィタダジール Vieq d'Azar (一七四八—、蘭解剖に貢獻す) 歿す。

獨、ウォルフ U. Friedr. Wolf (一七三五—) 歿す。
獨、クラフトニ Chudini 隕石を流星と認む。
英、ダルトン Dalton 色盲を記述す。

一七九五
ポーランド國亡ぶ。
△佛、デソー Desault (一七四四—、外科、解剖に貢獻す) 歿す。
△佛、シヨパール F. Chopart (一七四三—、關節離斷術) 歿す。

一七九六
英、ジェンナー Edward Jenner 種痘を初めて實施す
(後續いて蘭醫ケルレル、人痘種痘法を日本人に傳へしと云ふ)。

一七九七
獨、ハーネマン Hahnemann ホメオパシー Homoeopathie を唱道す。
△フムボルト Alexander von Humboldt 神經筋標本の實驗をなす。

獨、ヒムレー Himley 鼓膜穿孔を創始す。
アンデルシュ Andersen 腦神經を十二對とす(ガレン Galen は嚙に七對としたり)。

一七九八
英、マルサス Thomas Robert Malthus 「人口論」を公にす。
獨、ラーヴ Rave 獨逸に於ける血友病親族を報告す。
英、ダルトン Dalton 赤色色盲を初めて報ず。
△ペール Joseph Beer 虹彩切除術をなす。

一七九九
△伊、スバランザ Abbate Lazaro Spallanzani (一七二九—、生理學者、食物を煮沸し密閉すれば腐敗せざるを證し、胃液の防腐作用等を認む) 歿す。
△英、ウィラン Willan 「皮膚病學」を著はし斯學に一新生面を拓く。

△英、ムーリ Baillie 心内膜炎を記載す。
△ウエルター Welter ヲタリン酸を發見す。

寛政十二年 庚申 二四六〇〔一八〇〇〕
 昌平坂學問所成る(聖堂)。
 伊能忠敬、幕命により蝦夷測量をなす。
 △橋本宗吉(蘭醫)、「新譯地球全圖」を刊行す。
 吉雄耕牛(前野良澤の師、和蘭流外科之より始まる、「紅毛秘事記」、「吉雄流外科」の他「因液發微」を著す、後者は尿の検査法を詳述せるもの、我が診科に尿の検査を加へしは之を以て嚆矢とす)歿す(七七)。
 △楠木太淳、「解體項言」を出版す。

享和元年 辛酉 二四六一〔一八〇一〕
 幕府、伊能忠敬をして伊豆、相模、武蔵、上總、下總、常陸、陸

奥の沿岸を測量せしむ。
 △幕府、小野蘭山(七三)をして藥草を常陸、下野、甲斐、駿河、伊豆、相模に採らしむ。
 小石元俊、京都に歸り家塾究理堂を建つ。
 本居宣長歿す(七二)。
 △多紀元徳(藍溪、安元、奥醫師、法眼)歿す(七〇)。
 享和二年 壬戌 二四六二〔一八〇二〕
 △前野良澤(八〇)、杉田玄白(七〇)毒宴をなす。
 △星野良悅(木骨製作に名高し)歿す(四九)。
 △稻村三伯、下總に隱棲し海上隨陽と改名す。
 桂川甫周、幕命により「顯微鏡用法」を述ぶ。

享和三年 癸亥 二四六三〔一八〇三〕
 △夏、麻疹流行す。
 △原南陽、「叢桂亭醫事小言」を著す。
 「群書類從」刊行さる。
 △和田東郭(吉益東洞の門)歿す(六〇)。
 △小野蘭山(七五)、「本草綱目啓蒙」四十八卷の刻成る。
 △フーフ H. Doell 長崎蘭館甲比丹となる。
 △富田大鳳(熊本再春館教授、儒醫、高山彦九郎と交はる)歿す(四二)。
 蘭醫、前野良澤歿す(八一)。

1800
 ※ナポレオン、アルプス越をなす。
 ニコルソン Nicolson 鹽溶液に電流を通ず時溶液は電流のために分解さるるを發見す。
 佛蘭西、ラブラース(内相)によりメートル法實施す。
 伊、ヴォルタ Volta 電池を發明す。
 △英、クルーシヤンク C. Cruikshank (一七四五)、解剖學者、受精卵と卵管、吸收の生理等に功績を貽す)歿す。
 佛、ビシアー Bichat 動物神經、植物神經(器官)系を記載す。
 △英、デヴィ Davy 笑氣 NO の麻醉作用を發見す。
 △獨、ヒムレー Hinley スラトメン、ヒヨスチアムスを散瞳薬とす。

十九世紀

十九世紀文明

歐洲は所謂資本主義發生時代にして近代國家の成立するもの多
 く爲めに各國其特異の文化發展をなし、新發見等續出し科學の
 進歩殊に目覺しく實に隔世の感を抱かしむるものあり。

1801
 ※大ブリテン・アイルランド聯合王國成る。

佛、ラマルク Lamarck 進化論を唱ふ。
 △佛、ビシアー Bichat 「一般解剖學」を出版す。
 △伊、スカルバ Scarpa 白内障壓出法を改良す。
 △佛、キウビエ Cuvier 「比較解剖學」を著す。
 △英、ヤング Young (醫にして理學者) 光の波動説を唱ふ。
 △英、ターパー Cooper 鼓膜穿刺を行ふ。
 1802
 佛、ゲーリョサック Gay-Lussac 瓦斯法則を公表す。
 獨、トレヴィイラヌス Treviranus 「生物學」Biologie を著す。
 佛、キョウイニエ G. Cuvier シュリヤの水原より巨獸マンモスの遺體を發見す。
 △佛、カベニ Cabanis 「人間の肉體及精神の關係」を著す。
 △英、パリー Parry 後のバセドウ氏病を記載す。
 佛、ビシマー Bichat (一七七一)、疾病組織占居説者)歿す。
 1803
 瑞典、ベルツェリウス Berzelius セリウムを發見す。
 △ラトウア Latour テブレス Deprez 筋肉結核を初めて記載す(但し組織學、細菌學的の検査は未だし)。
 △ニコラ Nicolas Guendeville 糖尿より結晶性糖成分を析出す。
 △佛、ポルター Portal 腸間膜腫瘍を記述す。
 △セガン Séguin 阿片よりモルヒネ Morphinum を得たり。

古醫方、中西深齋（吉益東洞の門、門を閉じ攻讀「傷寒論辨」等を著す）歿す（八〇）。

谷中延命院日道、死刑さる。

文化元年 甲子 二四六四（一八〇四）

露使、レザノフ我國民を長崎に送り來り交易を求む。

頼山陽、「日本外史」の稿成る。

橋本宗吉、「三方法典」を譯述す。

△畑山、（惟和、古醫方、尙藥奉御法印に叙せらる。城西に醫學院を建つ）歿す（八四）。

高橋作左衛門（東國）歿す（四一）。

文化三年 乙丑 二四六五（一八〇五）

海上隨鴨、京都に移り藤林普山、小森桃塙等と蘭學を興す。

△杉田玄白、醫術精練を以て將軍に謁す。

字田川棟齋、「和蘭内景醫範提綱」を上梓す。

華岡青洲、自家案出の麻沸散なる麻酔藥を服用せしめて乳癌の手術を行ふ。

〔麻沸散—通仙散〕

曼陀羅八分、草烏頭二分、白芷二分、當歸二分、川芎二分よりなる」と云はる。

一八〇四

※佛、ナポレオン帝位に登り、ナポレオン一世と稱す。

獨、カント Immanuel Kant（一七二四—、大哲學者「純粹理性批判」—一七八一、「認識論」「實踐理性批判」—一七八八、「判

斷力批判」—一七九〇著はる）歿す。

英、フリーストレー Priestley（一七三三—、化學者）歿す。

△伊、フラヤニ Flajani 後のペセドウ氏病を記載す。

獨、セルチュルナー Sertuerner 阿片よりモルヒネを純粹に抽出す。

△佛、ボーム Antoine Baumé（一七二八—、比重計の發明者、製藥に精し）歿す。

一八〇五

※英將ネルソン Nelson トラファルガルの海戦にて佛軍を打つて戦死す（四七）。

獨、シレル Fr. Schiller（一七五九—、古典主義詩人）歿す。

△東印度會社のバアン Alexander Burnan は支那廣州に眼科診療所を開き又種痘法を教ふ。

△英、カーリー J. Currie（一七五六—、脱熱療法を唱ふ）歿す。

支那、邱浩川の「引痘新法」出づ（洋方牛痘法）。

△獨、ボツシニ Philipp Bozzini 尿道膀胱鏡を作る。

△佛、キャグイエ Cuvier「比較解剖學」の著述を完成す。

文化三年 丙寅 二四六六（一八〇六）

△江戸大火、醫學館焼く。

和蘭甲比丹ドーフ（道富）參府す。

喜多川歌麿歿す（五四）。

中野柳圃（志筑忠雄、長崎通詞）歿す（四七）。

△荻野元凱（臺州、古醫方、吐方を説く）歿す（七〇）。

△橋南齋（宮川春暉、漢方折衷派）歿す（五三）。

文化四年 丁卯 二四六七（一八〇七）

浮世繪師、齋藤寫樂歿す。

二宮彦可（吉雄耕牛の門）、「正骨範」を著はし整骨科を興す。

△太田見龍（和方家、八三）「神道奇蹟傳」を著はす。

山村才助（大槻玄澤の門、譯書に力む）歿す（三八）。

△田村元良（本草學）歿す（六四）。

文化五年 戊辰 二四六八（一八〇八）

※英吉利の艦長崎に來り亂暴をはたらく。

長崎通詞にして甲比丹につき佛蘭西語を學ぶ者あり。

△二宮彦可「正骨範」を出版す。

字田川棟齋、「内象銅版圖」（亞歐堂田善）成る。

小石元俊（大槻玄澤、杉田玄白、前野良澤等と交を結ぶ蘭醫）歿す（六六）。

△桂川甫榮（桂林、蘭醫）歿す（五五）。

文化六年 己巳 二四六九（一八〇九）

長崎通詞、蘭館員に英語を學ばしめらる。

一八〇六

佛、バルテス P. J. Barthez（一七三四—）歿す。

佛、クイロン Oulomb（一七三六—、物理學）歿す。

△佛、コルビサール Corvisart 心筋も骨節の筋と同じく動作によりて肥大すと唱ふ。

△米、スターニス J. Stearns 産科止血に菱角を應用す。

一八〇七

米、フルトン Fulton ハドソン河にて汽船の試運轉をなす。

獨、ボチニイ Philipp Bozzini エンドスコープを創製し人體内腔検査を推奨す。

△ベロック Bellog（外科）澳、プランク Planck（一七三八—）、獨、シーボルト K. Siebold（一七三六—、外科、産科）歿す。

一八〇八

英、ダルトン Dalton 原子論を唱ふ。

△獨、リスベルグ A. Wrisberg（一七三九—、解剖學者）歿す。

△ゴメルチ Gouhier de Claubry 脊髓出血を報告す。

△カロン Caron 格魯布に氣管切開を推奨す。

△佛、コルビサール Corvisart（ナポレオンの侍醫）アウエンブルツゲルの打診法を佛語に翻譯出版す。

△オデイル Odier 神經腫 Neuron を記載す。

一八〇九

澳、アウエンブルツゲル Leopold Auenbrugger（一七

僧、月徳、伊藤藍田歿す。

△蘭醫、桂川春甫歿す(五九)。

△藤林泰助、小森玄良京都に開業す。

大槻整水の「芝録」(煙草記録)刊成る。

文化七年 庚午 二四七〇(一八一〇)

△衣國順庵(一編)、漢蘭醫方「眼目明辨」を著はす。

各務文獻「整骨新書」を著はす。

小野蘭山(松岡紹菴の門)「本草綱目啓蒙」「本草廣參説」

「採藥記、藥名考」「格物徴」等著はす(歿す(八一))。

多紀桂山(元簡、醫學館助教、古醫方「素問識」「傷寒

論輯義)、「金匱要略輯義」「疑脚氣辨惑論」等多数の著

述あり(歿す(五六))。

文化八年 辛未 二四七一(一八一二)

△幕府、醫書和解御用の翻譯局を淺草天文臺中に創設し、馬場佐十

郎大槻玄澤譯員となる。

橋本宗吉「エレキテル究理原」を著はす。

村田春海(國學者)歿す(六六)。

平田篤胤、「志都乃石室」(我國古來の醫法を述ぶ)を著

はす。

原南陽、戰陣奇方「砦陣」(軍陣醫書)を著はす。我國軍

陣醫書の嚆矢なり。

蘭醫、海上隨鳴(稻村三伯)歿す(五四)。

竹内新八(眼科に名高し)歿す(七六)。

文化九年 壬申 二四七二(一八一三)

十月、京都に於て藤林泰助、小森玄良等に刑屍の解剖を

許さる、是豫而海上隨鳴(稻村三伯)と稱し大槻玄澤に學

び、安岡玄眞、岡田甫説等と撰脩數年蘭和字書を發刊す、

世に云ふ「江戸波留麻」是なり)の官に請ひしものにし

て従事するもの五十人と云はる、遂に乳糜管の起原走行

を實見す。

吉田長淑、蘭方内科を以て江戸中橋に開業す。

△石坂宗哲、「鍼灸説略」を著はす。

△太田見龍(和方を唱道し著書あり)歿す(八八)。

文化十年 癸酉 二四七三(一八一三)

英船、長崎に来る。

野呂天然、「生象止觀」十二卷、「生象約言」二卷を著はす。

生象は解體に代る解剖の義なり。

三谷樸の「解體發蒙」刊行さる(享和十年官に請ひて刑

屍を解剖したるもの記録にして漢洋醫學の連絡に意義

をもつ)。

△古益南涯(大坂に住す、東洞の子、仲景藥方を説く)歿す(六四)。

△山本封山(曲直瀬道三の門)歿す(七三)。

蒲生君平(四六)、尾藤二洲、明誠堂喜三二歿す。

文化十一年 甲戌 二四七四(一八一四)

浮世繪師、歌川豊春歿す(七八)。

高橋作左衛門、書物奉行となり滿洲之書の譯述をなす。

二二一、維納の人、打診の創始者)歿す。

△米、マクドウェル Mc Dowell 那果刷出術に成功す。

一八一〇

ナポレオン全盛時代。

ベルリン大學創立され醫科大學設けらる。

英、カヴンディッシュ Cavendish (一七三一、化學者)歿す。

△獨、ヒルデブランド Hildebrandt 腸チフスと發疹チフスを區別

す。

△ハーンマン Hahnemann ホメオパシー療法を提唱す。

葡、ゴメス Gomes 規那皮より結晶性物質シンヒモニンを得た

り。

一八一二

△サレルノ醫學校(古代醫學と近代醫學の連鎖をなしたる)ナポレ

オン一世の勅命により閉校さる。

伊、アボガドロ Avogadro は同温同壓に於ける同體積の氣體は

同数の分子を含有すとの假説を發見す。

△ニステン Nysten 死硬直に於ける筋硬直の起る順序に一定法則

を發見せり。

△佛、クルトワ Cruveilhier 海草中よりヨードを發見す。

英、ベル Bell 脊髄の前根、後根の規則を發表す。

△佛、ビュフホルン Buchhorn 角膜穿刺術を試む。

一八一三

△佛、ナポレオン露國遠征、退軍。

△英、米國と戰ふ。(一八一五)

△歐洲に神聖同盟成る(自由主義運動の抑壓をなす)。

英、ウォラストン Wollaston 二重レンズを製作す。

△獨、リヒテル G. Richter (一七四二、外科)歿す。

△英、ウィラン R. Willan (一七五七、皮膚科、病名の命名を

なす)歿す。

△米、フイジック Physick 初めて胃管を以て胃内容を探取す。

△獨、メツケル John Frederick Meckel 卵黄管の遺殘物として

メ氏憩室を記載す。

一八一四

△獨、ライル J. Q. Reil (一七五九、解剖、内科)歿す。

佛、クロード・ムルナル Claude Bernard 生まる。

△獨、ランゲンツック Langenbeck 子宮の體式刷出をなす。

瑞典、リンダ Ling 所謂瑞典式體操を創む。

△佛、トルソー Trouseau タループに氣管切開を始む。

一八一四

英、スチブンソン George Stephenson 汽車を發明す。

英、デービー Davy 孤光を發明す。

馬場佐十郎、「魯文法規範」を著す。
伊能忠敬、「沿海實測全圖」を作る。
△小森桃鳩(三三)、京都に業を開く。

文化十二年 乙亥 二四七五(一八一五)

杉田玄白、「蘭學事始」を著す。
和蘭公使等對譯辭書を輯す。
長崎出島商館長、ブウフ Hendrik Doeff (一七七七一—一八三五、一七九九出島着任) 幕府の命により通詞等とフランソワ・ハルマ Francois-Hahn の蘭佛字典に準じて日蘭辭書(ドーフ・ハルマ)を作る。
△村井琴山(古醫方、吉益流、熊本醫學館を興す。著書多し)歿す(八三)。

杉田立卿のブレンク Plenk 「眼科新書」出づ、我國洋方眼科書の最初なり。
△吉雄永章の遺著「因液發備」刊行さる。尿管の排泄物の化學的検査の方法を記述せるものなり。

文化十三年 丙子 二四七六(一八一六)

賀川蘭齋(分娩に探領器を發明す)、女醫博士に補さる、女醫博士(産醫)の官、中古以來缺けたること久し、是に至りて之を復すと。
中條と稱する墮胎業の女江戸に多し。
△池田瑞仙(痘科醫)歿す(八三)。

△大槻玄澤(六〇)、「接痘編」を出す。
小森玄良、「蘭方楓機」を譯す。

仁孝天皇

文化十四年 丁丑 二四七七(一八一七)

蘭學醫、杉田玄白歿す(八五)。
△蛭田克明(産科、獨學、一派をなす)歿す(七三)。
古賀精里、和算家會田安明(七七)、中井履軒(八七)歿す。
△中天游(海上隨鳥の門、緒方洪庵の師)大阪に蘭醫方にて開業す。
△甲斐の醫、橋本善也、藥舖白根勇藏と謀り蘭法に則りて葡萄酒を造る。

文化、文政、天保に亘り馬場貞由、宇田川玄眞、同稼菴、大槻玄澤、同玄幹、小關三英、湊長安等佛人ノエール・シヨメール Noel Chomeil 百科辭典の和蘭譯書を日本語に重譯して「厚生新編」七十冊を作る。

文政元年 戊寅 二四七八(一八一八)

英船、再び浦賀に来る。
△岑少翁(古醫方、吉益流)司馬江漢(八一)歿す。
新宮涼庭、長崎より京都に歸り蘭方を開業す。
△天文臺譯員、大槻玄澤、宇田川玄眞、西洋新藥を和蘭に註文せんことを建議す。
杉田立卿、参府の和蘭醫員よりゴムカテール一條を賞ふ。
藤林泰助譯「和蘭藥性辨」(イペイ原書)刊行さる。

獨、フラウンホーフェル Fraunhofer スペクトルの黒線所謂フラウンホーフェル線を見出す。

△英、ピーヤソン Person 炭肺症(炭粉沈着症)を記す。

△佛、ギョロタン Guilloin (一七三八)、醫師、死刑と其實施に關し議會に提議す、斷頭器は彼の發案に非ず)歿す。

一八一五

*佛、ナポレオン Napoleon Bonaparte セントヘレナに流さる。佛、ドレー 自轉車を考案す。

澳、メスマル F. A. Mesmer (一七三四)、動物磁氣説を唱ふ)歿す。

獨、キルヒホッフ Kirchhoff ナアスターゼにより澱粉を分解す。

英、ブラウト Prout (胃液中の鹽酸發見者) 水素原子を他の原子構成の要素となす。

一八一六

清國、阿片三千二百兩を燒く。

△佛、バイル G. L. Bayle (一七七四)、肺癆を研究す)歿す。

△米、フィジック Physick 腸線を使用す。

一八一七

獨、シュバンハウエル Arthur Schopenhauer 「意志及び現象の世界」出づ。

英、モンロー Monro (一七三三)、腦脊髄神経系の研究に功績あり、父子三代名高し)歿す。

△英、パーキンソン Parkinson 震顫麻痺を記載す。

△シエルブエル Cherevull 糖尿病尿の糖は葡萄糖なるを證す。

△佛、アリメール Albert 癩皮症 Zekemie を創記す。

獨、パングル Christian Pander 胚葉の数を三枚とす。

一八一八

*ナリ、西班牙より獨立す。

佛蘭西に藥局方成る。

△佛、ペルチエ Pelletier カウメントウ Caventou ストリキニーネを製す。

佛、テナール Thénard 過酸化水素を發見す。

△リーメル Riener 屍體水精法を始む。

文政二年(四四) 己卯 二四七九(一八一九)

水戸徳川治保、「大日本史紀傳」四十五冊を幕府に献ず。
俳人一茶、「おらが春」出る。
尾張人、豊助樂焼を始む(犬山焼)。
立野龍貞、「産科新論」を著はし、包頭器即ち鉗子を創記す。

△吉雄俊蔵、「和蘭内外要方」を譯す。

△南小柿良祐、「解剖存眞圖」を著はす。

△宇田川榛齋、同榕菴、「和蘭藥鏡」を刊行す。

△橋本宗吉、「西洋醫事集成寶函」六卷を著はす。

文政三年 庚辰 二四八〇(一八二〇)

將軍家齊、痘瘡を患ふ。

△高橋景保滿洲文書語を譯して献ず。

△塙保己一の「群書類從」成る。

△浮世繪師、塙川春亭歿す。

△古醫方、原南陽歿す(六八)。

△江馬元弘(元恭、蘭齋の養嗣)歿す。

△吉田長淑、「蘭藥鏡原」を著はす。

△大槻玄澤、「西音發微」を著はす。

△高野長英、初め杉田伯元の門に入り後吉田長淑に就く。

△本間重軒、原南陽の門に入る。

△上杉孝伯、カテーテルを作る。

一八一九

※英國の印度貿易三百萬磅以上に上る。

佛、チカロン Dulong、ブチー Petit 原子熱の法則を發見す。

佛、ビオー Biot 一平面に偏る光線の一定有機物質を通過する際

に偏光面を廻轉するを發見す。

佛、ラエンネック H. Laeune ステトスコープ發明、

聽診法 Traite de lauscultation mediate 始まる、又氣

胸を初めて證す。

△英、ボストック Bostock 枯草熱を記載す。

一八一〇

英、マルサス Malthus 「經濟原論」出づ。

佛、アンブール André Marie Ampère 電磁學大家、電氣學の

論文を發表す。

△米合衆國に「藥局方」成る。

△東印度會社の外科醫立温斯敦 Livingstone、瑪禮孫 Morrison

澳門に醫院を建じ。

△支那にコレラ「霍亂」流行す(一八一七年頃印度より傳來す)。

英、ヤング Th. Young (一七七三—、自然科學及び醫

學者、光の干涉、眼の調節作用、亂視を説明す)歿す。

佛、ベルチエ Pelletier、カヴェントウ Caventou 規那皮

よりキニーネを製す。

ルンゲ Runge、ローヒー實よりコフェインを見出す。

△英、ソムプソン Thompson 二瓶法による檢尿を創む。

文政四年 辛巳 二四八一(一八一二)

伊能忠敬の「大日本沿海實測圖」成る。

伊能忠敬(七七)、塙保己一(七六)、畫人、森垣仙歿す。

蘭船、駱駝を長崎に輸致し江戸に至る。

杉田立卿、フレンキ(澳、Pleuck)蘭譯書を重譯して「歐

瘡新書」五卷を刊行す。

文政五年(四五) 壬午 二四八二(一八一三)

※四月、英船浦賀に入港薪水を求む。

△西國(畿内、山陰、山陽地方)にコレラ日本に初めて流行す。

△上杉治憲(鷹山、七二)、式亭三馬(四八)歿す。

△相馬大作、死刑に處せらる。

△永田善吉(亞歐堂田善、西洋畫家、銅版を作る)歿す(七五)。

△本木正榮(大通詞、露英の語に通ず)歿す(五六)。

△丹波康頼撰、「神遺方」を丹波頼理、和氣義啓撰して上梓す。

△獨、ナッセ Nasse 血友病家系の女子は其父より其遺傳を受け健

康男子と結婚すれば男兒に遺傳するも女兒には出血素質の症發せ

ずとなす。

一八一三

ペルー獨立す。

英、ゼームス・ミル James Mill 「經濟原論」出づ。

ナポレオン一世歿す。

瑞典、ベルツェリウス Berzelius 酸素 16 を諸元素原子量の標準

となす。

佛、コルヴィサー Corvisart (一七五五—、ナポレオン

一世侍醫、病理學者)歿す。

△佛、マジアンチー Magendie、ベルと無關係に獨立して脊

髓前根は運動性、後根は知覺性となす。

英、ブラウン R. Brown 微粒子のブラウン運動を發見す。

△獨、チーフエンバッハ Dieffenbach 苛性曹達により血液凝固を

防ぐことを發見す。之凝固防止劑使用の嚆矢なり。

△英、パイルトン Purton 特發性食道擴張症を記す。

一八一三

※ブラジル、葡國より獨立す。

△セルラス Serllas 沃度ホルムを創製す。

△佛、バイル Bayle 進行性麻痺を記述す。

△英、アラウト Proust 糖尿の尿酸と蔗糖を區別す。

△仙臺藩醫學館に蘭方科設けられ、佐々木仲澤、小園三英講師となる。

片倉鶴陵（賀川流、古方に蘭方を交ゆること多く、名聲籍甚、古來醫書未だ論ぜざる所の囊兒を見て始めて胎兒の形状を知り、遂に「産科發蒙」を著す）歿す（七二）。宇田川玄眞校註、蘭醫藤井方亭増譯増補、重訂内科撰要「十八巻出づ」。

△新宮涼庭、「和蘭窮理外科則」を刊行す。

△京都小森桃地門下、「解賦圖賦」を上梓す。

△奈須恒徳、「本朝醫談」を著す。

△齋藤方策、中環、「解剖圖譜」を出す。

△佐々木中澤、「解體存眞圖」を著す。

文政六年 癸未 二四八三（一八二二）

蘭館醫獨逸人、シーボルト Philipp Franz von Siebold

（二一八）長崎出島着任す。

詩人、葛西因是、立原翠軒歿す。

太田南畝（蜀山人）歿す（七五）。

青地林宗、「詞論 Hoorn 産科書」〔依百乙 Yedy 薬性論〕を譯す。

△吉雄常三、「觀象圖説」を著す。

大槻玄幹、ヘイステル Heister 原著蘭譯外科書を抄譯して「要術知新」を著す。

新宮涼庭（Hufeland）（一七六二—一八三六）及び Conslbruch の内科書を抄譯して「泰西疫論」〔腸チフス〕を述ぶ。

文政七年（開八） 甲申 二四八四（一八二四）

足立左内、「露西亞學塾」を幕府に呈す。

名古屋の梶常吉、七寶鏡を創む。

松前の漁夫中川五郎治、漂流して魯國に渡りしもの（文化四年—同九年）痘苗を持來り種痘す。

シーボルト、長崎の郊外鳴瀧に開塾、醫學及び萬有學を講ず（高野長英等之に就き學ぶ）。

△蘭醫、吉田長淑（内科に精し「泰西熱病論」）、「内科解環」、「蘭藥鏡原」等著す）加州侯に應診して金澤にて歿す（四六）。

△三角了敬（法印、官醫）歿す（六六）。

△各務文獻「整骨新書」を、小野蘭山「飲膳摘要」を、藤林普山「西醫方選」を、大槻玄幹「要術知新」を出版す。

△「麻疹必用」と題する小冊（麻疹、痘疹年表と注意書）世に行はる。

文政八年 乙酉 二四八五（一八二五）

△外船打拂令を發す（文政擴張令）。

英船、陸奥沖に來る。

浮世繪師、初代豊國歿す（五七）。

美島順三、賀川氏「産論」を蘭譯し、シーボルトは之をバタビヤ學會雜誌に掲載し、ヨーロッパに送る。

△石阪宗哲、「榮福中經圖」（四州園發行）を出す。

△平澤隨貞撰、「増補醫道便易」出版さる。

一八三三

△米國、モンロー主義を宣言す。

マルサス、「價值の攪衡」を公表す。

英、リカルド David Ricardo（元ユダヤ人、經濟學者、分配論の研究者）歿す。

△パリ醫科大學組織さる。

英、ジェンナー Edw. Jenner（一七四九—、種痘創始者）歿す。

英、ブラウト Prant 胃液中に初めて鹽酸を發見す。

△獨、アルキンエ Parkinje（生理學者）指紋法の端を開く。

△米、ピウラス Allan Burus 蝕色蝕を初めて記載す。

△アムステル Blundell 女子に人工避妊術を行ふ。

△英、スタドモア Zundmore 蛋白質に尿素少なきを指摘す。

△ルジモール Lejumeau 胎兒心音を聽診す。

一八三四

△英國、シンガポールを購ぶ。

英船、常陸津濱に上陸す。薩摩の寶島を掠む。

英、バイロン Lord Byron（詩人ギリシヤ獨立運動に同情す）歿す。

英、パーキンソン Parkinson（一七五五—、震顫麻痺を記す）歿す。

佛、バラール Ballard 臭素を發見す。

△オットー Otto 胃ポリープを報ず。

△ローランド Rolandos 腸固定液として重クロム酸カリ液を用ひ顯微鏡的検査に一新生面を拓く。

一八三五

ポルトガル、ブラジルの獨立を承認す。

獨、プロシヤ、醫制を改革す。

△グレゴリ Gregory 糖尿病の尿糖は葡萄糖と決定す。

△佛、ブイロー Bouilland 失語症 Aphasie を記載す。

△佛、ルイ Louis 臨牀及び剖見上より肺癆は最も屢々肺尖部が侵害さると報ず。

△ライジンゲル Franz Reisinger アトロピンを眼の検査に使用す。

文政九年 丙戌 二四八六(一八二六)

將軍、蘭使甲比丹ウイレルム・デ・スツルレル Sturlet を引見す。
シーボルト隨行し江戸に到る。

高橋作左衛門、「露西亞和解」を献す。

青地林宗、「氣海觀瀾」、「地學正宗」を譯す、前者は我
國に於ける地理書の最初なり。

岩垣松苗の「國史略」成る。

龜田鶴齋、藤田圃谷、中島秋帆歿す。

△眼醫、土生玄碩、蘭醫シーボルト幕府に親え幕下の唐人館に寓す
時、之に教を乞ひ、開瞳藥を貢し其苦を教へられ其野生するを
聞き採取して自ら越幾斯を作る。

△丹波元胤、「醫籍考」を著す。

「重訂解體新書銅版全圖」出る。

坪井誠軒、「診候大概」を出す。我國最初の洋式診断學な
り。

文政十年(四六) 丁亥 二四八七(一八二七)

額山陽、「日本外史」を松平定信に呈す。

英毅、小笠原占領を宣言す。

婦女、醫師の他日傘を濫りに用ふべからずの令出づ(檢約令)。

前田侯邸の門(俗稱赤門)起工。

菅茶山(八〇)、小林一茶(六五)歿す。

蘭醫、大槻玄澤、「環海異聞」、「蘭學楷梯」を著はし「解
體新書」を重訂す(歿す(七一))。

△多紀元胤(元簡の子)歿す(四七)。

大和見立歿す(七八)。

小森玄良、「病因精義」、「泰西方鑑」を撰す。

△高良齋、「西醫新書」(コンスプルクツク氏書譯)成る。

文政十一年 戊子 二四八八(一八二八)

此年全國人口(公家、武者、又者を除く)二千七百二十萬餘。

高橋景保(二代作左衛門)等シーボルト事件に連坐下獄す。

△伊藤圭介(シーボルトに學ぶ)、「泰西本草名疏」を著はしリンネ
の二十四綱目を知らしめたり。

狩野榮信、本居春庭、酒井抱一、歌川豊廣歿す。

△伊東玄朴、江戸に開業す。

△山本善太、「海内醫林傳」を著す。

△岩崎常正、「本草圖説」(五十卷)を著す。

△川越衛山(古醫方)歿す(七一)。

シーボルト事件

シーボルト日本に滞在六年にして十二月歸國せんとして出帆せ
しも、長崎港外にて暴風に遭難し引返したる際、其行李中より
日本國地圖、將軍家紋章等露出せるより異心あるものと
疑はれ、出島館内に拘束され、關係の蘭學者二十餘名も連累
として罪を問はるるに至れり。

文政十二年 己丑 二四八九(一八二九)

三月、江戸大火。

狩谷被齋、「本朝度量權衡攷」、「錢幣攷遺」を著す。

一八二六

汽船初めて喜望峯を廻航す。

ロンドン大學創立。

マルサスの「人口論」第六版出づ。

獨、フラウンホーフェル Fraunhofer (一七八七)、物理學、ス
ペクトルムに於ける同氏暗線)歿す。

獨、オーム Ohm 電流の強さと抵抗に關する法則を公にす。

佛、ビネル Pinel (一七五五)、内科、精神科、病理)歿す。

佛、ラエンネック Laennec (一七八一)、病理解剖、聽
診器を發明す)歿す。

佛、ブルトノー Bretonneau チフテリアを記載す。

佛、ビオリ Biorry 打診板を作る。

佛、セガラ Segalas 尿道膀胱鏡を發明す。

△タボー Taveau 商科にアマalgam 充填を考案す。

一八二七

獨、音樂家ベートーヴェン Beethoven 歿す。

△伊、ヴォルタ A. Volta (一七四五)、物理學及び生理學者)歿す。

獨、ペスタロッチ Pestalozzi (一七四六)、教育者)歿す。

英、ウォルカー Walker 燐によるマッチを發明す。

△英、キング William King 貧民の醫師として協同組合を組織す。

△東印度會社の醫、郭雷福 Colledge 支那澳門に眼科醫院を建つ。

英、ブライト Richard Bright ブライト氏病(蛋白尿、
浮腫を伴ふ腎疾患)を記載す。

英、アダムス Adams 後のアダムス及びストクス氏症候
群を報す。

△ホルン Horn 春蠶繭を初めて記載す。

一八二八

露土開戦。

米、ウェブスター英語辭書出る。

佛、ギゾー Guizot フランス文明史を著す。

獨、ウエーレル Fr. Woehler 尿素の人工的合成に成功
す。

グリーン、電氣に關する論文を発表す。

英、ニコル Will. Nicol ニコルのプリズマを發明す(偏光)。

獨、シャーベルト Franz Schubert (音樂家)歿す。

△澳、ガル Gall (一七五八)、觸定位説、骨相學者)歿す。

瑞典、トゥンベルグ Thunberg 安永四一五年(一七五五—一七
七六)日本長崎和蘭商館に在仕)本國にて歿す(八五)。

△獨、シーボルト A. E. v. Siebold (一七七五)、日本に來任せ
し Ph. Franz v. Siebold の叔父、産婦人科)歿す。

△米、フイジック Physick 扁桃腺切除を始む。

獨、ラインマン Reinmann 煙草よりニコチンを分離す。

△フッシ & Busch 等の獨逸醫學辭典出始め。

獨、ペール v. Baer 「動物發育史」を著す。胚葉説を確立す。

△アデーلمان Adelman 甲狀腺腫と心臓障母に着目す。

一八二九

△佛、ラマルク Lamarck (一七四四)、博物學者にして醫學を學
ぶ)歿す。

戯作家、鶴屋南北歿す。

△シールボルト(蘭使醫官) 追放され十二月日本を去る。
坪井信道、江戸深川に日習堂學塾を開き、蘭醫方を開業す。

△橋本宗吉(大阪の人、大槻盤水に學び、「西洋醫事集成」、「和蘭醫宗」、「三法方典」等を著し江戸の宇田川椿齋と對し、電氣學を研究す)、切文丹婆、巫女豊田貢の事件に連り取調べらる。
土生玄碩、シールボルト江戸參府の折開腫藥莖若の野生するを聞き、之より製劑して白内障手術に用ひたり。

△各務文獻(整骨家、解剖に通ず)歿す(六五)。

△伊藤信恬(漢方醫)歿す(五三)。

天保元年 庚寅(十二月改元、閏三) 二四九〇(一八三〇)
狩野雪信、石川雅望(狂歌師、宿屋飯盛)歿す。

足立長鶴、西洋産科を始む。
高野長英(シールボルトに學びし人)、江戸に、岡研介(同門)大阪に開業す。

杉田立卿、澳、ブレンク外科書「瘍科新選」を譯述す。
△青地林宗、ホーレン Hoorn の蘭書を譯し「阿倫産科書」と題す。

天保二年 辛卯 二四九一(一八三二)

異船、東蝦夷を侵す。

重田貞一(十返舎一九)歿す(五七)。

僧、良寛歿す(七五)。

△緒方洪庵、江戸の坪井信道の門に入る。

△戸塚静海、外科を以て江戸に開業す。

△伊東玄朴、鍋島侯爵となる(三二)。

△本庄普一、漢蘭折衷の「眼科錦囊」を著す。

△足立長衛、「醫方研幾」を撰す。

△佐藤方定、「奇魂」を著す。

岡研介、「生機論」を撰す。

△吉雄權之助(長崎の蘭醫、幸載の子)歿す(四七)。

天保三年(閏十一) 壬辰 二四九二(一八三三)

踏園飢饉。

爲水春水、柳亭種彦等人情本を出す。

頼 襄(山陽)歿す(五三)。

△青地林宗、水戸侯の醫員となる。

高野長英、「醫源樞要」を出す。之は西洋諸家の人身究理

佛、ラブラリス Laplace(數學者にして天文學者、解析、公算論、星雲説、毛細管現象、迴轉流體の平衡、音響の速度等の研究家)歿す。

△歐洲に初めてのコレラ病大流行、露國にも及ぶ。

△佛、タリユウ ユーエ Orvathie 胃潰瘍を獨立疾患として記載す。

△リイベッヒ Liebig 尿中に馬尿酸を證す。

英、ベル エル III 三叉神經の運動、知覺神經たるを證す。

△佛、ルイ Louis 腸チフスに Fièvre typhoïde の命名をなす。

一八三〇

△佛國に「七月革命」起る。世界各地に動亂起る。

△スチアソン Stephenson 初めてリバプールとマンチェスターとの間に鐵道を敷設す。

△獨、ゼンメリンク Th. von Sommering(一七五五)、名著「人體構造」あり歿す。

佛、コンシラン Conchrate 潜函 Gaiçon の特許を得。

英、ベル Bell「人體の神經系統」を出し一八一一年より脊髓反射に於て前根は運動性、後根は知覺性となす(ベル・マジヤンチー氏法則)。

露、ジェーニヒン Jönsen 始めて食鹽水の靜脈内注射をなす。

英、リスター J. J. Lister(外科殺菌法の創始者リスターの父)

複顯微鏡に色消しレンズを用ふ。

△獨、コッパ Kopp 胸腺死を報ず。

一八三一

英、ダアウキン Darwin のヨーゲル號太平洋航海を始む。

英、フアラデー M. Faraday 感應電氣を發見し、電離を説明す。

獨、ヘーゲル Fr. Hegel(哲學者「精神現象論」、「論理の科學」、「哲學的諸科學集成概要」等を著す)コレラの傳染により歿す。

△英、アバーネス J. Abernethy(一七六四)、比較解剖學に貢獻す)歿す。

英、ブラウン Robert Brown 植物の細胞核を發見す。

△タイスマン Tiedemann、メクシム Gmelin 血液中に酸酵試験により糖の存在を證す。

佛、リコール Ricord 在來の性病一毒説に對し淋疾と下疳とを區別す(一毒説)。

△リリーゴッヒ Liebig、ソウズロー Soubeiran クロロホルムを發見す。

△ダンス Dance タタニーを記述す。

△マイツェル Mizer 脊髄癆性關節症を記す。

△佛、トルソー Troussau 巴里にて氣管切開を初めて行ふ。

一八三三

△歐洲にコレラ流行、米國に入る。

獨、ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe(一七四九)、詩人、戯曲家、哲學者、科學者而して解剖學者)歿す。

英、スコット Walter Scott(詩人、小説家)歿す。

△佛、キャウエイエ Cuvier(一七六九)、比較解剖學の建設者)歿す。

の説を譯し輯めたるものにして我國西洋流生理書の嚆矢とす。
 小堀三英、「泰西内科集成」を譯述す(コンスプアルク氏書)。
 水原三折、産科探領器を案出す。
 賀川蘭臺、纏頭絹を發明す。
 畑神泰(黄山の美嗣)歿す(六一)。

天保四年 癸巳 二四九三(一八三三)
 幕府、五箇年間儉約を令す。
 東大寺正倉院を開く(十月)。
 畫家、高久齋屋歿す。
 古醫方、中神夢溪(吉益東洞に服し門人多く、著書多數あり)歿す(九一)。
 プッフ・ヘルマ(蘭和辭典)出る。
 蘭醫、宇田川榕菴、西洋植物學「植學啓原」を著はす。

△蘭醫、青地林宗(理學に精し「醫學集成」、「公氏内科書」、「依民藥性論」等著はす)歿す(五九)。
 △賀川蘭齋(女醫博士)歿す(六三)。
 △杉田伯元歿す(七一)。
 △水谷豊文(本草學)歿す(四三)。
 天保五年 甲午 二四九四(一八三四)
 諸國飢饉。
 頼惟柔(杏坪)、畫師、歌川國安歿す。
 蘭醫、宇田川榛齋(玄隨の養子、「遠西醫範」、「醫範提綱」、「和蘭藥鏡」、「遠西醫方名物考」等著はす)歿す(六六)。
 △山脇東海歿す(七八)。
 △曾占春(本草學)歿す(七七)。
 天保六年(同七) 乙未 二四九五(一八三五)
 天保錢鑄造さる。
 狩谷望之(披齋)、田能村孝憲(竹田)歿す。
 二世、歌川豊國歿す。
 奥劣齋(山脇東門、賀川子玄の流、女科、産科に精し著書多し)歿す(五六)。
 華岡隨軒(隨賢、青洲、漢蘭折衷の醫家、内外合一活物究理を主張し特に外科に精し)歿す(七六)。
 栗本瑞見(本草學者)歿す(七九)。
 伊東玄村、澳、ビショップフ Hirschoff の内科書を譯して「醫療正始」を著述す。

△獨、ルドルフイー K. A. Ludolph (一七七一、内科)歿す。
 △英、ホツキン Hodgkin ホツキン氏病(淋巴肉芽腫症)を記載す。
 △英、ベル Bell 同氏眼珠現象を發見す、又顔面神經麻痺を詳述す。
 △佛、ブロー Bland ブロー氏丸を作る。
 △トネレ Tonelle 胃腸性タタニーを創記す。
 △フエデツシタ Fodisch 萎黃病血液に鐵分減少を證す。
 獨、リービツヒ Liebig タロホルムを作る、又抱水クローラールを作る。
 △クルウエイニ Cruveilhier 多發性硬化症を記載す。
 ライヘンバツハ Reichenbach 山毛櫨を蒸餾してクレストットを作る。
 ロビケ Robiquet 阿片よりコデインを分離す。
 △英、ホール Hall 春體に於ける反射中樞を發見す。
 △英、コリガン Corrigan 大動脈閉鎖不全症を記載す。

一八三三
 獨人、ガウス Gauss ウェーベル Weber 電信を發明す。
 英、フアラデー Faraday 溶液電氣分解に關する法則を發見す。
 △獨、メツケル Fr. Meckel (一七八一、解剖學、外科學)歿す。
 ガイゲル Geiger ヲセ Hesse アトロピンを製す。
 △獨、ミヤレル J. Müller 名著「人體生理學」を著はす。
 米、ボーモン Beaumont 人の胃瘻に就き消化生理を研究す。

△英、ハンネー Hanney 特發性食道擴張症の剖檢例を報ず。
 △エーレンベルグ Ehrenberg 神經細胞と神經纖維を神經組織構成上の主要素とす。
 ローゼ E. Rose コウレット反應を發見す。
 一八三四
 ※英の印度貿易高一千萬磅に上る。
 △米醫バアカア Deter Parker 支那廣州に基督教醫院を建つ。
 △獨、ハイム L. Heim (一七四七、藥物に精し)歿す。
 獨、ウーベル H. Weber 昔又によるウーベル氏試驗を發表す。
 △獨、ヂッフェンバツハ Diefenbach 人工肛門の手術を創む。
 △獨、ルンゲ Runge アニリンを發見し、石炭酸、ヒノリンを作る。
 △佛、Dezimeiris 醫學史辭典出版す。
 一八三五
 獨逸に初めて鐵道通ず。
 顯微鏡漸く發達す。
 △澳、ロブスタイン J. F. Lobstein (一七七七、病理解剖、内科學)歿す。
 澳、ボエル J. Boer (一七五一、産婦人科)歿す。
 獨、アウテンリート F. v. Autenrieth (一七二二)歿す。
 △英、グレイブス Graves グレイブス病(バセドウ氏病)を記載す。
 △ウエルホーフ Werholf ウエルホーフ氏紫斑病を記載す。
 シタワン Schwann 胃液中にペプシンを發見す。
 △佛、アマチアー Anusatz 小兒に人工肛門を作る。

△和田泰然(後佐藤姓に復す)、林洞海(後林に改む)長崎に遊學し同年着任せし蘭館長、蘭醫ニーマン J. F. Neuman に就て醫を學ぶ。

【當時の蘭醫年節】

戸塚静海(三七)、佐藤泰然(三二)、杉田立輔(五〇)、其作阮市(三七)、林洞海(三三)。

天保七年 丙申 二四九六(一八三六)

諸國飢饉、奥羽甚し。

水戸、徳川齊昭常陸助川に砲臺を築く。

官制人參の賣買許す。

高良齋、大阪に洋方眼科を開く。

△帆足萬里、「窮理通」を著す。

△藤林普山(蘭醫、五六)、足立長傷(蘭學産科に通ず、六一)、橋本宗吉(七六)歿す。

一八三六

小銃後装式となる。

ハルテンシュタイン「形而上學の問題、原理」出づ。

佛、アムペール Ampère (一七七五—)歿す。

獨、フーランド C. Wih. Hufeland (一七六一—、

柏林大學初代醫學部長)歿す。我國に於て緒方洪庵等氏の著述を譯述す。

ベルリン學派

フーフラング Christoph Wilhelm Hufeland (1762—1836)

ケイム Ernst Ludwig Heim (1747—1834)

フレイリクテス Friedrich Theodor Frerichs (1819—1885)

トラウヴ Ludwig Traube (1818—1876)

タリージナル Wilhelm Griesinger (1817—1868)

英、(ンリー William Henry (一七七四—、化學者)歿す。

△英、ピアソン Pearson (一七六五—、藥物學者)歿す。

△英、シェーン J. Cheyne (一七七七—、シェーン氏呼吸)歿す。

天保八年 丁酉 二四九七(一八三七)

此年凶作の地多し。

品川外三ヶ所に救小屋を設く。

※徳川家齊、家慶に將軍職を讓る。

※大鹽平八郎(中齋)亂を大阪に起し、事敗れ自殺す。

米船浦賀、薩摩に來る。

土生玄昌(玄碩の子)、家慶將軍の侍醫となり其眼疾を療す。

△本間東軒(漢蘭醫)、「傷科秘錄」を著す。

△蘭醫、大槻玄幹(五三)、同、美馬順三(シーボルト門、三一)歿す。

一八三七

※英、グイタトリヤ女王即位。

英、カーライル Carlyle「佛蘭西革命史」出づ。

米、モールス Morse 電信機を作る。

酵母菌發見さる。

米、フィジック Sy. Physick (一七六八—、外科)歿す。

△佛、アリエール J. L. Albert (一七六八—、皮膚科學の發達に貢献す)歿す。

△スチルリング Stilling 腹膜外より卵巣摘除を行ふ。

△佛、レマーク Reznak 神経軸索を發見す。

△オリヴェイユ Olivier 脊髄空洞症を記載す。

△エゲベルグ Egeberg 食道狭窄に胃瘻を作る。

佛、リコール Ricord 性病三元説をなし、軟性下疳と硬性下疳の區別すべきを暗示す(一八五二年門人パスロウ

Hasserau 硬性下疳の微毒なることを明確に指定したり

【参考】

- 一八七九 獨、ナイセル Naizer 淋菌發見
- 一八八九 伊、デュクレイ Ducrey 軟性下疳菌發見
- 一九〇五 獨、シャウチン Schaudinn ホフマン Hoffmann 微毒病の病原體 Spirochaeta pallida 發見

- △英、モントゴメリー Montgomery 同氏腺を發見す。
- △佛、ドゥネ Donné 體トリコモナスを發見す。
- △佛、フルーラン Florens 延髓に於ける呼吸中樞 Noeud vital を發見す。
- 獨、ビショップ Bischoff 血中より遊離の酸素、炭酸瓦斯を證す。
- △ソロン Martin Solon 蛋白尿 Albuminurie の命名をなす。
- 一八三八 清國、阿片喫煙を禁す。
- △英醫、ロツカルト William Lockart 支那廣州に来る。
- ※英國汽船、大西洋を横斷し米國紐育に至る。
- 佛人、ダゲール Daguerre 寫眞術を發達さす。
- 佛、ブルーサー Jos. Victor Broussais (一七七一—、病氣の解剖的原因を探求し發熱の原因を内臓の炎症、刺戟より來るとなす、放血に經を用ふ) 歿す。
- 獨、シュライデン Schleiden 植物細胞を見出す。

天保九年(同四) 戊戌 二四九八(一八三八)
三月、江戸城西丸炎上。
緒方洪庵、大阪に開業し其塾を適々塾と云ふ。
高野長英、「夢物語」を出す。
△前野順庵、高井蘭山、江馬蘭齋(九二)、賀川南龍(五八)歿す。
獨人、岸駒歿す(九〇)。
紀州、和歌山醫學館に産物會を開く。
日野鼎哉(シーボルトに學ぶ)、京都に開業す。
佐藤泰然(蘭醫ニーマン Niemann に學ぶ)、江戸に開業す。

す。

△高良齋、「驅微要方」を譯述す。

天保十年 己亥 二四九九(一八三九)
三月、新宮涼庭、順正書院を京都東山に建つ。
山東京山、瀧澤馬琴、柳亭種彦、松亭金水等人情本を書く。
渡邊、登(華山)蟹居に處さる。
△町醫、高野長英、「夢物語」を著はし永牢に處さる。
小圃三英自殺す(五三)。
蘭醫、宇田川榕菴「舍密開宗」(一八二八年刊行の英、ウイリアム・ヘンリー著化學撮要の獨譯を蘭語に翻譯したるもの)を更に邦譯したるものを公にす。これ本邦に於ける化學書の嚆矢とす。
杉田成卿、伊東玄朴に圍り猿屍を解剖し腦内景を探り第四腦室中の鷲毛筆に及ぶ。
△百々漢陰(漢方醫)歿す。
蘭館醫、リシニール Lischnur 牛痘苗を齎す。

- △獨、フォルクマン Volkmann 心臟刺戟に於ける神経系統(後の心臟筋内支配説に對するもの)を記載す。
- 澳、アルバルト Albutt 急性盲腸炎を記載す。
- △ロリンザル Korner 機嫌症を記述す。
- マイエル J. R. Meyer サントニンを分離す。
- △ダックス Mare Dax 言語中樞を記載す。
- △ストラットン Stratton 炭肺を報ず。
- △ライエル Rayer 皮膚紋黄症を報ず。
- △獨、シュワン Schwann 神経軸索鞘を發見す。
- 一八三九 英人、廣東、アデン、アフガニスタン等に侵入す。
- ※和蘭、ベルギーの獨立を承認す。
- ※清の林則徐、英商の阿片二萬二千八百八十三兩を燒棄て阿片戰爭の端緒をなす。
- 英醫、ホブソン Benjamin Hobson 支那廣州に來り澳門醫院長となる、後上海に至る、著はす所の西醫書五種は支那西醫發展の資となる。
- △米國、バルチモアに世界最初の齒科醫學校設けらる。
- 英國政府、死亡原因の調査を始む。
- 獨、シュワン Theodor Schwann 動物細胞を見出し「動物物の構成及び生長に關する一致」なる著をなす。
- △スコウダ Skoda の打診及び聽診の著述出づ。
- シエーレンバイン Schoenbein オゾンを發見す。
- △丁、セデルシエルフ Cedersehjold 産褥熱の傳染性を初めて唱

天保十一年 庚子 二五〇〇〔一八四〇〕

幕府、更に明年より三年間の節儉を令す。

鈴木春山、「西洋兵制」を著す。

蘭書翻譯を被命者の他なすを禁ず。

△賣藥の看板に蘭字使用を禁ず。

澁川六藏(敬直)譯、藤井三郎(質、方亭の子)訂の「英文鑑」刊行さる。

馬琴、失明す。

國學者、小宮山楓軒(七五)、藤井高尙(七七)歿す。

林洞海、ワートル Walter 「藥性論」を譯述す、醫學館

の蘭學壓迫により安政三年漸く公刊さる。

△山口藩、萩に醫學所設けられ後好生館と改む。

よ。

△佛、マジヤンガイ Mergentie 其著「血液講本」の中に、犬に再

三卵白を注射すると突然死を來すを述ぶ。

シエンライン Schoenlein 黃癬の病原菌を發見す。又腸

チフスと發疹チフスを劃然と分つ。

佛、トリジヤ Trigar 潜函を工事に實用す。

一八四〇

△阿片戰爭始まる、清國は英吉利の印度産阿片を國內に賣込むを峻

拒したることより英、清の戰爭となり、清國敗れ南京條約を結び

和を講ずるに至れり(一八四二年)。

佛、デュマ J. B. Dumas 原子論を排す。

瑞西、ヘッス、總熱量恒一の定則を發見す。

カーライル、「英雄崇拜論」を著す。

獨、マイヤー、百科辭典出る。

△獨、ブルーメンバツハ J. Friedr. Blumenbach (一七五二—

生形的衝動を唱ふ)歿す。

獨、グレーフ K. Karl Ferdinand Graefe (一七八七—

外科)歿す。

△規那皮マラリア特效劑として歐洲に輸入さる。

△獨、バセドウ Basedow バセドウ氏病を詳細に記載す。

△獨、ツボアレーモン Du-Boi-Reymond 筋肉、神經の静止電流

の研究を發表し始む。

獨、ブルリッヒ Bullrich (一八〇二—一八五六)胃酸過

多の吞酸嗜嚙に重曹を試む。

獨、ウィルヒョウ Virchow、ハネット Knott 各獨立し

て白血球増多を記述す。

△瑞典、ハイネ Heine 急性小兒麻痺を記載す。

△佛、ブイロウ Bouilland 臨牀上「ロイマチス」に心臟變化を來

すを認む。

ブルキンエ Purkinje 細胞實質をプロトプラスマ Pro-

toplasma と命名す。

△リビッツ Leebig 榮養説を唱ふ。

△フランス Delasiauve 精系捻轉を報ず。

△メンレー J. Henle 「病理學書」を著す。

△ウーベス Weber 兄弟、スチルリッヒ Stilling 脈管運動神經

を提唱す。

△スチルリッヒ B. Stilling 脊椎刺戟症狀 Spinalirritation を記載

す。

一八四一

英兵定海を抜く。

獨、トロムメル Trommer 尿中糖證明法を發見す。

米、ジャクソン Jackson エーテル麻醉法を始む。

△獨、ヘンレー J. Henle 副腎を甲狀腺、胸腺、脾臓と共に血液腺

なりと提唱す。

△ライエル Rayer 腎臓水腫及び起立性蛋白尿を記載す。

△英、グットサー John Goodair 胃サルチーナを發見す。

△澳、ロキタンスキー Rokitsansky 病理解剖の材料に卵巣腫瘍の、

天保十二年(開正) 辛丑 二五〇一〔一八四一〕

※家齊、薨去、天保の改革。

高島秋帆、西洋式銃隊の操練を行ふ。

水戸藩主、徳川齊昭、藩校「弘道館」を開く。

昌平塾講義に士庶の聴講を許す。

幕府、女髮結を禁ず。

佐藤一齋、儒員となる。

大野權之丞、「泰平年表」等の出版により罪せらる。

渡邊華山自刃す(四九)。

谷文見歿す(七八)。

蘭醫、大槻俊齋江戸にて始めて大槻磐溪の長女に種痘を施す。

△星代弘賢(本草學にも通ず)歿す(八六)。

△上田公鼎(漢蘭折衷して一家言をなし眼科に精し)歿す(四〇)。

天保十三年 壬寅 二五〇二(一八四二)

幕府、風儀を取締り、俳優妓女等の一枚摺錦繪の印行賣買を禁止し表紙上包等にも色刷を許さず、舞草紙等にて版板せるもの多し。幕府、「學問教授所」を再興す。

朝廷、京都に「習學所」創立の事を所司代に傳へらる。

高島秋帆、砲術を公認教授す、後外人私交の罪により獄下す。

二宮尊徳、水野越前守に抜擢さる。

柳亭種彦歿す。爲永春水獄死す。

△女醫師(所謂中條流にして墮胎を主としたるものあり)の儀に觸書出る。

緒方洪庵、大阪に解剖社を設け、葭島にて解剖をなす。又譯述に十六年を費したる扶(フーフェランド氏經驗遺訓(三十六卷 Hufeland's Erichridion medicum)を

出す。

△青木周彌(蘭醫)長州に醫學所好生館を起す。

桂川甫賢(甫周の孫)幕府外科醫となる。

△岩崎漣園(本草學者)歿す(五七)。

天保十四年(閏九) 癸卯 二五〇三(一八四三)

英艦一隻、宮古八重山を測量す。

董捻轉を發見す。

△英、ターバー Cooper(一七六八、外科)歿す。

一八四二

※南京條約、阿片戦争の新果福州他五港を開き、香港を英に割く。

獨、マイエル R. Mayer 力の保存定則を唱ふ。

△英、ベル Bell(一七七四、顔面神経麻痺の記載者)歿す。

△佛、ラレー Larrey(一七六八、外科學)歿す。

△佛、ダモアソー Damoiseau 渗出性肋膜炎に於ける濁音線ダモアソー氏線を見出す。

△英、ボーマン Bowman 尿生成に濾過説を唱ふ。

△ルムホルツ Helmholtz 神経細胞及び同纖維の關係を詳述す。

△佛、フロラン Flourous 腦髓局部區別をなす。

英、ブレイド Braid 一種の催眠術 Hypnosis を研究す。

△澳、ロキタンスキ Rokitansky 病理解剖上、急性黄色肝萎縮を報ず。

△ヌナルリング Stilling 腦髓を切片標本により軸索の走行を検す。

△佛、レカミエ Edehammer 膽嚢を用ふ。

△佛、ドンネ Donne 血小板を發見す。

△獨、シモン F. Simon 尿回場を發見す。

△佛、クリョウヴェイク Cruveilhier 腦脊髄多發性硬化症を記す。

一八四三

英、スチュアート・ミル Stuart Mill の「論理學大系」出づ。

幕府、江戸、大阪十里四方の私領地を收めて直轄す。

歌人、香川景樹、書家、巻大任(菱湖)、平田篤胤、僧契沖、青山延子歿す。

小森玄良(桃鳩、蘭醫にして天保十三年皇女欽宮を世襲の醫官に非ずして拜診の榮を得、「蘭方種機」、「病因精義」等著はす)歿す(六二)。

△十東井齋(桂川甫周の門)歿す(六一)。

堀内素堂、「幼幼精義」を出す、フーフェランド書の譯述にして體裁を備へたる西洋小兒科書の最初なり。

△本莊普一、「脈論」を撰す。

△佐藤泰然、堀田侯佐倉に移り順天堂を建つ。

△新井白蟻、傳書「古易察病傳」出版。

△蘭船、モルモット及び和蘭海芋を輸入す。

弘化元年(十二月改元) 甲辰 二五〇四(一八四四)

江戸城本丸炎上。

「學問所」を「學習院」と勅命により改めらる。

佛船、琉球に入る。

※和蘭軍艦、長崎に來り圖書を持ち來り開國を勧む、杉田成卿、宇田川榕菴、品川梅次郎等之を譯す。

安田雷州、銅版東海道五十三次圖を描く。

儒、松崎謙堂、畫家、松村景文歿す。

△蘭醫、桂川甫賢歿す(四八)。

佐渡良益(坪井信道の門、越中の人)、坪井信道の養嗣となり、信良と改名す。

獨、ハーネマン Hahnemann(一七五五、ホメオパシー論者)歿す。

伊、ヅビエ Dubini 人屍の解剖に際し十二指腸に十二指腸蟲を發見す(一八三八とも云ふ)。

△ライヒ Reich 肺結核にグレオソットを應用す。

△ホフマン Hofmann コールタール中よりアニリンを見出す。

クロイケ Kraeueke 結核病の傳染性を認む(又一八六五年には Villermé を確め、一八八一年には Antrecht 一八八二年には Baumgarten 病原體を認め、コッホに至りて結核菌の本態闡明す)。

△佛、トルソー Trouseau 穿胸術をなす。

△英、レーバー J. Leber 子嗣と蛋白尿の關係を知る。

一八四四

米、モールヌ Morse バルチモア、ワシントン間に電信を開く。

佛、デューマ Dumas の「モンテクリスト」(巖窟王)出づ。

英、ダルトン J. Dalton(一七六六、化學者、定比例の定律、倍數比例の定則發見者)歿す。

澳、ヘブラ H. Hebra 疥癬は疥癬蟲による傳染性皮膚病とす。

米、齒科醫モルトン Morton エーテル麻酔を始めて試む。

△ペンレ Henle 尿回場を記載す。

△佛、オモル Homolle チギタリス有效成分として結晶性のチギタ

弘化二年 乙巳 二五〇五 (一八四五)

正月、江戸大火。

△高野長英、江戸傳馬町獄舎焼くる時解放さる。

英船、八重山、長崎に来る。

二宮尊徳、「富國方法論」を著す。

勝麟太郎(海舟)、和蘭學を始む(二三)。

畫家、岡田半江、岡本豊彦歿す(四八)。

△蘭書の出版は天文臺翻譯局の許可を要すと布告さる。

△蘭醫、杉田立脚(錦腸)歿す(六〇)。

△藤井方亭歿す(六八)。

△小川汝庵(幕府醫官、古醫方)歿す(六六)。

孝明天皇

第百二十一代
弘化三年(閏五) 丙午 二五〇六 (一八四六)

※仁孝天皇崩御、孝明天皇踐祚。

正月、江戸大火。

江川英龍(太郎左衛門)、伊豆を巡視す。

※英佛船、琉球に入り開港を促す。

△英、ベッテルハイム Bettelheim 琉球に来り布教醫察を行ふ。

米艦、續いて丁抹船浦賀に来る。

藤田東湖、蟄居を免ぜらる。

畫家、晴川養信、浦上春琴歿す。

鈴木春山(蘭醫、高野長英、小關三英と交はり西洋の兵書を研究し著述をなす)歿す(四六)。

△高良齋(シーボルト)に學ぶ、眼科に精し、錦國眼科の名高し、譯述する著書多し)歿す(四八)。

△宇田川榕菴(蘭學、植物に精し)歿す(四九)。

佐々木仲澤歿す(五七)。

△繪林宗建(鑛山六世の孫)、大成館(醫學教場、長崎)を建つ。

△黒川良安(三〇)、前田侯侍醫となる。

弘化四年 丁未 二五〇七 (一八四七)

學習院開講式(三月九日)。

リン Digitaline を抽出す。

△英、マッケンチー Mackenzie 始めて交感性眼炎を記述す。

△アレー Aloe 始めて卵巢摘除術を行ふ。

△ボラロール Bolardi 亞硝酸アミールを創製す。

米、ウエルス H. Wells 齒科手術に麻酔の目的に亞硝酸を用ふ。

△英、ムーア Moore 苛性アルカリを添加煮沸して黒褐色を呈するを陽性とする檢糖法を案出す。

一八四五

英、ファラデー Faraday 光の電磁波説を公表す。

テームス河に吊橋通行を開始す。

スチルナー「個人と財産」著す。

△獨、スタルク W. Stark (一七八七、寄生學派)歿す。

ウイルヒョウ Virchow 白血症 Weissblütigkeit を創記す。

獨、レマーケ R. Remak 三胚葉を定む。

△バルロウ Barlow 臨牀診断と剖検により横膈膜腫瘍を確證す。

△トムブソン Thompson 鶏血液にて、醱酵法で血糖を初めて測定す。

△ホフマン Hofmann ノールタール中よりメンゼンを見出す。

△ルドウイッヒ Carl Ludwig 尿生成に濾過説をなす。

△ランゲンベック v. Langenbeck 脊椎カリエス膿汁中に小顆粒を認め放線狀菌病認識の端緒をなす。

△チリアル Thirial 粟皮症 Scelerème を記載す。

獨、デュ・ボア・レーモン Du Bois-Reymond 筋肉切斷面に於ける靜止電流の存在を證す。

△ハーディ Hardy 卵巢腫瘍の莖捻轉を臨牀手術によりて見出す。

一八四六

※米、墨戰爭。

佛、マインダ J. March (一七九〇、同氏砒素試驗法)歿す。

△英、ストークス Stokes アダムス・ストークス症候群を詳述す。

△ロムベルグ Romberg 進行性顔面半側萎縮症を榮養神經症として記載す。

△佛、レカミエ Reamier 子宮搔把匙 Curette を考案す。

△アルキンエ Parkinje 心臓内膜下にヒス素の分枝アルキンエ纖維を見出す。

米、モルトン Morton、ワルレン Warren 手術にエーテル麻酔を用ふ。

△佛、フロラン Florens 動物にクロホルム麻酔を行ふ。

△ウエベル兄弟 Weber 迷走神經生理を記載し、迷走神經の刺戟は心臓鼓動の緩慢を來し交感神經の刺戟に反すとなす。

△英、ハッチンソン Hutchinson 肺活量計を考案す。

△モール Hugo von Mohl 植物細胞の原形質を創記す。

△ヒルトル Hyrtl 「解剖學書」を出す。

△ジョーナム Wharton Jones 白血球のアメーバ様運動を記す。

一八四七

獨、マルクス Marx の「共產黨宣言」出づ。

※水戸慶喜、一橋家をつぐ。
※天皇(孝明)即位式(九月十三日)。

蘭學醫、川不幸民、「氣海觀瀾廣義」を著す。

藤井三郎、「英文範」を著す。

△廣瀬元春(坪井信道の門)、京都に開業す(二八)。

△杉田成卿、「内醫手術」を譯す。

嘉永元年(二月改元) 戊申 二五〇八(一八四八)

佐久間象山、洋式野砲を作る。

瀧澤篁(曲亭馬琴)、北勝庵、一筆庵可候歿す。

蘭醫、モーニッケ Otto Mohrke 痘漿を持ち來り、檜

林宗建、試種に成功す。

△モーニッケ又聴診器を持來し、譯司、品川梅村之を模造し杉田成

卿に與ふ。成卿、嘉永三年「聴測器用法略説」を著す。

長崎通詞、本木昌造等鉛製活字を和蘭より購ふ。

川本幸民、レンズの用法とマッチの效用を説く。

△字津木昆臺(古醫方の醫「古調醫傳」、「日本醫譜」等著す)歿す(七〇)。

坪井信道(五四)、藤井三郎歿す。

△小島尙質(法眼、典醫師)歿す(五二)。

緒方洪庵、「病學通論」三卷を著す、泰西諸家の説を

とりたる我國最初の洋學病理學書なり。

嘉永二年(閏四) 己酉 二五〇九(一八四九)

※海防論起り、沿海の警備を嚴にす。

米艦長崎に、英艦浦賀に來る。

浮世繪師、葛飾北齋歿す(九〇)。

△八月六日、佐賀藩主鍋島齊正、牛痘を蘭人より得、其子に種痘し

藩醫林宗建の和蘭種痘法を藩内に實施す、續いて萩藩、種痘の

施行を藩内に令す。

杉田成卿、「濟生三方」を譯述す。

△桑田立齋、「牛痘發蒙」を著す。

△蘭醫、小石元瑞(元俊の子)歿す(六六)。

齋藤方策(蘭醫、大阪に高 良齋、緒方洪庵と並び稱せ

らる)歿す(七九)。

蘭醫の勃興と共に漢方醫の反感嫉妬から蘭方制度の幕府令出で

獨、ワイッシャー Vischer の「美學」出づ。

獨、ヘルムホルツ von Helmholtz 「力の保存」定則を發表す。

△獨、アルダツハ Fr. Burchard (一七七六)、解剖、生理學者)歿す。

△獨、チツファンバッハ J. F. Diefenbach (一七九四)、外科)歿す。

英、産科醫シンブソン Simpson クロホルム麻酔を創

始す。

△オールドム Oldham 死胎滞留 missed labour を記載す。

△ブシェンヌ Duchenne 感應通電法を紹介す。

△ルドウイヒ Ludwigs キモグラフイオンを創案す。

△ケリケル Kelliker 滑平筋纖維を解説す。

△フリツナ Friszsche ヘルマン Harnin を抽出す。

一八四八

※佛國、二月革命。

英國、公衆衛生法を制定す。

※英、ダルホーセイを印度總督とし、印度要地に鐵道、電信を布設

す。

米國、メキシコより加州を取る。

△瑞典、ベルツェリウス J. J. Berzelius (一七七九)、醫、化學、

觸媒作用を發見す)歿す。

△シーメンス Siemens ダイナモを發明す。

△フューリントク Fehling 尿中糖検査法を見出す。

△英、ジョンソン(ヤンズ) Bence-Johnes (一八一三—一八七三)骨

軟化症、骨内腫患者の尿中よりグロブリン様蛋白を證明す。

獨、デュ・ボア・レーモン du Bois-Reymond 「動物電氣研究」

を著す。

英、ブレード Braid 催眠術 Hypnosis を始む。

佛、ヒキエト Hugier 「エスチオーム」 Eshioméne を始めて

記載す。

△カルロド Carnod 痛風患者の血液に尿酸の増多を認め、本病と尿

酸代謝の異常との關係を示唆す。

△佛、ピオリ Piory 尿毒症の命名をなす。

佛、パスツール Pasteur 酒石酸に偏光面を異にするも

のあるを發見す(ラセミ酸)。

一八四九

※獨逸憲法制定。

※英の海外活動旺盛。

佛、クロード・ベルナル Claude Bernard 動物延髓

に糖針刺を實驗す(一八五五年に完成す)。

△シェーリング Scherling 人間に熱量計測定を創む。

△フレイリッヒ Fröhlich 多發性圓脊體硬化の記載をなす。

△ポレンデル Pollender 山羊流血中に脾臓痘菌を發見す。

△獨、ベルトルド Berthold 雄鶏に於て舉丸抽出後又之を移植して

舉丸の一種の性的内分泌を想定す。

醫書の出版も漢方醫を主體とする醫學館の許可を得きしむ。

嘉永三年 庚戌 二五〇 (一八五〇)

三月、將軍蘭使を引見す、これ蘭人江戸參府の最後となる。國定忠次、歿す。

△幕府、洋書の翻譯流布を制限す、和蘭醫術を禁じ且つ醫書の刊行を嚴禁したれども間もなく之を緩む。

△江川太郎左衛門、伊豆並山に反射爐を作る。

△高野長英(蘭學醫にして海外の事情に明るく啓蒙に力む)自叙す(四七)。

△船曳草堂、「婦人病論」を出す、之アレンク氏書の譯述にして我國最初の洋式婦人科書なり。

△杉田成卿、「聽胸器用法略記」を著す。

△日野鼎哉(シーボルト門、大阪に開業)歿す(五四)。

△中川修亭(華岡、吉益の門)歿す(七八)。

△第五世、佐藤信淵(大槻盤水、宇田川玄隨に學び醫を業とするも經濟、農業等の經世策を講ず)。

嘉永四年 辛亥 二五一 (一八五一)

△春、風吹流行す。

△島津齊彬、製鍊所を鹿兒島に設く。

△佐久間象山、江戸に砲術を教ふ。

土佐の瀧民中濱萬次郎、アメリカカより送還さる。

△石坂桑龜(惠甫、シーボルトの門)歿す(六四)。

△吉雄作之丞、益川六藏(三七)歿す。

△柴田方庵(水戸侯醫)、驗温器を作る。

△淺田宗伯、「皇國名醫傳」を著す。

△中濱萬次郎、天保十二年十四歳にして漂流し、米船に救はれ彼地に連れ行かれ、十二年目に母國に歸りたるものなり、後要路の顧問となり、我國文化開發に貢献す。

△醫學博士、中濱東一郎は其息なり。

嘉永五年(閏二) 壬子 二五二 (一八五二)

△明治天皇御生誕。

△江戸城西丸災す。

△水戸徳川慶篤、「大日本史紀傳」刻成りて献す。

一八五〇

△支那に民族運動、長髮賊の亂起り洪秀全兵を擧ぐ。

△米國議會東洋への發展及び日本に開國を勸むべきことを議決す。

△英佛間に海底電線敷設。

△佛、ゲーリー・リチャード J. L. Gay-Lussac (一七七八一、生化學者

氣體の反應容積に關する定律は分子説を生む原因となる。シャール、ゲーリー・リチャードの定律の發明者)歿す。

△ストークス Stokes フラウン運動に關する式を發表す。

△ロポルデン Robourdin 有機物中のヨードを比色法にて定量す。

△トラウベ Traube 體温計の攝氏を推奨す。

△デットリヒ Dittlich 肺壞疽等の痰中デットリヒ檢子を認む。

△露、カシン Kaschin 梅毒類似の病氣(カシン・ベック氏病一

九〇九年)を記載す。

△佛、ダヴェイン Davaine (バクテリアの命名者)脾脫疽

にもバクテリアを證明す。

△佛、ブロン・セカール Brown-Sequard 交叉性麻痺を示す半身不隨を記載す。

△ヘルムホルツ Helmholtz 筋變縮描寫筒 Myographion を發明す。

一八五一

△ポルトガルに革命起る。

△獨、オーケン I. Oken (一七七九一、自然科學者)歿す。

△獨、クラウゼン Ju. Clausius 英、ロードケルマン Lord

Kelvin 熱力學第一及び第二則を樹つ。

△在支那の英醫合信(ホブソン) Hobson 中國文「全體新

論」を刊行す。

△プリーズニッツ Priesnitz (一七六〇、水治療法者)歿す。

△佛、リョゴール Lugol (一七八六、ルゴール氏ヨード液)歿す。

△ヘルムホルツ H. Helmholtz 等、檢眼鏡 Ophthalmometer を製す。

△マチーゼン Mathysen ギプス繃帯を發明す。

△トレルチョ V. Treitsch 檢耳反射鏡を案出す。

△ベルナルド Bernard 交感神經の血管運動性官能を發見す。

△佛、ミロン Milon 蛋白證明に硝酸水銀溶液を加へて赤色反應を呈するを見る。

△スタンニウス Stannius 蛙心の大靜脈貫切斷試験をなす。

△英、シモン John Simon 輸尿管の腸管内移植を行ふ。

△カゼナフ Casenave 狼瘡 Lupus を創記す。

△キョツ(ン)イヌチル Kachonmeister 蠅虫に對するサントニンの作用を初めて檢す。

△ヘルムホルツ H. Helmholtz 神經刺戟の傳導速度を測定す。

△伊、コルチ Corti 聽神に於けるコルチ氏器官を記載す。

一八五二

△英、ビルマを略す。

△獨、ロツツエ H. Lotze の「醫學的心理學」出づ。

△奧、ヘルレル Heller 尿蛋白證明法を見出す。

加賀藩の船商、錢屋五兵衛歿死す(八一)。
△帆足萬里(儒者にして又蘭學を習ひ醫術にも通ず「醫學啓蒙」等を著す)歿す(七五)。
賀川蘭臺(蘭齋の子)、典藥寮員に補せられ尋て女醫博士となる。

△長興專齋、緒方洪庵の塾に入る。
△蘭館醫、モーニツケ歸國す。
△翰林和山(宗建、シーボルトの門、我國に初めて牛痘苗を傳ふ)歿す(五一)。
△河津省庵(漢蘭折衷家、著述多く、解剖もなす)歿す(五三)。
總亭、「西洋學家譯述目錄」を刊行す。
伊古田純道(秩父大宮の蘭醫)、産婦二人に帝王切開を行ふ。

廣瀬元恭、「理學提要」を譯す。
△花野井有年、「醫方正傳」を著す。
嘉永六年 癸丑 二五三三(一八五三)
※米國水師提督、ペリー Perry 軍艦を率ひ浦賀に来る。
將軍家慶應す、家定將軍となる。
※露國水師提督、軍艦を率ひ長崎に来る。
露兵、唐太久春古丹に上陸し占領を企つ。
幕府、筒井政重、川路聖謨をして長崎に於て露使と應接せしむ。
國內、國防を嚴にす。
國防の急なる時、大槻俊齋の「銃創瑣言」なる洋方外科書必要なるを以て江川太郎左衛門幕府要路を説得して出

英、ワルラー Waller 神經傳導と變性に關する定則を發表す。
△佛、コルヴィサ Corvisart 「タタニー」を創記す。
△獨、エステルレン Fr. Oesterlen 「醫科論理學」を著す。
△バスクロウ Baskraun 性病二元論を唱ふ。

一八五三
※露土戰爭(クリミア戰爭)。
佛、ニウカレドニアを略す。
△獨、グメリン I. Gmelin (一七八八、生理化學)歿す。
△佛、アラワーツ Pravaz (一七九一、注射器を發明す)歿す。
△米、ホルナー W. Horner (一七九三、解剖)歿す。
△英國、種痘を強制施行す。
獨、ミュンヘン大學に初めて衛生學講座設けらる(教授ペッタンコーフェル Pettenkofer)。

版せしむ。茲に又洋方醫の漢方醫による壓迫緩和さる。
△戸塚柳齋(華岡青洲の門)歿す(六六)。
△中環(天壽)(大阪、蘭醫、緒方洪庵の師)歿す(五三)。
蘭醫、村上英俊、佛英蘭の「三語便覽」を著す。

△國芳の版畫、「雜病療治」は時局風示の廉にて發賣禁止となる。
安政元年(十一月改元、開七) 甲寅 二五一四(一八五四)
※神奈川條約、ペリー、米艦六隻を率ひて再び來朝、神奈川沖に投錨、遂に和親條約に調印、下田、函館の二港を開く。
吉田寅次郎(松陰)、夜陰漁舟に乗り米艦に至り俱に航せんことを請ひ、事發覺して縛に就く。佐久間象山之に連坐して下獄す。
※七月、幕府日章旗を日本惣船印と定む。
日露和親條約又成立し、下田、函館、長崎の三港を開く。
福澤諭吉、長崎に遊學、和蘭學を習ふ。
江川太郎左衛門、品川臺場を作る。
加賀藩、壯翁館を建て西洋學を教ふ。
畫家、椿 椿山歿す。

新宮涼庭(和蘭醫方の大家、蘭館醫師ともなる、門人多し「神經疫論」、「腐敗疫論」、「窮理外科則」、「解體則」等著す)歿す(六八)。

英、ウッド Wood 套管針を用ひてモルヒネ水溶液の皮下注射を創む。
ガルハルト Gerhard アセチルサリチル酸を作る。
ツワンク Zwanck ヤマサルを案出す。
漢、タイヒマン Teichmann ヘミン結品を作る。
ファイルオルト Vierrordt 脈波計を案出す。
△デソモー Desormeaux 尿道鏡を發明す。

英國ウイクトリア皇后、クロロホルム麻酔にてレオポルト皇子を分娩さる、其科學理解は世に衝動を與へたり。
一八五四
※クリミア戰爭(一八五六)、英のナイチンゲール Nightingale 傷病者救護に盡瘁し後の「赤十字社」設置の發端となる。
獨、シュルリッング Schelling (一七五五、自然哲學說)歿す。
西班牙、歌謡師ガルシア Garcia (ロンドンに於て)日光による喉頭(直照)鏡を案出し聲帯の運動を検す。
獨、ブレイメル Brechner 結核にサナトリウム療法を提唱す。

△ドレスレル Dressler 寒冷による間歇性血色素尿症を認む。後にリヒトハイム Lichtheim (一八七八)寒冷血色素尿症と命名す。
プリンクスハイム Pringsheim 植物細胞膜の水溶液に對する半透膜なるを見出す。
△獨、クレイデ Crede 分娩子宮に對するクレイデ氏處置を提唱す。

土生玄碩（和蘭眼科醫）歿す（八七）。
堀内素堂（同、小兒科）歿す（五四）。
原老柳（當時高良齋、齋藤方策、緒方洪庵と大阪に對峙す）歿す（七二）。

安政二年 乙卯 二五二五（一八五五）

講武所を設け洋式訓練を奨励す。

翻譯局、天文臺より分離して九段下に移る。

梵鐘を大小砲に改鑄す。

※和蘭より汽船を贈る、後觀光丸と名づく。

島津齊彬、昌平丸を幕府に獻す。

英使、長崎に来る。

江戸、大地震（十月二日）藤田東湖歿す（五〇）。

江川太郎左衛門（砲術家）歿す（五五）。

陶工、高橋道八歿す。

今年、勝安房（海舟）の手記したる蘭學者五十八名あり。

△福澤諭吉、大阪精方洪庵塾に入る。

千葉周作（醫の傍ら、擊劍を教ふ）歿す（六三）。

備、廣瀬淡窓歿す（七四）。

飯沼慾齋（蘭醫）、リンネの綱目規則に従ひ分類したる

「草木圖説」二十卷を著す。

△ストレッケル Strecker キーネの化學式を定む。

△ウイルヒョー Virchow 神經グリアを發見す。

一八五五

露帝、ニコラス一世歿す。

△佛、マチアンディー F. Magendie（一七八三—、實驗生理學）歿す。

△佛、ワレー Fr. Valleix（一八〇七—、神經痛同氏壓痛點）歿す。

獨、ガイスレル Gieseler 水銀空氣ポンプを作る。

獨のウイルヒョウ Virchow「凡ての細胞は細胞より生ず」と細胞病理學を提唱す。

△英、アヂソン Thomas Addison アヂソン氏病を記載す。

佛、クロード・ベルナル Cl. Bernard 糖原を發見す。

グリコゲンより糖の生成されるを發見し、迷走神經は肝臓に於ける分泌神經にして糖生成神經なるを發見す。又

内分泌説の先覺をなす。又糖針刺 Zuckerstich, Pigment

の現象を發見す。

ペフテンコーフ Pectenker 地下水説を唱ふ。

グレイフ Græfe 緑内障に於ける眼球内壓の増進を認む。

△ゲルラッハ Gerlach 組織染色法を創む。

リンネ Linne 音叉を以てするリンネ氏試驗法を公表す。

△佛、バザン Bazin 硬性性紅斑を記載す。

一八五六

※英支開戦、英國廣東を攻む。

佛支又隙を生ず。

△支那最初の外國留學學生、黃寬英國より歸國す。

獨、ハイネ Heinrich Heine（抒情詩人）歿す。

伊、アウオガドロ A. Avogadro（自然科學者、同温同壓に於ては同體積の氣體は同数の分子を含むことを發見す）歿す。

△ボウグラン Beaugrand 二硫化炭素中毒を報ず。

グレイフ Græfe 不治の難病とされたる緑内障に手術

的効果を擧ぐ。

△佛、ビナー Biot 乳糖尿を記載す。

英、レン Wren 動物に藥物の靜脈内注射を行ふ。

△佛、クロード・ベルナル Claude Bernard 膠液の消化作用を

闡明す（脂肪を乳化しグリセリンと脂肪酸に分解し、澱粉を砂糖

に分解し胃に於て溶解せざりし蛋白を消化す）。

△佛、シャルコー Charcot 筋萎縮脊髄側索硬化症を記述す。

ウエルケル H. Wulker ミクロトームを發明す。

レマーケ Remak 平流通電法を始む。

△ベルナル Ol. Bernard 膠液の細胞を記載す。

シマワン Schwann 酵母の植物屬なるを提唱す。

一八五七

※英佛聯合して支那と戦ひ、廣東を焼き總督を擒とす。

△英醫、ホブソン Hobson 支那上海に山東路醫院長となる。

英軍、波斯と戦ひ、英領印度の土兵反亂す。

安政三年 丙辰 二五一六（一八五六）

幕府、洋書所を「蕃書調所」と改稱し（九段坂下）、杉田成卿、其

作阮甫、川本幸民等教授職となる、又「講武所」を設け武技を習

はしむ。

吉田松陰、松下村塾を開き山鹿素行者「武教小學」を講ず。

長崎に於て蘭國製活版にて蘭書を印刷す。

米國總領事ハリス著任し、下田に領事館を置く（唐人お吉物語）。

二宮尊徳（七一）、國學者足代弘訓（七三）、畫人山本梅逸歿す。

清宮秀堅、「新撰年表」（箕作逢谷聞、藤田東湖叙、和漢洋年表）

刊行さる。

花井健吉、「西算速知」を著す、我國最初の西洋數學書とす。

廣瀬元恭、イペイ Key の生理學を譯述して「知正論」

を著す。

小野寺將順、「濟生一方」（ベスト書）を譯述す。

越前大野藩に蘭學館建ち、伊藤慎藏（緒方洪庵の門人）講師とな

る。

安政四年（四五） 丁巳 二五二七（一八五七）

蕃書調所、業を開く。

幕府、火藥座を設く。

閏五月、箱館通寶を鑄造す。

露使再び來朝、米國領事ハリス熱病に罹る、蘭醫石川良信よくこれを治す。

徳川幕府が和蘭に注文せる軍艦日本丸(後の成陽丸)、和蘭海軍士官等長崎に廻航す。

五月、和蘭三等軍醫ボンベ・ファン・メールデルフォールト Pompe van Meerdervoort 來朝(或は安政三年八月とも記さる)長崎海軍傳習所に教官となり醫學、理學を教授す(文久元年九月二十九日迄)。

※將軍、ハリスを引見し公使江戸駐在を許可す、又江戸、大阪、兵庫、新潟を追加開港す。

林大學等をして外交顧問を朝廷に奏上せしむ。寛永六年以來施行せる踏繪の法を廢す。

八月、蘭學醫大槻俊齋、伊東玄朴等江戸に種痘館公設を計劃す。

本間齋軒(漢蘭折衷外科醫)、脱疽に對し下腿截斷を行ふ(我國外科醫にして肢切斷を行ひし嚆矢)。

青木周弼、ゾーフエランド書の譯述「察病龜鑑」刊行さる。

△島村廉、「生理發蒙」を著す。

△村上英俊(宇田川裕庵門、蘭醫)、「佛蘭西詞林」を編す。

△廣瀬元恭、「西醫脈論」三巻を出す。

△賀來佐一郎(島原侯侍醫、蘭學醫)歿す(五九)。

△吉益北洲(南涯養子)歿す(七二)。

△多紀元堅(安叔、法印、醫學館教授、古醫方)歿す(六三)。

△名古屋にて尾張藩醫石黒濟庵、刑屍を解剖す。

安政五年 戊午 二五一八(一八五八)

條約の調印に不可を切論するもの多し。

※將軍家定、脚氣にて薨す、紀伊、慶福之を嗣ぎ後家茂と改名す。

※安政大獄、幕府齊昭に急度愾を、徳川慶勝、松平慶永に隠居急度愾を慶喜に登城を停む。

※米、露、英、佛、蘭と通商條約に調印す。

※長崎出島、和蘭商館廢止となる。

幕府、外國奉行を置く。

外國奉行、水野忠度を米國に遣はす。

△虎狼病(コレラ)流行す。

島津齊彬、梁川孟緯(星巖)、國學者鹿持雅澄歿す。

△福澤諭吉、奥平侯の召により江戸に上る。

・浮世繪師、歌川廣重(六二)、山東京傳逝く。

僧、月照、入水して寂す。

正月、幕府の許可により神田元誓願寺前、川路聖謨の拜領地を借り、市内八十二名の蘭醫の酬金により「種痘所」(御玉が池種痘所)設立さる、留守居役(勤務)池田多仲之に當る、十二月類焼す。

將軍家定病み、竹田玄同、伊東玄朴、戸塚靜海の蘭醫侍醫となる、幕府の西洋内科醫方を採り入れたるはじめてす。

松本良順幕府の命により長崎に至りボンベに醫術を習

佛、コント Conte (一七九八、實證論者)歿す。

△英、ホール Hall (一七九〇、反射機能の研究家)歿す。

△澳、チャルク Charck 喉頭鏡を新案す。

佛、パスツール Pasteur 乳酸酸酵及び酒精酸酵を見出す。又酸酵は微生物の發生に起因すと確證す。

デュメニール Du Meunil 進行性延髄麻痺を記す。

ブラウエル Brauerl 人血中より脾脱疽菌を證明す。

△獨、アウベルト Albert 視野計を發明す。

△ベッテルス Wilhelm Pettersz 糖尿病のアセトン尿を發見す。

一八五八

※全印度、英王の直轄地となる。

※愛媛條約(露支間)、露國黒龍江以北の地を取る。

※支那、英、佛、米と和す。英佛聯合軍白河を陥れ天津に迫り天津條約を結ぶ。

英國議會、醫事法を制定す。

△和蘭醫ボンベ・ファン・メールデルフォルト Pompe van Meerdervoort (日本に來朝したる)脚氣論を書く。

△英、トラヴァース B. Travers (外科、眼科)歿す。

獨、ミナルレル Johannes Müller (一八〇一、生理、解剖學に貢獻す)歿す。

英、ブラウン R. Brown (一七七三、醫にして理學に精し、分子運動)歿す。

英、ブライト Richard Bright (一七八九、ブライト

氏病の發見者)歿す。

獨、フレイリックス von Freixha 蛋白分解産物たるア

ンモニアと尿素は肝臓作用により無害の尿素に變化すと

唱ふ。

△佛、ランドリー Landry ランドリー氏麻痺(急性上行性麻痺)

を記載す。

△スタンニウス Stannius 蛙心に於て靜脈竇と房との境界を結

葉或は切斷し、又房と室との境界を處置し其收縮關係(スタンニ

本間晝軒、膀胱結石を切開により摘出す、我國に於ける
同手術の最初とす。

- △柳川春三(二三、蘭醫)、紀伊侯に採用さる。
- △大阪にて種痘を官許す。
- △三宅春節(廣島、牛痘種法に貢獻す)歿す(四六)。
- △村田誠齋(吉益門、侍醫、法橋)歿す(六四)。
- △澁江抽齋(儒醫、伊澤蘭軒の門)歿す(五四)。
- △安政四年及び五年、函館奉行は醫師を雇ひ蝦夷「アイヌ」に種痘を強制す。

西洋醫學の輸入(第三期)

徳川幕府、歐米諸國と通商條約の假調印をなし、開港を敢行するに及びて是等諸國の文化輸入され、在來鎖國政策の下に和蘭一ヶ國を通じて我國に入り來りし西洋學は、開國と共に當時新興の列強諸國より傳播するに至りたり、爲めに我國洋方醫學にも多彩、雜然たるものあらしめたり。

安政六年 己未 二五九(一八五九)

幕府、時局に省み慶喜、齊昭に謹慎警居を命じ、又落飾、謹慎、隠居差控、免職差控處刑されたるもの多し。

英、米、佛、蘭に神奈川(横濱)、長崎、函館を開港す。
橋本左内(二六、蘭學及び醫學を修む)、頼三樹三郎(三四)、吉田松陰(三〇)處刑さる。

江戸城本丸災上。

佐藤一齋、三條實萬、畫人浮田一惠歿す。

英總領事オールコック(一文久二年二月)、佛公使デ・ベルタール(一文治元年三月)、蘭總領事デ・ウィット(一文久三年六月)著任す。

△ボン Hepburn (米人醫師、四四)、宣教師として來朝す。

シーボルト、日本に再び渡來す。

蘭人、フルベッキ Guido Fridolin Verbeek 長崎に來る、米、シモンズ Simmons 宣教師として横濱に來り病院を設く、日本小兒の爲めに「蟲下し藥」を作り氏の名を附してセメンエンと稱したり。世人「セメン先生」と呼ぶ。

△幕府醫員、鹽田順庵(漢方)函館に醫學校、病院を起す。

△前田利保(富山藩主、國學者にして、本草學は宇田川榕菴に就て學び「本草通串」九十四卷等三十餘種の著述あり)歿す。

△館玄龍(華岡青洲の門、著述あり)歿す(六五)。

△澁江抽齋(儒醫、伊澤蘭軒の門)歿す(五四)。

△山本亡羊(本草家、小野蘭山の門)歿す(八二)。

△昨田翠山(本草家)歿す(六八)。

△藤波立憲(吉益、賀川、華岡に學ぶ、著書多し)歿す(六九)。

△杉田成卿(立卿の子、幕府譯員)歿す(四三)。

ウス試験)を檢したり。

ツェルマーク Czermak 人工燈を用ひて喉頭鏡法を一新す。又後鼻鏡検査を初めて行ふ。

△ウイルヒョウ Virchow 細胞病理學を提唱す。

△アンネ Bonchut 喉頭挿管法を案出す。

△フエリックス Ferlichs 臨狀上より急性黄色肝萎縮を記載す。

△ハール Haar 腎臟囊腫を記載す。

△ゲルラツハ Gerlach カルミン染色により、中樞神經を微細檢出す。

佛、ツシキエヌ Duchenne 脊髄癆 Ataxic locomotrice progressive を創記す。

△ヴレタス Veretas 黒水熱とキニーネの關係を初めて唱ふ。

△佛、トルソー Troussseau 血液變化を伴はざる全身淋巴腺腫脹を示す Bonhill 病を記載す。

△ツェンケル Zenker 腸管に於ける副脾の異局的組織を發見す。

一八五九
英、ダーウイン Darwin の進化論「種の起原」Origin of species 著は No.

獨、キルヒホッフ R. Kirchhoff プンセンと共に分光器を作る。

獨、マルクス Marx の「經濟學批判」出づ。

獨、フムボルト Alex. von Humboldt (一七六九)歿す。

ブリューゲル Brugge 平流電氣にて筋肉を間接に刺戟する時、筋攣縮に一定の法式あるを發見せり。

△ベデカー Boedeker アルカプトン尿症を發見す。

△ホッペザイレレル Hoppe-Seyler パウルベルト Paul Bert 潜病の本體を説明す。

△佛、リヒエ Richeat 揮發によるエーテル皮膚麻酔を創む。

メルレル Müller 今日云ふ小兒壞血病を記載す。

△佛、パストール Pasteur 病的尿中よりトルラー菌を證す。

百朋 Pompe 長崎に於て解屍す。
三宅良齋、英醫合信 Holson の「婦嬰新説」、「内科新説」(上海刊本)を翻刻す。

△新宮涼亭、「人身分離則」を著はす。

萬延元年(三月改元、閏) 庚申 二五三〇(一八六〇)

※條約批准交換の爲め新見登前守正興の一行、米艦ボーハタンに乗り遣外使節として渡米す。軍艦奉行木村芥舟、船將勝安房、軍艦成臨丸に乘込み之に隨行す、福澤諭吉等又之に加はる、一行九十六名。

※櫻田門外の變、水戸の浪士等井伊直弼(四六)を櫻田門外にて刺す。

將軍家茂、皇妹和宮を迎ふるを公布す。

浪士、米國通譯官ヒューズケンを三田に斬る。

葡國、普國と條約調印す。

普魯西國使、電信機を献上す、市川齋宮、加藤弘藏(弘之)之が傳習を受け獨逸語を學ぶ。

原坦山、「心識論」を著はす。

△福澤諭吉、歸朝し(大阪の緒方洪庵に蘭學を學び安政五年江戸鐵砲洲に講學、翌年米國に遊學)「華英通語」を譯述す。

△七月、幕府下に令し幼兒に種痘を命ず。

△幕府、蘭人醫朋百(ボンベ)を長崎より招致す。

△蘭學醫、青木周彌(周防藩校好生館に教ふ)歿す(五六)。

△安積良齋歿す。

「種痘所」、下谷藤堂侯上屋敷隣に新築移轉す、後官營と

なり大規模修葺其長となる。

△佐久間象山、瓦爾華尼衝動機と稱する電氣治療器を製作す。

△伊東實齋、「眼科新編」を譯述す。

△丹波康賴、「醫心方」三十卷官板成る。

△長崎の稻佐に露西亞人休息所設けられ、當地の遊女に陰門開觀と稱して性病の検査を行ふ。

△米、イーストレーキ W. C. Farlake (商科醫)渡來す。

△福井藩、キョウストレーキ(男子の紙型人體模型)長崎より購入す、船載三個の一、價格八百圓。

文久元年(二月改元) 辛酉 二五三一(一八六二)

※五月、幕府獨人シーボルトを江戸に召し外國事務顧問とす。

※國內に公式合體、航海遠略の議起る。

水戸藩、武田耕雲齋等を罰す。

英艦、對島より露艦を逐ふ。

十一月、和宮將軍家に御降嫁。

十二月、遣歐使節竹内保徳等英艦に乗り横濱を發す、其作秋坪、福澤諭吉、福地源一郎等約四十人隨行す。

繪師、歌川國芳歿す。(六五)

△伊藤圭介、藩書調所物産局の教授となる。

和蘭一等軍醫、ボードイン Bauduin 招聘されて長崎精

一八六〇

※英佛軍、北京を占領す。

※露國、北京條約にてウスリー以東の地を獲得し、烏蘇里條約により東亞海岸に出づ。

※リンカーン、米大統領となる。

ルノア Lenoir 工業的内燃汽機を發明す。

△英、教會醫ロツカールト Lookart 北京に病院を建つ。協和醫學校の基をなす。

キルヒホフ Kirchoff、ベンゼン Bunsen 分光器により元素を検出す。

英、ブレイト J. Braid (一七九五、催眠術施行者)歿す。

英、スチュアート・ミル Stuart Mill 「代議政體論」を著はす。

獨、シュウベンハウエル Schopenhauer (一七八八、哲學者)歿す。

英、アチソン Th. Addison (一七九三、同氏病を記載す)歿す。

△ツェンケル Zenker トリヒネ症を記載す。

ウエーラー Wöhler の「ニド(Niemann, Rosen)ノカ葉よりコカインを抽出す。

△モーレル Morel 早發性痴呆症を命名す。

ルメール Lemaire 石炭酸の醱酵制止作用を認む。

△ブシヤンヌ Duchenne 進行性延髄球麻痺を記載す。

△ブトレロウ A. Butlerow ウロトロピンを發明す。

フエヒネル Gustav Fechner 「Psychophysik」を著はし物と心の關係を論ず。

ペリー Heinrich de Bary' マルン * Max Schultze

原形質を動物物の生命の有形的基礎と認む。以後動物細胞の内容物にも Mohl 氏の云ふ植物細胞分容物プロトプラズマ(原形質)の名稱を適用するに至る。

△ゼメレデル Semleder 食道鏡を考案す。

△獨、ブ・ボア・ヤーゲン Du Bois Reymond 偏頭痛に對する血管攣縮説をなす。

ダヴン Davaine トリコモナス・ホミニスを記載す。

一八六一

※米國、南北戦争。(一八六五)

※伊太利王國の建設成る。

英支、長江通商章程を定む。

露帝、農奴解放を布告す。

スチヤアート・ミル Stuart Mill 「功利主義論」を出す。

△佛、アラン Arnan (一八一六、神經學に精し)歿す。

佛、ブローカ Broca 大腦皮質に言語中樞を發見す。

△英、リットル Little リットル氏病を記載す。

トーマス・グラハム Thomas Graham 膠質溶液に關する研究を發表し始む。

得館の教師となる。

種痘所「西洋醫學所」と改稱され、教育、解剖、種痘の三科に分ち講習す。頭取大槻俊齋、事務淺野伊賀守等、教授に伊東玄朴(樸)、伊東貫齋、戸塚靜海、竹内玄同、林洞海、桂川甫周、松本良甫、吉田收庵等。伊東玄朴、右足切斷術にクロロホルム麻酔を我國に於て初めて應用す。又國內にて洋藥の製造をなすを建言す。杉田成卿「濟生三方」を著はす、之はフリーフェランド經驗遺訓中の一部の譯述にして刺絡、吐劑、阿片の三方を採りたるもの。函館に醫學所建つ。

英、ウィリス William Willis (一八三七—一九四) 英國公使館附醫員として來朝す。

△江馬細香(蘭醫、蘭齋の女、詩畫を善くす)歿す(七五)。

世相 一 班(寫眞術の傳來)

天保十年(一八三九)佛、ダゲール、寫眞術を發明。天保十二年(一八四一)長崎、上野俊之丞、寫眞器を島津齊興に獻す。

文久元年(一八六一)下岡蓮杖、横濱に寫眞業を始む。文久二年(一八六二)上野彦馬、長崎に寫眞業を始む。

文久二年(一八六二)壬戌 二五三三(一八六二)

※尊王攘夷の論旺にして國內騷擾す。坂下門の變、老中安藤信正傷つく。

幕書訓所を一橋門外に移し「洋書訓所」と改稱す。堀達之助等「英和對譯袖珍辭書」(洋書訓所刊行)出づ。

洋書訓所、官板「バタバヤ新聞」を出す。將軍家茂、再度政治改革を令す。

生麥の變、島津の從士英人を殺傷す。諸侯の參觀交替を強め其妻女を國に就かしむ。

※遣歐使節、竹内下野守一行英艦「オーチン」號にて年首出發す。和蘭へ留學生として幕臣、西岡、榎本釜次郎長崎より出帆す。

伊東玄伯(方成)、林研海(紀)又和蘭に留學す。米國公使、アリョイン著任(慶應元年二月迄)。

英國代理公使、ニール著任(元治元年正月迄)。

△米人、ヘボン Hepburn 横濱に施療院を設く。シーボルト歸國す。

大槻俊齋(五七)、二宮敬作(五九)歿す。

緒方洪庵(大阪)、奥醫師に登用され西洋醫學所頭取となり、取締役伊東玄朴と協力す。

箕作阮甫(漢醫方より轉じ宇田川榛齋に西洋醫方を學ぶ)辭を幕籍に列す、洋學を以て幕醫となる者實に阮甫を以て始めとす(「外科必讀」「産科簡明」等著はす)。

△川本幸民、續いて幕籍に列せらる。△第三次「コレラ」流行し、洋書訓所より西説をとり「疫毒豫防説」を刊布す。

△緒方郁藏、「瘵疫新法」を譯述す。△司馬凌海、ボンベ所説中七種の新藥を論述したる「七新

△佛、メニエール Ménière メニエール氏病(一症候群)を記載す。△獨、フリードライヒ Friedrich 春體性遺傳性運動失調フリードライヒ氏病を記載す。

洪、ゼンメルワイス Semmelweis (一八一八—一八六九)「産褥熱の原因、定義並に豫防」を著はし傳染性腐敗説を唱ふ。

獨、ベッテンコーフェル Pettenkofer 衛生學を樹つ。△シユチャード Schuchard アニリンの解熱作用を認む。

△蘭、ワン・デーン van Deen 血液證明のグアヤク試験を發見す。

△シムルツ Schultze 細胞原形質の本質を明かにす。

一八六二 ※サイゴン條約、佛國、安南、交趾支那南部を得。清國、穆宗皇帝、同治元年となる。

英、スペンサー Herbert Spencer の「第一原理」出づ。露、トルストイ Tolstoi 「戦争と平和」を起稿す。

△佛、メニエール Ménière (一七九九—、耳鼻科)歿す。△英、プロヂイ O. Brodie (一七八三—、外科)歿す。

△獨、ビルハルツ Bilharz (寄生蟲學者、カイロに居住)歿す。佛、ネラトン Nélaton 彈性カテーテルを作る。

△佛、レイノー Reynaud 肢端對稱瘰癧を記載す(三二才の時)。

△獨、海軍々醫フリデル Fridel 日本脚氣を記述す。蘭、スネル Snellen 視力表を作る。

△佛、パスワール Pasteur 酸酵作用と傳染病とを検索す。△ストレフケル Strecker 膽汁中にヒヨリンを發見す。

△ウイエルヒョウ Virchow 原發性胸腺癌を記載す。△アウエルバッハ Auerbach 腸壁内同氏神經叢を發見す。

△ハンレー Henle 腎細尿管の同氏保胎を記載す。△獨、メーレンスブルング von Bärensprung 帶狀痲痺行疹を記す。

薬」を著はす。

上野彦馬、「合密局必携」を出す。

文久三年 癸亥 二五三三(一八六三)

※長州藩、下關通航の米船、蘭艦を砲撃す。

英艦七隻、鹿兒島を砲撃す。

八月、幕府洋書調所を「開成所」と改稱す。

池田筑後守長發章一行歐洲に發す。三宅秀等隨行す。

※瑞西と通商條約を結ぶ。

蘭國總領事、フアンボルヌブルーク著任(明治元年七月迄)。

文久通寶を鑄る。

會澤正志齋歿す。

書籍「化學入門」支那より到來す、これより化學なる漢字世に行はる。化學の字は川本幸民によりて用ひられたりとも稱さるも、和蘭語セイミ含密の語在來用ひられたり。

緒方洪庵「病學通論」、「扶氏經驗遺訓」、「虎狼利治準」等の著者(歿す(五四))。

西洋醫學所は單に「醫學所」と改稱され、松本良順頭取に、伊東貫齋取締となり新に醫科七科を定め、講學機構を一新せり。

△箕作阮甫(蘭醫)歿す(六五)。

△鳩野宗巴(七代)(華岡流外科、熊本に住す)歿す(四九)。

△青木周弼(蘭醫、長州藩醫)歿す(六一)。

元治元年(二月改元) 甲子 二五二四(一八六四)

將軍家茂、正月入京、五月江戸に歸着す。

藤田小四郎、筑波山に擧兵。

※英佛米蘭の聯合艦隊十七隻下關を砲撃す。

※幕府、長州征伐の布令を發す。

英國公使オールコック歸任、ウインチェスター代理公使となる(慶應元年五月迄)。

佛國公使ロッシュ著任(明治元年四月迄)。

※佐久間象山、京都にて遭害す(五四)。

鹿兒島藩より英米に留學生十六人を派遣す。

。横濱に新聞紙(月二回)發刊するも後廢刊す(岸田吟香氏)。

繪師、三世歌川豊國歿す(七九)。

△水原三折(初めて探領器を作り我國初めての完備産科書「産育全書」を著はす)歿す(八三)。

△賀川蘭臺(女醫博士、父蘭齋の作る探領器の分産後痕を殘す度あるを以て、龜頭胡を發明す)歿す(六九)。

本間棗軒(漢蘭醫)、「内科秘録」を著はす。

△蘭醫、村上英俊、「佛語明要」を著はす。

松本良順、山内豊城、「養生法」(衛生學)を著はす。

一八六三

清國、李鴻章の奏議により上海に同文館を設立し外國語を學ばしむ。

※リンカーン Lincoln 奴隸廢止令を布告す。

△獨、ダイテルス K. Daters (一八三四)、解剖學者、ダイテルス氏核發見)歿す。

△獨、ゴルトツ E. Golts 「迷走神經と心臟」なる論文を發表し蛙に於て「打叩試験」により心搏の緩徐靜止を見たり。

△佛、ダヴェーン Davaine 脾脫疽菌を發見す。

澳、ポリツェル Politzer ゴム球を以て耳内送氣法を行ふ。

佛、ブロン・セカール Brown Sequard 脊髓半側損傷の麻痺症狀を記述す。

△デマルガイ Demargny 巴里にて陰囊水腫液中にフィラリア仔蟲を發見す。

△カバレ Cavaud 周期性運動麻痺の症狀を記載す。

△獨、ライデン Leyden 脊體癆の主要病變を後素に認む。

△佛、ネラトト Nèlaton 神經結合を行ふ。

△ベシアンア Bechamp 砒素製劑アトキシル Atoxyl を製す。

△セツチエノー Seitschenow 反射運動に對する大關制止中樞の存在を證明す。

△獨、ダイテルス Daiters 神經細胞の軸索突起の他に原形質突起のあるを發見す。

△蘭、ドンデルス Donders 眼内壓測定器 Ophthalmotonometer を發明す。

一八六四

※清露、伊犁境界を定む。

朝鮮、崔成愚歿す。

歐洲十六ヶ國代表國際協議會より赤十字社結成され、白地に赤十字を描きたる徽號定まる。

英國藥局方、始めて成る。

伯林臨牀週報、發刊さる。

△獨、シェライデン Schleidén (一八〇四、細胞の概念を明かにす)歿す。

△獨、シェーライン Schönlein (一七九三、紫斑病、頭癩等に名を残す)歿す。

白、チリー Thirty 動物の腸汁採取のチリー氏瘻管造成を發明す。

△佛、ラセギュ Lagoue 坐骨神經痛に於ける神經伸張痛を記載す。

△ワックスマート Wachsmuth 球麻痺 Bulbäraparalyse なる名稱を用ふ。

△ヨブスト Jobst、ハッセ Hesse プロカリンを發見す。

洪、ゼンメルワイス Semmelweis 消毒外科を唱ふ。

△獨、ウイルヒョウ Virchow 加答兒性黃疸を記載す。

△アイスマベルグ Eisberg 喉頭内手術を行ふ。

元治二年、慶應元年(四月改元) 乙丑 二五二五(一八六五)

※正月、長州藩士高杉晋作等舉兵。

二月、武田耕雲齋等斬に處せらる。

五月、十四代將軍家茂江戸を發し征長の途に上る。

五月、英國公使パークス Parkes 著任(明治十六年迄)。

九月、各國公使大阪灣に廻航し條約の勅許を強請す。

柴田日向守一行、特命理事官として海外に派遣さる。

廣川晴軒、「三元素略説」を出し温、光、越曆(熱、光、電)の根源一なるを唱ふ。

緒方惟準、幕命により和蘭に留學し醫學を修む(明治元年歸朝)。

西 周、歐洲より歸朝し開成所教授となる。

京都の蘭學醫(新宮涼閣、同涼民、柏原學介、明石博高等)醫學研究會を創設す。

長崎の養成所(安政四年幕醫松本良順所長となりボンペは教頭たり)精得館と改稱さる。

蘭人、マンスフェルド Mansveld 幕府の招聘により來朝、ポードイン Bauduin の後を繼ぎ長崎精得館の教師となる(後熊不、京都、大阪に轉す)。

淺田宗伯(古醫方)、佛蘭西公使の病を治す。

飯沼慾齋(小野蘭山に本草學を、宇田川棧齋に蘭方醫術を學ぶ、リンネの綱目に倣つて「草木圖説」を著はす)歿す(八四)。

ハレー Halley クロホルム・エーテル混合麻酔を始む。

一八六五

※米大統領、リンカーン Abraham Lincoln 暗殺さる。

英、スターリング H. Stirling の「ケーゲルの秘密」。

獨、フィッシャー Vischer の「知識學」著はる。

△臺灣に教醫 L. Maxwell 厦門より渡來し洋醫の診療初めて行はる。

△支那、咸豐六年、黃寬、英國に醫學を修め歸國し西洋醫學を傳ふ。

△佛、グラチオレー P. Gratiot (一八一五)、解剖學者、グ氏視神経放射を發見)歿す。

△佛、マルグーニエ F. Maguigne (一八〇六、外科、歴史に精し)歿す。

△洪、ゼンメルワイス Phil. Semmelweis (一八一八、産褥熱の原因を闡明す)歿す。

獨、ケクレー August Kekule ベンチン輪説を唱ふ。

獨、メンデル Gregor Mendel 遺傳法則を發表す。

△蘭、ポードイン Bauduin (キャンズ氏後任として來朝したる)日本脚氣を記述す。

英、リストナー J. Lister 石炭酸を創傷防癩療法 Antisepsis に用ゆ。

△佛、シャルコー Charcot 筋萎縮性脊髄側索硬化症を精記す。

△佛、ウイلمان Villemin 動物に結核を接種す(眞珠病)。

△獨、ゲルハルト G. Gerhardt 尿中アセチル酪酸の證明に鹽化鐵液を加ふ。

△キューネ Kuhne 赤血球よりヘモグロビンを結晶として分離す。

△花野井有年(蘭漢醫方より和醫方に轉す)歿す(六七)。

△佐藤舜海、「外科醫法」を譯述す。

世 相 一 斑

江戸、雄子橋内に幕府直營の牧場設けられ牛乳を搾取す。

慶應二年 丙寅 二五二六(一八六六)

※孝明天皇、崩御遊ばさる。

將軍家茂薨す(脚氣病に)。

※徳川慶喜、將軍宣下。

遺露使節、小出大和守一行出發す。

幕府、自由交易海外留學生を許す。

高島秋帆歿す(六九)。

藤井竹外(詩人)歿す(七〇)。

榎本釜次郎(武揚)、赤松大三郎(則良)新造の軍艦開闢丸にて和蘭より歸朝す。

開成所より中村敬輔、其作奎吾、菊池大蔵、林董三郎、外山捨八等十四名英國に留學を命ぜらる。

佛蘭西博覽會に我國より出品し徳川昭武使節として派遣され、其作貞一郎、名村泰蔵、邊澤榮一、高松凌雲等隨行す。

諸藩より海外に留學するもの輩出す。

京師、玄々堂保居長男、松田楳山考正銅鑄「和漢年表」刊行さる。

「英語階梯」開成所より出版さる。

福澤諭吉「西洋事情」を著はす。

△長興專齋、大村藩より長崎に留學せしめらる。

△佛人、サバチエ Sabatier 横須賀製鐵所醫官として來朝。

英、ガルトン Francis Galton 優生學を創唱す。

△獨、ベンレー Henle 副腎髓質にタロム親和物質を發見す。

△佛、クロード・ベルナル Claude Bernard 「實驗醫學序説」出版さる。

一八六六

※普魯戰役始まる。

佛の作家ロマン・ロラン Romain Rolland 生まる。

瑞典、ノーベル Nobel 爆薬を發明す。

支那の孫文生まる。

カシヨン著「佛英和の辭書」(巴里版)出づ。

※歐米間の電信開通す。

△マンソン P. Manson 臺灣高雄にて診療に従ふ。

シーボルト Siebold ミヤンヘンにて歿す(七一歳、一七九六—一八六六、氏の學系を引ける日本學者に高野長英、小関三英、伊藤圭介等あり)。

△英、ホッキン Th. Hodgkin (一七九八、同氏病)歿す。

エール Carl Ehle 最高寒暖計を考案す。

△ルドウイヒ Ludwig シオン Gyon は家兎に於て初めて心臓制止神經を發見せり。

△英、ラングトン・ダウ Langton-Down モンゴリスムス(蒙古人型白癡)を記載す(本病は蒙古人種と何等關係なし甲狀腺其他の關係未知のもの)。

△露、カール Karell カール氏(鐵鎖)療法を心臓病者に始む。

△秋田藩醫學校に洋學を置き佐藤貞壽(信濃再甥)教頭となる。
 △坪井信良、「新藥百品考」を譯述す。
 △坪井芳洲、「膠嶽新書」を譯述す。
 △島村鼎甫、「創疾新説」を出す。
 △吉雄幸載(長崎の蘭醫)歿す(七九)。

當時幕府醫學所

頭取 松本順
 副頭取 池田元仲(謙齋の養父)
 教授 坪井芳洲(爲春)
 島村鼎甫(鼎)
 石井謙道(信義)
 相原玄海(後に花園蕭郎)
 句讀師 足立藤三郎(寛) 田代一清(基清)
 福原道節 渡邊孝一郎(洪基)
 澁谷彦一郎

世相一斑

輸入品、シャツ、タオルの模造品現はる。
 外國の米輸入さる。

明治天皇

第百二十二代
 慶應三年 丁卯 二五三七(一八六七)
 正月、明治天皇踐祚遊ばさる(十六歳)。
 十月、慶喜大政を奉還す。
 坂本龍馬(三三)、中岡慎太郎(三〇)京都にて刺さる。

※我國と北米との間の太平洋郵便船始まり、使節小野友五郎一行渡米し、福澤諭吉又之に加はる。
 遣佛使節、徳川昭武民部大輔一行出發す、醫、高松凌雲等隨ふ。
 慶應義塾建つ。
 越堀龜之助補正「改正増補英和對譯袖珍辭書」出づ。
 「ボン編譯「和英語林集成」、美國平文先生編譯として出版さる。
 尾崎紅葉、正岡子規、夏目漱石生まる。
 横濱に初めて檢査、九月、英駐屯軍保健の爲め英軍醫ニ
 ニートン Newton 指導して吉原町會所に行ふ。
 久我克明、「三兵養生論」を著はす、和蘭軍陣衛生書を
 譯述せるものにて、我國洋式軍隊衛生書の最初なり。
 杉田玄端、「健全學」六卷を出す、之は在來の養生科を
 健全學としたる洋式衛生書なり。
 江馬權國「穆氏藥論」を譯述す。
 幕府、濱御殿内に海軍養成所を建て海軍醫院川宗悦、其
 長となる。江戸に於ける洋風病院の嚆矢なり。
 開成所、外國奉行の所管となり、神田孝平、柳川春三頭取となる
 (翌年開所)。

世相一斑

編纂會、流行し始む。
 開成所、ミシンを西洋新式縫物器として獎勵す。
 佛國製石版機械輸入され、石版始まる。

△佛、デマルケ Demarquay 酸素吸入を紹介す。
 △英、エリツチセン Erichsen 鐵道脊椎症 Railway spine (外傷
 性神經症)を記載す。
 △ベルチ Berti 胃捻轉を記述す。
 △クスマウル Kusmanal ヲイヘル Mayer 結節性動脈周圍炎を記
 載す。
 △ツェンケル Zenker 鐵肺を報告す。又後年塵肺症 Pneumoco-
 niosis を獨立疾患となす。
 △リユツケ Lacke 骨髄内皮細胞腫を記述す。
 △グレイフェ Græfe 交感性眼炎を記載す。
 △ヒス His ミクロトームを發明す。

一八六七
 英、スペンサー Spencer「生物學原理」出づ。
 獨、マルタスの「資本論」出づ。
 パリに萬國博覽會開かる。

パリに第一回赤十字社國際委員會及び第一回萬國醫學會
 開催。
 ジョン・ブラウン鐵板船を作る。
 △獨、ドレスデンに精神薄弱等の異常兒に「補助學校」Hilfsschule
 設置さる。
 英、フアラデー Faraday(一七九一、物理學、電氣學)歿す。
 △佛、フローラン P. Flourens(一七九四、生理學者、生命點を
 發見)歿す。
 △佛、トルソー Troussau(一八〇一、臨牀家)歿す。
 諸、グールドベルグ Guldberg 及びワグゲ Waage 化學反應は之に
 與る物質の濃度によると云ふ「質量作用の定律」を定む。
 キップ Kipp キップ瓦斯發生器初めて作る。
 トラウベ Traube フェロシアン銅の人工的半透膜を製す。
 △獨、コーンハイム Cohnheim 白血球の血管外移出を以て炎症發
 生を論ず。
 佛、パスツール Pasteur 低溫殺菌法を發見す。
 △ホルトリニー Voltohini 電氣燒灼法を應用す。
 △リープライヒ Liebreich 催眠劑として抱水クロラルを推奨
 す。
 △英、ブランドン Brunton 亞硝酸アミールを血壓降下劑と推奨す。
 △佛、ジャヴール Javal 亂視計を發明す。
 △獨、ヤッフュー Jaffé 人尿中にウロピリンを證明す。
 △ライデン v. Leyden 脊髄癆の病變を脊髄後根に認む。
 △メエルンドルフ Mollendorf 偏頭痛に對し血管痙攣説を唱ふ。

明治時代(四五年間)

七百年の武家政治破綻して茲に皇政復古し、世事又一新す(明治維新)。斯くして地方的封建思想より豁達たる大和民族、日本國民體への進展を見せたり。

鎖國政策の棄てられて新に開國通商の條約締結され海外文化の滲透と輸入するに及びては、珍奇なる先進物質文明を謳歌せし時代もありしが、やがては之を克く攝取、同化し遂に特異なる日本文化を形成、獨立せしめたり。

明治元年(慶應四年、閏九月改元) 戊辰 二五三八(一八六八)

※正月、鳥羽伏見の戦、英外科醫ウイリス官軍の治療に當る。

※三月、五箇條の御誓文。

西洋醫術差許の布告出る。

五月、彰義隊上野東叡山に敗る。

七月、詔して江戸を東京と改めらる。

九月、明治と改元し一世一元の制定めらる。

九月、長崎清商に令して阿片煙を販賣するを禁ず。

※十月、車駕東京に着御、江戸城を以て皇居となし東京城と改稱さる。

幕府の「醫學所」は一時廢校せしも後朝廷之を收め復興して鎮將府の所轄となり、初め横濱に假設されたる軍事病院(天朝病院)は、東京下谷藤堂邸跡に移轉して「大

病院」と稱さる(院長英醫ウイリス W. Willis)是等は

共に軍務官に屬し、後東京府の所轄となる。

開成所及び昌平學も復興され後者は昌平學校と改稱さる。議定、

山内豐信、學制を査定し知學事となる。

京都蘭學醫の醫學研究會烏丸に施療病院を建つ。

大阪に病院設置さる(明治三年大阪府の所轄となる、後

の大阪高等醫學校、大阪帝國大學醫學部の起原をなす)。

蘭醫、廣瀬元恭、官軍病院々長となる。

△ポイドイン再び來朝、大阪醫學校に聘せらる。

大阪に舍衛局を置く。

△長崎精得館を政府に收む(學頭長興專賣、教頭マンスフィールド)。

△蘭人、ヘールツ Geertz 長崎醫學校に化學教師として來る(後五

年内務省衛生局に入り東京衛生化學試験所を、次で京都、横濱に

同試験所を設立するに功大なり)。

徳川、静岡移封と共に静岡學問所と沼津兵學校を設置す。

△福井登(貞憲)、明治天皇御馳役拜命す。

△田代一徳、米グロス外科全書の一部を譯して「切斷法」を著はす。

△日高涼台(蘭醫、六六堂)歿す(七二)。

△桑田立齋(蘭醫、痘科)歿す(五八)。

△三宅良齋(蘭醫、醫學所教授)歿す(五二)。

△青木研藏(蘭醫、周廻の第)歿す。

世相一斑

二月、柳川春三「中外新聞」を、四月、岸田吟香「横濱新報」を發行す。

近代諸國其文化を競ふ

第十九世紀後半——二十世紀文明

(一八六八—一九二二)

歐米には既に形成されたる近代國家各々其文化の向上に邁進し各々特異の文化を形取らんとし資本主義の發達を見たり。

清國時代

一八六八

※西班牙の革命。

露の作家ユーリキイ Gorky 佛の詩人クロオデル Claudel 生まる。

獨、キルマン Kirchmann の「現實的美學」出づ。

米國にタイプライター發明さる。

△漢、チナルタ Tark (一八一—) 神經學、耳鼻科學) 歿す。

△ポツベル Popper 發作性血色素尿症を記載す。

△佛、シャルノー Charcot 腦脊髄多發性硬化症を詳述す。又粟粒

動脈瘤を腦出血の原因とす、且つ急性梅毒を報ず。

△英、ジャクソン Jackson 皮膚癩癩を記載す。

△オーストリア Obermeier ロシアにて再歸熱スピロヘータを發見す。

ヘルム Erb 電氣變性反應を發見す。

英、アルバート Sir Clifford Albutt 小型懐中檢温器を創製す。

△ゲルヘルト Gerhardt 熱性蛋白尿症を記載す。

△ワシル Heschl 先天性腦髓穿開症 Porencephalie を記載す。

△フリートゲル W. Pfliiger (一八二九—一九一〇) マルセル三

生理學)「全生理學實験」Archiv für gesamte Physiologie を創刊す。

△ロートムンヌ Rothmund 癩皮症に白内障の合併するを報ず(ロ

ートムンド症候群)。

△ルマン Hermann 筋肉切斷面の陰性荷電に對する變性説を唱

ず(Du Bois Raymond の分子説に對す)。

△クスマウエル Kusmanul 食道鏡検査を始む。

△ノイマン Neumann 有核赤血球を骨髓中に發見す。

新選組近藤勇、板橋にて死刑に處せられ梟首さる。

明治二年 己巳 二五三九(一八六九)

※行政官以下の官制を廢し、神祇、太政の二官、民部、大藏、兵部、刑部、宮内、外務の六省置かる。

六月、造幣局置かれ、新聞紙刊行許さる。

出版圖書、新聞紙の檢閲は昌平學校開成所之を取締る。

五稜廓の榎本武揚降る。

開拓使置かる。

右大臣、三條實美。

十二月、東京横濱間電信開通。

「和譯英辭書」(所謂「藤澤辭書」)出づ。

大阪に舍密局開かる(第三高等學校、東京帝大理學部の基礎)。蘭

人ハラタマ(Gratama)之に教師となる、後舍密局を理學校と改む。

福澤諭吉、英米の新知識を以て「世界國畫」、「西洋事情」を著し

して開蒙に力む。

二月、醫學所を大病院に合し、改めて「醫學校兼病院」と

稱す。

宮中に御遊役廢止さる。

四月、舊昌平學校を「大學校」と名づけ、開成學校及び醫學校は

之に隸屬さる。

△十二月、大學校更に大學と改稱し、醫學校は其東にあるを以て大

學東校と改まり、佐藤尚中、取締となる。此時大學權判事岩佐純、

同相良知安校務を理す。

△明治元年、幕府の小石川藥園東京府の所管となり、大病院附屬御

藥園となり、今年大學校の醫學校藥園と改稱さる。

開成學校(舊開成所)は大學前校と稱さる。

△大阪醫學校を創設す(校長岩佐純)。

佐藤 進、獨逸留學をなす。

△萩原三圭、獨逸伯林に赴き大學に入る、本邦醫學生の伯林に至る

の始なり。

大阪醫學校のボードイン、初めて不邦に靜脈内注射を紹介

す。

内田正雄、「和蘭學制」二卷を著はす。

△官版「日講記聞」(ボードイン口授)、大阪醫學校より出版す。

△石黒忠憲、「穢毒新説」及び「實業鑑法」を著はす。

大村益次郎(緒方洪庵の門、醫家出身の兵制改革家)殉難す(四

六)。

世相 一斑

東京灣燈臺成り、京濱間に電信開通す。

公卿諸侯を華族と改稱し、華族以下を士族と平民とに分ち種多

の階級を廢す。

山葉氏、和製時計を創む。

俳優、澤村田之助(三代)脱疽を患ひ、ヘボンの手術を受け左

の股から切斷し、義足使用の魁をなす。

明治三年(閏) 庚午 二五三〇(一八七〇)

※二月、大學規則(教、法、文、理、醫の五科に分つ)及び中小學

規則發布。

一八六九

※米國、太平洋鐵道開通す。

※スエズ運河開通。

獨、ハルトマン V. Hartmann の「無意識哲學」著はる。

佛、畫家アンリ・マチス Henri Matisse 生まる。

露、化學者メンデルエフ Ivanovitch Mendeleev 「元素の週期

律」を發表す。

英、グラハム Thomas Graham (一八〇五—、化學者、膠質、

品質の別を明かにし、液體擴散、透折法等を發見す)歿す。氏は

尿分泌説を唱(レボマン Sir William Bowman の弟なり)。

△獨、クラウヂウス Fr. Claudius (一八二一—、解剖)歿す。

△澳、ブルキンイ Pulkinje (一七八七—、生理學に精し)歿す。

獨、レマルク R. Remark (一八一五—)歿す。

△英、ウオードロップ J. Wardrop (一七八二—、眼科、病理解剖

に貢献)歿す。

フロレンスに第二回萬國醫學會開かる。

△クスマウル Kussmaul 消息子を以て胃液を採取し、胃擴張に胃

洗滌をなす。

佛、ブロン・セカール Brown Ségur 内分泌學を

發達さす。

△英、アージェイル・ロバートソン Argyll Robertson 反射性瞳

孔(對光)強直を發見す。

△佛、シャルコー Charcot、ジエノア Joffroy 筋萎縮性側索硬化

症を記載す。

△ライデン Leyden 喘息略痰中にライデン氏結晶を認む。

ランゲルハンス Langerhans 膵臟ランゲルハンス島細

胞を發見す。

△獨、ホルネル Horner ホルネル氏症候群(眼球瞳孔症候群)を

記載す。

△エックハルト Eckhard クロッド・スルナールの延髓に於ける糖

刺は交感神經纖維を興奮せしむることを確かむ。

△レウイン Lewin 昇水注射療法を唱ふ。

△ノイマン E. Neumann 骨髄性白血病を記述す。

△リブライヒ Liebreich 抱水コロラールを催眠劑とす。

△澳、ステルワグ Stellwag バセドウ氏病の瞬目の妙きを認む。

△獨、シモン Simon 初めて腎臓手術を行ふ。輸尿管を皮膚に移植

す。

△マイネル Meinel 續肺を報告す。

△テッルモー Desormeaux 尿道鏡により尿道ゴリアを觀察す。

△ビルロート Billroth 手術後に發生せる漿液性腦膜炎 Meningitis

serosa を創記す。

一八七〇

※普佛開戰(一八七〇—一八七二)、佛蘭西敗れて帝政廢止され、續

いて共和政府となる。

※我が國旗、日の丸の制式、太政官布告により定まる。

令密局、改め大阪理學所を大阪開成所に合す。

四月、種痘を全國に行ふ。

生阿片取扱規則發布。

薄制改革。

十月、工部省設置。

平民に苗字を許す。

庶人の佩刀を禁ず。

海軍の旗章定まる。

徴兵規則を頒つ。

菊池大麓、再び英國に留學、理化學を修む。

雲井龍雄、島首さる。

△蘭醫、寺地強平、福山藩の醫學館の長となる。

△蘭醫、黒川良安、加州藩の醫學館の創設に主任となる。

大學東校、獨逸聯邦普魯西國より教師を聘せんことを建議し、允許を得て、之を普國公使ブランド Brandt の手を経て普國政府に委嘱せり。

大學東校小句讀師、田口和美、特に解剖學を始む。

△佛人、マッセ Mages 大學東校に教師として招聘さる。

△蘭人、エルメレンス Emlerius ボードインの後を繼ぎ大阪醫學校に教師として来る(後大阪醫學病院、東京病院に轉ず)。

池田謙齋、相良元貞、大石良乙、長井長義、大澤謙二、山脇 玄、佐藤 進(在獨)等十四名醫學研究の爲め獨逸に留學を命ぜらる。

△鹿兒島の醫學校設立。

英醫、ウィリス W. Willis 明治二年十二月西郷隆盛の斃にて鹿兒島に至り遂に明治三年に醫學校開成學校を設立す。

△熊本再春館を廢し、藩立古城醫學所及び病院を置き、蘭人マンズフォルドを聘す。

△新潟に共立病院を建つ。

京都祇園に私設療病館(驅微病院)建つ。

△松本順、東京早稲田に私塾蘭醫醫院を建つ。

△廣瀬元恭歿す(五〇)。

△石黒忠惠、「化學調蒙」を著はす。

△三宅 秀、「病理通論」を出す。

△松村矩明、「解剖調蒙」を著はす。

世相 一斑

和泉要助、人力車を發明し營業を開始す。

洋式採用の爲め、靴、メリヤス靴下製造し始む。

鐵輪の三輪車、續いて二輪車輸入さる。

西洋醫學の輸入(第四期)

獨逸醫學の移植と西郷隆盛及び英醫ウィリス

英醫ウィリス W. Willis (日本在住一八六一—一八一)は文久元年英國館醫員として來朝す、慶應四年伏見島羽の戦に多くの創傷者ありしも、當時日本醫術外科に不熟なるを以て、英公使パークス H. S. Parker (一八六五—一八三)ウィリスを推薦し、薩藩の傷兵を治療す。後奥羽戦争には自ら請願し、官軍に従ひ療兵に従ふ。戦亂平定後は東京の大病院長に擧げられ、兵士及び一般病者の治療に従ふと共に講義を開き生徒を教育し、喝囉仿誤麻痺、支肢切斷術等を初めて施す。石黒忠惠、池田謙齋、

※伊太利統一成る。

エドワード・フィンチ、探検に注入空氣流通機を案出す。

ガンベック、輕氣球に乗り巴里を脱出す。

露、レーニン Nikolai Lenin 生さる。

佛の戯曲作家ドューア Alex. Dumas 歿す。

英、スペンサー Herb. Spencer (一八二〇—一九〇三)の「心理學原理」アルティエーの實驗科學としての心理學」出づ。

△獨、グレイフ Albrecht von Graefe (眼科醫、一八二八—、交感性眼炎、ハセドウ氏病に於て同氏症候を記載す)歿す。

△ビルメール Biernier 「悪性貧血」を記載す。

△ヤツフェ Jaffe 尿中インヂカンの定量法を出す。

△ユルゲンゼン Jurgensen キニーネを肺炎に特效ありとす。

△ゾンメルプロット Sommerbrodt タレオント劑が結核に有效なりと提唱す。

△ハイデンハイン Heidenhain 胃底腺に壁細胞の外に主細胞を發見す。

フリッツキ Fritsch、ヒツチツヒ Hitzig 腦の運動皮質中樞を發見す。

△那威、ハンセン Armauer Hansen 癩病の病原體を提唱す。

△グレイグ Gräbe、カロ Caro 石炭タールよりアタリチン色素を分離す。

佐々木東洋等又教を受く。

明治三年、大病院大學に屬し廟議一變醫學教師を獨逸より招聘せんとするに當りウイリス病院を去る。茲に於て鹿兒島藩大參事西郷隆盛の肝煎にて鹿兒島に聘せられ、醫學校兼病院を起し醫學生の教育に盡力す。高木兼寛、河村豊洲、三田村肇、加賀美光賢等其門より出づ、同地に居ること十餘年、明治十四年英國に歸り同二十七年病歿す。

明治四年 辛未 二五三一(一八七二)

※七月、藩を廢し縣が置かれ茲に全國的の統一緒につく。

兵部省に始めて軍醫寮置かれ、松本順、綜理となり、林紀、石川良信、石黒忠惠等其下に參す。

郵便規則定まり、東京、京都、大阪、長崎間に郵便始まる。海軍水路部を設く。

大學を廢し文部省を置く、大木喬任、文部卿に任ぜらる。工部省に工學寮を設け、虎の門内に工學校を置く。

右大臣兼特命全權大使岩倉具視等歐米に差遣さる(長與專齋等之に隨ふ)。

三府七十二縣とす。

國木田獨歩、島村抱月生まる。

八月、普國より陸軍々醫外科醫ミヤルレル Leopold Muller、海軍々醫内科醫ホフマン Theodor Hoffmann 聘に應じて來朝し學制を整ふ。

△大學東校に種痘局設く。

八月、大學東校は單に「東校」と改まる。

熊本洋學校創立、米人チエーンズ Tanner 教師として來る(五年後、大阪英學校に一年にして歸國)。

△伊東玄朴(蘭學醫、種痘所設立の功勞者「醫寮正始」を著はす)

歿す(七一)。

△川本幸民(氣海觀瀾廣義)、「理學原始」、「會審讀本」、「依百乙人身窮理」等著はす。歿す。

△緒方郁藏(坪井誠軒の門、緒方洪庵を助く)歿す(五八)。

△鹽田順庵(醫、函館に病院を建つ「海防彙編」等著はす)歿す(六七)。

△和蘭醫官、滿斯歌爾篤氏譯「病理略論」大學東校より出版す。

△土岐頼徳、米英醫書により「啓蒙養生訓」(衛生書)を撰述す。

世相 一班

東京、京都、大阪間に郵便初めて設けられ郵便切手四種を發行。官員の歳祿を月給制に改めらる。

紀州ネル、アンパン、セメント、ソツア等の製造始まる。横濱に初めて共同便所設けらる。

明治五年 壬申 二五三三(一八七二)

※學制頒布(全國を八大學區に分つ)。

教部、文部二省を併す。

大陰曆を廢し太陽曆を用ひ、晝夜十二時を二十四時に改む。之廣川晴軒の建議による所多しと云はる。

五年十二月三日を以て紀元元年とす。

※神武天皇即位の年を以て紀元元年とす。

三月、開成學校に臨幸あらせられ、從來南校教頭として盡力を盡す勳語をフルベッキに、又ガロー外十八名の外國教師に生徒教育盡力を盡すとの勳語を賜はる。

一八七一

※香港、上海間海底電線成る。

※獨逸國統一完成、プロシヤ聯邦の覇を握る。

英國、強制的種痘法を布く。

獨逸外科學會創立さる。

ヘルマン・コーエンの「カントの經驗に關する理説」出づ。

△ニーマイエル E. Niemyer (一八二〇)、氏の創製せるコレラ滴劑知らる)歿す。

リスター氏説により石炭酸噴霧器、石炭酸防腐繻帶發明さる。

△佛、シャルコー Charcot 頸部肥厚性脊髓硬膜炎を記載す。

△米、ハムモンド Hammond アナトーゼを初めて記載す。

英、ダーウイン Darwin 「人類の由來」を公にす。

△シカルツェ S. Schulze 假死生兒に對し振搖法を創む。

△フリードリッヒ Friedrich コンヌランゴを健胃劑とす。

△佛、トウロアジエ Troisier 皮膚及び臟器に色素沈着、肝臟腫大を示す糖尿病 la cirrhose pigmentaire dans le diabete sucre を記載す。

獨、カロー H. Caro エオジンを創製す。

一八七二

獨佛新協定成る。

オイケン Eucken の「アリストテレスの方法」、ニイチキ Nietzsche の「悲劇の出生」著はる。

埃人バイエル及びウアイブレヒト極地探検の途に上る。

支那最初の海外留學生三十名米國に赴く(以後四年三十人宛留學す)。

ウィーンに第三回萬國醫學會開かる。

獨逸國藥局方成る。

アッペルマン Appell 顯微鏡油浸裝置を發見す。

開拓使假學校を芝罘上寺内に置く(札幌農學校の源)。兵部省を廢し陸軍省、海軍省分置さる。海軍々醫を置く、石神良策之を理す。司馬渡海、日本最初の獨和對譯辭書小田共著「素和袖珍字書」出版さる。今年、米、英、佛、獨、魯、蘭、清の七ヶ國に留學するもの三百八十餘名と云はる。東京師範學校創設に當り、米人スコットの女子大學南校より轉籍され、之に盡瘁し日本師範制度制定に貢獻す。△大學大承兼大學大博士佐藤尙中、岩佐純に代りて東校々務を理す。東校、又八月「第一大學區醫學校」と改稱す。△佐藤尙中、官を辭して下谷に開業す。十月、文部省五等出仕相良知安、再び校長となる。南校は「第一大學區第一番中學」と改稱さる。△獨人ニールウエルト Newirth (藥物學者) 等醫學校兼科に招聘さる。京都蘭學醫の醫學研究會、青蓮院に假病院を開き、獨人ランゲック Junker von Langegg を招聘して生徒を教育す。大阪開成所及び大阪醫學校を第四大學區第一番中學及び同區醫學校とし、後、後者を廢す。△高橋正純、大阪府公立病院長となり、エルメレンスと協力院務をとる。△長崎醫學校を第六大學區醫學校とす。

△米、ハンチントン Huntington 舞蹈病と區別すべき遺傳性ハンチントン氏舞蹈病を記載す。米、ミッチェル Weir Mitchell エリトロメラギー Erythromelalgia を記載す。△英、ガル Gull Sutton 細小血管纖維化 Arterio-capillary fibrosis (血脈尤通と關係あり) を記載す。佛、ジャンネー Janet 尿道灌注法を提唱す。△エーベルト Eberth 胎生の腎臟混合腫瘍を記載す。△モンロ Monroe 徽毒性脊髄炎を記載す。△デソー Desault 喉頭切除術を行ふ。△佛、デュプレイ Duplay 肩胛關節周圍炎を記載す。△リッテル Ritter コリルピンを含有せざる白色膽汁の症例を報ず。△ロイヤ Leube 直腸瘻管を始む。シキレーテル Schröter 在來の液體培養基に新に固體培養基に馬鈴薯を用ふ。エルブ Erb 電氣變性反應を發見す。

△藩立醫學校を廢せしむ。徳川の沼津兵學校解散す。大阪合密學校廢さる。佐藤泰然 (蘭醫、外科を専攻し、佐倉侯に聘せらる) 歿す(六九)。本間重軒 (蘭醫、水戸の醫學教授) 歿す(六九)。△東校醫院官版「治驗錄」出版さる。△森鼻宗次、米、ハルツホルン氏内科書より「華氏日用新方」を抄譯す。△文部少教授松村矩明等、英、廣列伊氏解剖調蒙圖(啓蒙義舎藏版) 出づ。△中欽哉 (大阪眞養病院) 譯「布列私解剖圖譜」出版さる。△杉田玄瑞譯、桑田衡平閱「癰疽治範」(英米醫書抄譯) 出づ。△米醫ペリー J. Barry 傳導醫師として京都同志社病院に来る(明治二十六年歸國する迄病院、監獄、看護婦學校等に貢獻す)。

世相 一斑

明治五年九月十二日新橋、横濱兩停車場に臨御、東京横濱間鐵道開業式を舉行され兩所に於て勅語を賜ふ。翌十三日より新橋横濱間の運輸を行ふ。行燈に代り石油ランプの使用流行す。東京市に養育院設けらる。二月、東京日日新聞、六月、報知新聞創刊さる。ビール、瓦斯、石炭採掘、齒磨粉等の事業始まる。

明治六年 癸酉 二五三三 (一八七三)

※徴兵令發布。

内務省設置。

學制改正し、小學校起る。

文部省に醫務局を置き、長與專齋、衛生、醫制の事を掌る。

神武天皇即位の日を以て紀元節と定む。

十月、開成學校(大學の前身)に臨幸あらせらる。

※征韓論起る。

西郷隆盛、副島、後藤、板垣、江藤等參議辭職す。

岩倉大使等歸朝す。

切支丹禁制高札廢さる。

佛人、ボアソナード Boissande 來朝、司法卿明治寮内、法律學校教師となる。

福澤諭吉、加藤弘之、中村敏吉、西周等學術雜誌「明六雜誌」を創む。

第一大學區第一番中學を開成學校とし、工業諸藝嶺山各専門學科を置く(理科、工科の礎をなす)。

英人、ダイバース Divers 工部省工學校の招聘により來朝(引續き帝國大學に勤め本邦無機化學研究の基礎を作る)。

佐倉順天堂、湯島に病院を設く。

△七月、東校に解剖學教授デーニッツ Wilhelm Doenitz 來朝し十月、東京府囚獄懲役場及び養育院の病屍解剖を允許す。

八月、陸軍省に軍醫學校を置き、蘭醫ブオケマ大阪より聘せらる。緒方惟準教授として着任す。

海軍病院にウィリアム・アンダーソン William Anderson

教師として聘せらる。

△東京府病院、芝愛宕下に設けらる(院長岩佐純、佐々木東洋補となる)。

△醫學校に製藥學教場を再設す。

△名古屋西本願寺別院に病院、次で醫學講習所を開設す。

坪井信長「醫事雜誌」を刊行す(我國醫事雜誌の嚆矢)。

△浦谷義春、水口貞義「米、斯密士氏解剖新圖」(銅版、着色)出版さる。

△和蘭教師、亞爾農斯講義「原病學通論」出版さる。

森鼻宗次、ウード・スチール・エリクセン・ハルツホルン等の著書を翻譯して「皮下注射要略」を著はす。

△石黒忠惠、諸洋書を涉獵して「外科略説」二十八卷を著はす。

△岩佐純、獨、ニーマイル氏内科書に據り「急性病類集」を纂著す。

△柏原玄弘(シーボルトの門、讃岐の人)歿す(六六)。

△ホフマン、デーニッツ兩氏、十一月十二日初めて開氣室間歇熱患者を病理解剖す。

世相 一斑

人口 三三、三〇〇、六七五人

戸數 七、一〇一、三三〇戸

此年より従來の大陰曆を廢して太陽曆を用ふ。

仇討禁止令出る。

外國人との結婚許さる。

五節句を廢し新たに休日定めらる。

郵便に葉書と封書始まる。

一八七三

英、スベンサー Spencer の「社會學研究」、スツムアの「空間表象」著はる。

※ウキンに萬國博覽會開かれ、我國始めて國際的參加をなす。

英、マクスウェル Maxwell 「電磁氣學」を公にす。

獨、リップマン Lippmann 毛細管電力計を案出す。

△獨、リービッヒ Justus von Liebig (一八〇三—、生物化學の開祖)歿す。

△獨、ロムベルグ Romberg (一七九五—、神經學者)歿す。

△佛、ネラトトン Aug. Nélaton (一八〇七—外科醫、彈性カテーター、ブージーの發明者)歿す。

△上海に猩紅熱發見さる。

△ホフマン Theodor Hoffmann (日本に來たる最初の獨人教師)日本の脚氣を記述す。

△オーベルマイエル Obermeier (ウイヒョーの門)回歸熱螺旋菌發見。

△英、ガル Sir William Gull 粘液水腫を記載す。

△ブラクレー Blackley 枯草熱を報告す。

△マイエル W. Meyer 腺樣增殖症を記載す。

獨、ケクレー Kekulé 樟腦の化學構造式を初めて提唱す。

アッペ Abbe 顯微鏡の集光器を考案す。

エスマルヒ Fr. v. Esnarch 驅血法を案出す。

△伊、セルミ Francesco Selmi プトメイン(屍毒)を發見す。

澳、ヒルロート Hillroth 喉頭全剝出に成功す。

△リンデマン Lindemann 陰室の潰瘍性結核症を記載す。

△ナウニン Naunyn 理學的處置をなせる血液の注射による毒性を認む。

△米、ビーヤス Beers 繼續齒に金冠を應用し特許を得。

シュワルツ Schwartze 乳嘴突起開整術を始む。

△エルプ Erd 分鏡麻痺として神經叢傷害を記載す。

國産鉛筆初めて出る。
カナダのメソヂスト教會の最初の宣教師醫師マクドナルド D. Macdonald 横濱に来る（一九〇五年旅順陥落の報に喜び過ぎで頓死す）。

明治七年 甲戌 二五三四（一八七四）

- ※東京警視廳を置く。
- 佐賀の亂起る（江藤新平反す）。
- 板垣退助、土佐に歸り立志社を創立す。
- 初めて巡査を置く。
- 太政官達の救恤規則出づ。
- 電信條例定まる。
- 萬國郵便同盟へ調印す。
- △内務省蠶業試験所、東京衛生試験所を設く。
- ※臺灣征伐、日支に臺灣談判成る。
- △五月、東校、東京醫學校と改稱す。
- △八月、醫制を定め醫學教育、衛生事務を文部所管とす。
- 九月、相良知安、官を退き隠棲す。
- △九月、文部省四等出仕、長興專齋東京醫學校校長となる。
- △十月、長崎醫學校（精得館）を東京醫學校に合併す。
- 開成學校を東京開成學校とす。
- 内務省、内藤新宿に農事修業場を置く（駒場農學校の基礎）。
- △東京に司藥場を設け、獨人マルチン G. Martin 之を監理し輸入薬を検査す、又牛痘種蠱所を創設す。
- 英、アトキンソン Atkinson 東京開成校に来る（明治十四年迄

一八七四

- ※英、東印度會社を解散す。
- スタッドラウの「カント目的論とその認識論上の意義」、プートル「自然法則の偶然性」出づ。
- 蘭、フアント・ホッフ vant Hoff 佛、ル・ベル共に獨立して有機物の旋光性と不齊炭素原子の關係を認め立體化學論の端緒をなす。
- 獨逸、強制的種痘法を布く。
- 佛國、職工保護規則を設く。
- 獨、ブロー K. Burow（一八〇九、外科、醋酸礬土液）歿す。
- △佛、クリュウエリ Crivellier（一七九一、病理學、胃潰瘍の記載をなす）歿す。
- △エスバツハ Esbach 蛋白の定量試験を創む。
- △ワン・レイント van Leent 蛋白及び新鮮なる野菜の不足が脚氣の原因と説く。
- △ハイブネル Heubner 血管微毒を記載す。
- △獨、ウエルニッケ Wernicke 感覺性失語症を記載す。
- △エーワルド Ewald 硬質護膜製胃消息子を發明す。
- ホルベ Kolbe サリチル酸の製法を簡單にす。
- △クスマウル Kusmanul 糖尿病性昏睡を記載す。

- 在任、化學科を創設す。
- △山川健次郎（物理）、大澤謙二（醫科）等留學より歸朝す。
- 京都の研究會假病院寺町廣小路に移り病院及び學校設立す（府立醫科大學の基礎）、而して京都府は我國最初の醫師試験制度を行ふ。
- △堺縣に醫學校及び病院設立され、蘭學醫森泉次之が長となる。
- △千葉に共立病院設立す。

- ウエルニヒ Araton Wernick ホフマンの後任として東京大學に來り教授す（明治九年迄）。
- シユルツ Wilhelm Schultz ヌルレルの後任として東京大學に來り外科學を教授す（明治十四年歸國）。
- △和蘭醫、エルメレンス歸國す。
- △マンズフェルド、熊本醫學校を辭す。
- △廣瀬元周、英、合信の「婦嬰新説」の和訳を出す。
- △石川良信（蘭學醫、法印、軍醫監）歿す。
- △高橋正純（大阪公立病院）、「日語記開皮膚病論」（米グロス原本）出版さる。
- △和蘭人醫、エルメレンス講義「原病學通論」九巻出版さる。
- △坪井信良、清國醫書美國嘉約翰口譯「内科關微」を再譯出版す。

世相 一斑

北海道に屯田兵制度を布き開拓と警備に當らしむ。
東京に街路樹始まる。
京都府々令で石鹼の使用を奨励す。

- △ハルトウイック Hartwig 間歇性脊髄性麻痺 Intermittierende spinale Paralyse（定期性四肢麻痺）を記載す。
- △レノツホ Henoch 腹性紫斑病を精述す。
- △カレルバウム Kahlbann 緊張病 Katatonie, Spannungskrisen を記載す。
- △クロローネツケル Kronesker 心臓筋肉の強直せざることを證す。

大阪、神戸間鐵道開通。

明治八年 乙亥 二五三五 (一八七五)

元老院、大審院を置く。

※露國との間に千島、樺太の交換成る。

新聞紙條例制定す。

新島襄、同志社を京都に立つ。

東京調音院、皇室の内帑金を賜はり設立さる。本邦盲啞學校の嚆矢。

開拓使假學校を札幌に移し、札幌農學校とす。

△中央氣象臺、大阪衛生試験所を設く。

衛生事務は文部省より内務省に移る(衛生局)。

△長興專齋、衛生局長となる。

五月、東京醫學校醫學通學生教場を開き邦語を以て醫學を教授す(別科設置)、學に入るもの六十名。七月豫て允請の校舍本郷舊加州邸内新築經營に着手す。

△十一月、ミヤルレル Muller 獨逸に歸る。

長谷川 泰、洋方醫學を速成教授する私立醫學校濟生學舎を東京小石川春日町に設立す。

△京都に官立司藥場設立され、長崎精得館に居りし蘭人、ヘールツ Greets 特派され模範藥局を新設す。

京都の梅津製所初めて洋紙を製造す。

△獨、ランガルド Langard 東京醫學校製藥化學教師として招聘さる(明治十四年迄)。

京都に癩狂院創立され、獨人、ラングマク Langemak 院

長真島氏と共に精神病治療に貢献す。

名古屋西不願寺別院内病院、愛知縣病院となり、之にロ

ーナン Albert Koretz 着任す。

△英、マンニング Manning 東京府病院外科に来る(明治十三年迄)。

△英、バーム Palm 新潟に來り傳導と醫務に従事す。

醫學會社生まる。東京府下の一流醫家(松本 順、佐藤尙中、林紀、杉田玄端、長興專齋、戸塚文海、佐々木東洋石黒忠憲、三宅 秀、緒方惟準等五十餘名)相集りて醫學の發展に資せんとする學會を組織す。

高木兼寛、海軍省より英國に留學を命ぜらる。

小幡英之助、米國齒科醫に學び東京に齒科醫を開業す。

△石坂堅壯、肝臟デストマ蟲を發見す。

△高橋正純、岡、エルメレンスの講述を「産科論」として出版す。

△寺地強平(福山藩、蘭醫)歿す(六七)。

△橋本榮建(長崎、蘭醫、後京都に移る)歿す(七三)。

△後藤梧桐庵(本草物産學者)歿す(七五)。

世相 一斑

郵便爲替、貯金始まる。

選卒、巡査と改む。

清水誠、マツナの製造を開始す。

東京女子高等師範學校開校す。

福澤諭吉、「文明論之概略」出づ。

一八七五

※佛國共和憲法の制定成る。

佛の畫家ミレー F. Millet (一八一四—) 逝く。

獨、ランゲ A. Lange (カント流哲學者「唯物論史」等あり) 歿す。

△ブリュッセルに第四回萬國醫學會開かる。

「獨逸醫事週報」創刊する。

△佛、ブシヤンヌ Duchenne (一八〇六—、神經學) 歿す。

△印度にカラ・アザールの流行あり。

△ウエストフール Westphal 脊髓癆に膝蓋腱反射の消失を認む。

米、ポウディチ Howditch 心臓筋肉の「悉無律」を發表す。

△露、ロエシ Laech 人腸内にアメーバの寄生を認め、其病原性なると然らざるものとを區別す。

伊、ボオロ Porro (Maland) 帝王切開術を案す。

ワイズマン Weismann 生殖細胞と體細胞を區別す。

△ステファン Staphen 乳幼児の脊柱に沿へる肺部の肺炎を線條肺炎 Streifen-pneumonie と命名せり。

△エーワルド Ewald 助膜炎に穿刺術を行ふ。

△エルブ Erb 痙攣性脊髄痲痺 spastische Spinalparalyse を報告す。

△ブリヤール Phagoc 發光バクテリアを發見す。

△タリヌス・Kiss 硝子體を以て局所を壓迫し該部の血色褪色に

要する脈を其毛細血管脈とする測出法を案出す。

獨、フォイト Voit 保健食 Kostmaas を定む。

獨、ランドア Landois 異種血液の輸入による溶血作用を發見す。

△獨、エルブ Erb 痙攣性脊髄痲痺は脊髄側索硬化によるとなす。

明治九年(閏) 丙子 二五三六 (一八七六)

※日曜日は休暇、土曜日は半休の令。

※満二十歳を以て丁年と定む。

※東北巡幸。

熊本の亂。

安井息軒歿す(七八)。

醫術開業試験法を設く。

△米、アダムス Adams 大阪に來り傳道と施療をなす。

△六月、陸軍々醫監兼文部省出仕池田謙齋、東京醫學校々務に

參ず。十二月本郷の建築略竣工して移轉す(下谷和泉橋の舊藤堂

屋敷より)。

ベルツ Erwin Backz ウェルニツヒの後任として東京醫

學校に着任し(明治十七年一度歸國し、十八年再び來朝

明治三十五年迄醫科大學教師をなす、歸國後大正二年六

四歳にて歿す、明治三十三年勳一等瑞寶章を贈らる(、内

科及び産科を擔當す。

東京醫學校より初めて岡 玄卿、宇野 朗、三浦省軒等

二十五人の醫學士を出す。

矢田部良吉(植物學)、米國より歸朝す。

池田謙齋歸朝す。

△娼妓檢査法實施さる。

戸塚静海歿す(七八)。

△松村聖明譯、高木玄真撰「解剖摘要」(米、ニール氏、スミス氏書

の譯述)大阪より出版さる。

△佐々木東洋、「内科提綱」(獨逸、悉密寫書)を譯述す。

△小林義直、「産科摘要」を譯述す。

△柏原學而、「耳科提綱」を出す。

世相 一斑

東京府立病院内に産婆教授所を設け志望者を募る。

帶刀嚴禁さる。

金鐘公債、華族四八四人、士族四十萬八千八百餘人に分たる。

煙草に課税、販賣煙草に收入印紙を貼用す。

明治十年 丁丑 二五三七 (一八七七)

學習院開校さる。

一月三十日、孝明天皇祭京都に行はる。

※二月、西郷隆盛叛し西南の役起る。戰に敗れ自刃す(五一)。

佐野常民(緒方洪庵の門に學ぶ)等「博愛社」を起し、

官、賊軍の區別なく傷病兵を救護す(日本赤十字社の起

源をなす)。

内國勸業博覽會開かる。

七月、工部省工學校を改め工科大學校開校式。

初めて三人の理學士(卒業)出づ。

農事修業場を駒場農學校に改む。

内務省西ヶ原に樹木試験所を置く(東京山林學校)。

△大阪に西南の役傷兵に對する臨時病院開かる(石黒忠惠、佐藤進、

一八七六

※英王、グイタトリア印度帝と稱す。

米、フィラデルフィアに博覽會開催。

米、グラハム・ベル A. Graham Bell (一八四七—一九二二)電

話を發明改良す。

△トラウズ Ludwig Traube (一八一八—、細胞病理學者、二重音、

半月部)歿す。

△ペール K. E. von Baer (一七九二—、解剖學)歿す。

△佛、アンドラール G. Andral (一七九七—、臨牀家)歿す。

△獨、ストロマイエル Louis Stromeyer (一八〇四—、外科)歿

す。

△獨、エーレンベルグ G. Ehrenberg (一七九五—、醫學、動物

學、ベルリン大學醫學教授)歿す。

△獨、ペール Max von Baer 「行刑衛生」を著はし世に問ふ。

獨、ロベルト・コッホ Robert Koch 脾脫疽菌を培養し

胚種説を實證す。

獨、ニツツェ Max Nitzze 膀胱鏡を發見す。

△パンクロフト Bancroft フイアラリア・パンクロフトイの母蟲を發

見す。

△トムゼン Thomsen 先天性筋強直症を記載す。

佛、バクレン Paquelin バクレン焼灼器を發明す。

△佛、アーノール Hanot 黃疸を伴ふ肥大性肝硬變を記載す。

△メックカルト Eckardt 間腦乳嘴體を刺殺して、多尿を起すを見出

す。

△ギル Boll 視紫質 Sehporpura を發見す。

△伊、プロフエタ G. Profeta Genoa 微毒の母よりの健康兒は其

母乳によりて微毒を感染せざるを認む。

△ラベラン Laveran 腎臟囊腫と腫瘍を區別す。

△シアルコト Charcot ヘルプ氏と無關係に癩癩性脊髄麻痺を報ず。

澳、ヘブラ Hebra 「皮膚病圖譜」(一八五八—一八七六)

出版さる。

米、セーヤー Sayre ギブス製コレットを發明す。

獨、キエーネ Kühne トリプシンを發見す。

サロモンゼン Salomonson (ロンハイムの門)細菌の染

色にアニリン色素を用ふ。

一八七七

※露土戰爭始まる。

ダンプに第五回萬國醫學會開かる。

△英、フアーガットン Sir W. Ferguson (一八〇八—、外科、殊

に整形外科を樹立す)歿す。

△獨、ホフマン K. R. v. Hofmann (一七九七—)歿す。

獨、ウンデルリッヒ Karl August Wunderlich (一八

一五—、診斷學に貢献す)歿す。ライプツヒ大學に内

科學を講じ、日本に於ける獨逸醫學の移植者ベルツ氏、

又我國にて愛讀されたる内科書の著者ストリュンベル

Strumpell 又其門下なり。

△獨、フォルクマン Volkmann (一八〇〇—、生理學)歿す。

日本海軍、韓國釜山に濟生院を設立し内地人の外朝鮮人

佐々木東洋、橋本綱常等活動す。

△虎列刺豫防心得、府縣に通告さる。

四月十二日、東京開成學校(神田錦町)東京醫學校を合併して「東京大學」となし法、理、醫、文の四學部に分つ。

△東京醫學校長、池田謙齋を東京大學醫學部総理に、東京醫學校心得、長興專齋を同総理心得に任ず。

△獨、ギールケ(Gierke)デーニッツに代り東京醫學校の解剖學及び組織學教師として來朝(明治十三年迄)。

△獨、チーゲル(Tieger)東京醫學校生理學教師(衛生學を含む)として來朝(明治十六年迄)。

△獨、エイクマン(E. F. Eyskman)内務省衛生局の招聘により來朝、長崎化學場の教師となる(十一年内務省司藥場長、東京大學醫學部に化學、製藥學、藥劑學を講ず、日本藥局方編纂に功あり)。

△米、モールズ(Morley)東京大學理學部動物生理學教師として招聘さる(後人類學科を創始し、具塚等の發見をなす)。

菊池大麓歸朝す。

太田雄寧、二月二十五日「東京醫事新誌」を發刊す。

△ウエルニツヒ(Wernich)脚氣と米食の關係を説き、其攝取量の過大にして消化障礙によるとなす。

佐藤進、ベルツ(Belz)各獨立して人血絲狀蟲を報ず。

石黒忠應、手術用腱線を發明す。

大槻如電、「日本洋學年表」を編著す。

△美濃、江馬元齡「醫藥科語便要」を著はす。

△清國にコレラ流行し、遂に日本諸港に入來す。

東京大學醫學部不科に於ける教師は左の如し。

「外科」シカネン Wilhelm Schultz、「内科」ヤルム Erwin Baelz、「化學」ランガルト Alexand Langgard、「生理學」チーゲル Ernst Tieger、「解剖學」ギールケ Hans Gierke、「物理及び數學」シエンニル Leopold Schendel、「獨逸及羅甸語學」ラング Rudolf Lange、「製藥學」マルチン Georg Martin、「獨逸及び羅甸語學」マーマット Paul Mayer、「博物學」アールフル Hermann Ahlburg、「製藥化學及び算術」ヨルシカルト Oskar Korschelt。

日本人の教師としては三宅 秀、桐原眞節、櫻村清徳、田口和美、大津謙二等ありしも共に別科の教授に當りたり。

世相 一斑

寫眞流行し、舞踏會、バザール初めて行はる。

田口卯吉、「日本開化小史」出づ。

日本數學會社(學會)成る。

明治十一年 戊寅 二五三八(一八七八)

參議兼内務卿、大久保利通暗殺さる(四九)。

陸軍士官學校落成す。

東京化學會生まる。

林業試験所を設く。

京都市立官廳學院設置。

米、フェノロサ Fenolosa 東京大學に哲學、政治、經濟開講(後日本美術を研究し斯界を刺戟す)。

「日本西教史」(太政官翻譯局)出づ。

大槻磐溪(七八)、菊池尊齋、青木南溟歿す。

△初めて製藥士九名出る。

△名古屋の醫學所公立醫學校となる。

△米人、カッター Cutter 札幌農學校に醫學を擔當す(二十年迄)。

をも診療す、これ朝鮮に於ける西洋醫術に依る最初の病院なり。

露、エック Eck 門脈と下大靜脈を連結するエック氏瘻管形成手術を創む。

△ベッフェル Pfeffer 温度と滲透壓の變化を發見す。

△ツェンケル Zenker 脱出性食道憩室を記載す。

△佛、バストール Pasteur 悪性水腫菌を發見す。

△フシアー Bouchard キンヤルト Gimbert クレオソットを結核に染む。

△英、マンソン Manson フイラリア病の傳播は蚊によるとなす。

△フオルクマン Volkman 直腸癌手術に腹背併合術式を創始す。

後、佛、Oudin により樹立す(一八九九)。

英、ページェット Paget 骨に於ける同氏病を記載す。

ベルグマン E. v. Bergmann 昇汞消毒法を發明す。

ロッセン Loosen 血友病は女子によりてのみ遺傳し、其女子は出血者に非らず、男性のみ出血者にして健康なる家族の女子と結婚する時は其出血素質を遺傳せずとなす。

細菌の發見により創傷傳染は腐敗、酸酵によりて起るものに非らずして細菌によりて招來することを知るに至る。此新しき知識の開發は又細菌學の目覺しき發達を喚起したり。

一八七八

ベルリン會議。

巴里に萬國博覽會開催さる。

エヂソン、蓄音器を發明す。

佛、生理學者クロード・ベルナール Claude Bernard (一八三一)歿す。

ロキタンスキー Karl von Kokitsansky (一八〇四)。

ウィーン・ブラーグ派の創始者、病理學者(歿す)。

獨、ウェーベル(兄) H. Weber (一七八五)。

迷走神經の心臟制止作用を明かにす(歿す)。

獨、マイエル Robert Mayer (一八一四)。

嘗つて和蘭船醫をなし理學に精し、エネルギー不滅則を立つ(歿す)。